



Title	アリストテレスの様相存在論：ロゴスとエルゴンの相補的展開
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 150, 1(左)-157(左)
Issue Date	2016-12-15
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.150.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63890
Type	departmental bulletin paper
File Information	150_01_chiba.pdf



アリストテレスの様相存在論 —— ロゴスとエルゴンの相補的展開 ——

千 葉 恵

「魂が自らに即し観察し、清浄かつ永続するものであってそして不死かつ同一性においてあるものに赴き、魂がそれと同類のものであるとしてかのもとの共になるときはいつでも、まさにこのようなものどもに触れていることによって、魂はそれ自身に即して自らとなり、自らによって立ちそしてその彷徨はやみ、魂もまた常に同一性においてある不変のものとなるのではないか。そしてまさに魂のこの様態が「賢慮(*phronēsis*)」と呼ばれた。……[アナクサゴラスの] 叡知(*nūs* ヌース)が万物を秩序づけている以上は、いかにあるのが最善かというまさにその仕方でも秩序を与え、然るべき場所に配置しているはずである。……ところが、この書を読み進むと、このひとは叡知を何ら役立てず、事物を一つに秩序づける根拠をヌースに帰すことなく空気とかアイテールや水やその他多くの場違いのものを持ち出してそれらを根拠だとしていた。……私[ソクラテス]はこのもの[「事物が最善に配置され今この仕方でも置かれていることを為しうる力」]から見放され、自ら発見すること(*heurein*)も他のひとから学ぶこと(*mathein*)もできなかったのも、ついに根拠探求の第二の航海(*ton deuteron plūn*)に乗り出した。……私は存在するものを観察すること(*ta onta skopōn*)に失敗したので、ひとびとが蝕を受けているあいだ太陽を研究し観察することによって蒙のと同じ目にあわないように注意を払わねばならないと私には思われた。というのも、もし水や何かそのようなものによってそのものの似像を観察するのでなければ、或る人々はどこかしら目を損なってしまうからである。私は何か

そのようなことを考えてそして私はこの肉眼で直接に事物を見る仕方とか、個々の感覚によりものごとくに直接に触れようとする (*haptesthai*) なら、魂はそれ自身の見る力を失い盲目になってしまうと恐れた。そこでロゴスへと逃れて、かのものどもにおいて存在するものどもの真実を観察しなければならない (*chrēnai eis tūs logūs katapheugonta en ekeinois skopein tōn ontōn tēn alētheian*) と私には思われた。そのとき私がそれによって「魂が盲目になると」比較なぞらえるものは恐らく或る仕方では似てはいないであろう。というのも私はロゴスにおいて存在するものを観察しているひとを「魂の感覚の」諸エルゴンにおいて観察するひと (*ton en tois ergois*) よりも一層似像において観察していると同意することは決してないからである。……そのつど私が最も堅固である (*errōmenēstaton*) と判断した言論を前提とし、問題が根拠についてまた他のものであれ、そのロゴスと一致するよう思えたものを真と定める」(プラトン *Phaedo*, 79d, 97c, 98b, 100a)¹。

序 アリストテレスの包括的存在論の構想

アリストテレスは「在るもの」をそれ自身として即ち「在る限りにおいて (*to on hei on: that which is qua being*)」考察する学があると言う (*Met.* IV1.1003a21f)。「AはBである」と語るとき、言語次元において「である」は主語と述語を結びつける「繫辞 (copula)」と呼ばれる役割を果たす。それは世界の側でAがBとのあいだに包摂関係であれ一時的であれ何らかの同一性においてある場合にそう発話されるなら、その繫辞は言明の真理を伝える。その否定の言明「～であらぬ」が対応する世界の事態を表現しているなら、それも真を伝える。言語次元において「ある」がどれだけ語られるかは言論を吟味する弁証術の文脈において疑問詞の数に対応して枚挙される。述語の主語に対する述べ立ての種類は「述定の類」として十種類があるとされる。そしてそこから「存在者 (在るもの) の類」と呼ばれるものが十種類導出される。そして世界の側におけるあり方にも力能においてある場合とその力能が働いてある場合、そのような存在様式の判別も遂行される。

言語と世界の側の関係を秩序づけるものも「ある」であり、アリストテレスは種々の「ある」が語られる文脈を提示して言う。「在る (*to on*)」そして「在らぬ (*to mē on*)」はかたや述定の類に即して、他方これらの力能或いは実働に即して、或いはその反対物〔範疇や様相の否定〕に即して語られるので、「最も統帥的な仕方である (*to kuriōtata on*)」は真か偽である。だがそれ〔真偽〕は事物のうえで結合されることによって或いは分離されることによって成り立つ」(*Met.* IX10.1051a34-37)。このように「ある」や「あらぬ」は世界の側の在り方によって言語次元のその語の使用が統帥されるそのような不可逆的な関係においてある。

日常において「ある (存在)」ということがとりわけ問題となるのは何か「Aがある」とか「あらぬ」かという「がある存在」の文脈においてであるように思われる。もちろんそこでも言明の真偽は世界の在り方により統帥されているが、事物のがある存在はその事物の発見によりその問いが終息するそのようなものである。アリストテレスは「がある存在」例えばAがあるを発見的探求論の文脈において扱うが、Aが発見される時、「がある存在」だけが発見されることはなく、常にその付带的、自体的属性を伴って発見される。それ故に、存在文「Aは存在する」は平叙文「AはBである」によりそれが真である場合には含意されることになる。

彼が存在のロゴス即ち存在論の構築を企てるとき、「～である」という述語用法をも含め何であれ「ある」と語られるものすべてが考察の対象となる。そのためには「ある」の対義語である「あらぬ」さらにはその途上とも言える「成る (なる)」や「滅する (なくなる)」をも視野にいれた包括的な存在者、非存在者さらには生成消滅者についての学が探求されている。しかもそこでは個別科学の対象として例えば自然科学における「動くもの」としてや幾何学における「大きさ」を占めるものとしてではなく「存在 (ある)」という視点からあらゆる存在者を説明する理論が求められている。これは伝統的に「存在論」と呼ばれる哲学固有の学的営みである。

アリストテレスは『形而上学』において「在るもの (*to on*) とは何か」を問い、その考察方法と考察対象を特定して言う。「在るものを在る限りにおい

て (*to on hē(i) on*) そして在るものに自体的に内属するものどもを理論的に考察する或る学がある」。「存在 (ある)」についての網羅的、包括的にして秩序ある分析が遂行されれば、その学は成功であると言える。「在る」は多くの仕方で語られる」は彼の存在論の標語であり、探求の端緒を表している。そこでは「第一に在るもの (*to prōtōs on*)」(1028a30) としての実体と属性の判別が遂行される。他方、「在るもの」はそれが「一で「在ること」」の根拠の探求において、さらに「在るもの」は存在様式「在り方」に即しても分類され、考察対象となる。その三つとは実体と属性の範疇分類の視点、因果的に一で在ることの根拠の視点さらには力能や実働など存在様式の視点である。これら存在論の三つの視点は「第一に在るもの」、「一で在ることの根拠」さらには「一である仕方」とアクセスの異なりが分類されよう。彼の存在論は範疇、質料形相論 (因果性) そして様相論の三つの視点を分析の柱としている。

存在論の考察対象はこれらの種々の語り方に即した分析であるため、単に存在者ではなく「存在 (ある)」と語られる限りの一切であると言うことができる。かくして、彼の考察対象は存在者の存在を探求していると語ることが適切であると思われる。ここで「在るもの」と「存在 (ある)」の関係が問われようが、Be 動詞の現在分詞 *on* が定冠詞と共に '*to on*' と語られる場合には多方「在るもの」('that which is' or 'what is') と訳されてきた。これは be 動詞の分詞形であり、定冠詞が伴わない場合には、例えば「力能にあって (*dunamei on*)」と存在の一つの在り方を他の在り方と関連付けるという意味で動的に訳されてきた。エレア派が「存在」を祭り上げるために、動きを示す一般動詞例えば「歩く」を用い「ある」を避けるが、アリストテレスは「彼は健康である者である (*hugiainōn estin*)」或るいは「彼は健康にしている (*hugiainei*)」のあいだに、また「彼は歩いている者である」或るいは「彼は歩いている」のあいだに何の相違もない」と言う (1017a28-31)。彼は一般動詞で表現されるものを「在る限りにおいて」捉えなおしている。彼はさらに「あらゆるものにとって在ることの根拠は実体であるが、動物にとって生きることは在ることである。魂はその根拠でありまた原理である」と言われるよ

うに、生きているということは存在していることに他ならない(415b12-15)。かくして、彼の存在論のキャッチフレーズと言える「在るものを在る限りにおいて」における「在る限りにおいて」は関係副詞 '*hē (i)*' が be 動詞の分詞形を伴っており、存在者を「存在者である限りにおいて」というよりもむしろ「存在(ある)限りにおいて」という理解を促す。この関係副詞を伴う分詞構文は「在る」を働きにおいて捉えており、しかもその働きを存在の働きという視点において捉え、あらゆる存在者を考察することを宣言している。

なお、定冠詞は引用符、鍵括弧「」として用いられ、言語次元における語や項を伝達することがある (cf.90a7-21, 93a37-39, 93b10-11, 94a4, 1051a2)。とりわけ、例えば「端的に語られる「存在(ある)」(*to on to haplōs legomenon*)は多くの仕方でも語られるので〜」(1026b33, cf.1028a10) のように「〜語られる」と述語づけられるときは、主語は言語的存在者を表現している。従って、'*to on*' により在るもの、存在者の意味に理解するか、言語表現「存在(ある)」を理解するかは文脈に依存する。

本稿においては彼の存在の学の構想の中心的な役割を担う質料形相論とそれと常に対として相補的に議論される様相存在論がいかなるものであるかの解明に向かう。範疇存在者である実体の自然的構成要素が形相でありその存在様式は完成そして実働として特徴づけられる。これら三つの柱を秩序づけるものが、あらゆる存在者を一なるものとの関係において秩序づける「帰一の実在論 (focal realism)」とでも呼ぶべきものである。ここでは『形而上学』中心巻第七巻から九巻 (VII-IX) と質料形相論の様相的理解を展開する『魂論』第二巻一章を中心に考察する。最初に簡単にアリストテレスがいかに存在者の類という範疇分析において実体と属性の存在論的身分差を確立したか、そしてその第一の存在者実体はいかに自然学上因果論的に分節されうるかを考察する。

第一章 実体に基づく帰一的实在論

1.1 在るものを在るとして考察する第一哲学

在るものを在る限りにおいて考察する学においてはとりわけ一般的な仕方で「存在するものどもの原理と根拠が探求される」(1025b3)。アリストテレスはこのように存在者を存在（ある）として考察する存在一般の学を他の個別諸科学から判別し、在るものに自体的に内属するものどもの探求を介して、一切を秩序づける根拠から帰一的で包括的な存在論構築をめざす。彼は『形而上学』第四巻冒頭で「帰一的な」とでも形容すべき自らの存在論の構想を展開する。

在るものを在る限りにおいてそして在るものに自体的に内属するものども（*huparchonta kat'hauto*）を理論的に考察する或る学がある。これとは別の学のいかなるものも普遍的に在るものについて在る限りにおいて考察せず、[在るもの]それ自身の或る部分を分節することによりそれ[在るもの]について付帯的なものを理論的に考察する、例えば数学的諸学のように。われらは原理そして最高の根拠を探求しているのであるから、そのものに即してこれら自身が必然的なものである或る自然があること明らかである。かくしてたとえ在るものどもの構成諸要素（*ta stoicheia tōn ontōn*）を探求する者たちもまたこれらの原理を探求していたとしても、在るものの構成諸要素（*ta stoicheia tū ontos*）は付帯的にではなく在る限りにおいて在ること（*einai*）必然である。それ故にわれらにおいても在るものの第一諸根拠を在る限りにおいて把握しなければならない。ところで、「在る」は多くの仕方で語られるが、一なるものに対してそして或る一つの自然に対して語られそして同名異義的ではなく語られる（1003a21-34）。

一つの自然が他の一切を秩序づけているその存在の帰一的構造の解明がここで求められている。この一つの自然を存在論的に支えているものの考察が実体そして実体の存在様式の探求に他ならない。ここで自然学者たちが「在

るものどもの諸構成要素」と呼んでいたものは地水火風であるが、彼は先行哲学者たちの探求を自らの存在論の構想のなかに位置づけている。それらは存在者の構成要素として、生成するものとしてではなく、また付帯的なものとしてではなく、在る限りにおいて在るものでなければならないとする。例えば、付帯的な構成諸要素の探求は地水火風が循環する限りにおいて探求することは「付帯的に」考察する事例となろうが、「在る限りにおいて」はそれが実体として他の存在者を秩序づけているかという視点のことである。彼はこの探求のゴールを「在るものの第一諸根拠を在る限りにおいて把握」することであると特徴づける。この根源的諸要素をこれらは存在論的に存在の原理として実体論において位置づけられる。先行者たちのそれらは質料としての実体とされるが、彼はさらなる構成要素、第一の諸根拠の探求に在る限りにおいて従事する（VII2, 3）。

彼は第六巻一章において第二哲学(自然学)との対比において、「第一哲学」の考察対象がいかなるものかについて言う。「もしなにか不動の実体があるなら、この学はより先でありまた第一哲学である、そして第一のものであるが故に、というこの仕方では普遍的である。そしてこの学は在るものについて在る限りにおいて考察するであろう、そして在るものは何であるかそして在る限りにおいて内属するものどもを理論的に考察する」（VII.1026a29-32）。ここに不動の動者神を帰一構造の頂点とする神学および普遍存在論を包括する第一哲学の構想が提示されている。不動の動者は「第一のものであるが故に、というこの仕方では普遍的である」ことによって単に神学の対象のみではなく、「在る限りにおいて」存在者を考察する普遍存在論においても扱われ神学と存在論は両立するとされる。

かくして、アリストテレスが「在るものを在る限りにおいてまた在る限りにおいて内属するものどもを考察する」と第一哲学の考察対象を提示するとき、「在る限り」の実質は第一に在る実体との関連において帰一的に考察するということである。さらに「在る限りにおいて内属するものども」により存在者の類(範疇)、一で在ることさらには在り方が在るものに「自体的に内属している」と理解しなければならない。

1.2 実体論——基体としての実体とその実体に内属する「おのおののものの実体」——

アリストテレスは「かつて問われまた今問われ常にアポリアとなるもの、それは在るものとは何か、それは即ち実体とは何か」であると語るとき、単なる存在者の羅列を求めているのではなく、第一の存在者である実体との関連においてあらゆる存在者を秩序づけることにより学的であろうとした(*Met.* VIII.1028b2-5)。この問いにおいて範疇的存在理解では十全に「実体とは何か」が解明されないことも明らかである。存在論はまず実体を属性存在者から判別し、その実体が一であることの根拠を、さらにはその実体の存在様式の解明に向かう。この意味において、存在論は存在者の存在を探究すると言うことができる。存在論の考察対象は、かくして、在るもの、存在者であるが、その存在を考察することこそ、在るものを在る限りににおいて考察するというこの実質を構成している。

彼の存在論において特徴的なことは存在者を存在（ある）として考察するさいに、「第一に在るもの」と語られる「実体」との帰一的構造のもとに探究を秩序づけていることである。アリストテレスは自らの存在論を帰一構造に集中する仕方では基本的に三つの視点から構築している。彼は「いかに語るべきか」という「ロギコス」と呼ばれる規範的な語りの様式を基礎に、観察世界を一旦括弧にいれて、言語分析を介して実体と属性を判別する存在者の類（範疇）を導出する。「ロギケー」とはエレア派そして冒頭に引用したプラトンの第二の航海に引き継がれた、矛盾律に即して「最も明晰なこと」「最も堅固なこと」だけを語るにより思考を展開することである。例えば、プラトンは冒頭引用の『パイドン』の続く箇所において「美しいものは美そのものによって美しい」というほとんど同語反復的な語り方を介してイデア論を導出している。

プラトンとアリストテレスの共通の敵はソフィストであるが、論理的な誤謬を犯してであれ自らの利益のために言論を利用する者たちを「アンティロギコス・争論家 (*anti-logikos*)」と呼んだ。アリストテレスは師のこの側面を展開し議論を吟味する弁証術や論理学を形成するに至る。彼は推論の必然性

を最小限の構成要素において体系化することにより、人類に論理空間を学的なものとして開いた。弁証術においてプロとコントラの議論を提示する実践のためには、必然性を括弧にいれねばならないが、彼はいかなる言論をも吟味する蓋然的な次元における弁証術の実践の背後に弁証術の理論を厳密に構築した。それは「ロギケー（形式言論構築術）」とでも呼ぶべきものである。彼はアカデメイアの一員として弁証術の理論的部分をも伝統にならい「弁証術 (*dialektikē*)」と呼ぶことに同意していたが、実質的には弁証術の理論さらには論理学がロギケーという技術により開拓された。それは言語の規範的使用の展開により導かれるものであり、これを「規範的表現に基づく原初論理学 (Normative expression based Ur-logic)」と呼ぶこともできよう。

矛盾律に基づきロギコース（形式言論術上）という手法は具体的には「語句「存在（ある）」はいかに語られるべきか？」、「何であるか」はいかに語られるべきか？」、さらには「同」や「異」、「一」と「多」、「肯定」と「否定」、「超過」と「不足」、「未完」とそれより先がない「終局」や「完成」等の一般的、形式的な概念についてロギコースに、つまりロゴスの力のみにて探求する手法である。

ロギコスな議論は「真理に即して哲学探究に向かう」存在分析の基礎的方法である (*Top.* I 14 105b30, *Met.* VII4 1030a27)。そこでは単に概念分析がなされるのではなく、例えば、何であれ一なる存在者であるためには一なる本質としての実体が存在しなければならない等存在主張を導くものである (VII4)。その導きと制約の中で存在をめぐる思考実験や存在者の観察、実験データに基づいて考察するピュシコス（自然学的）な探求と相補的に思考が展開される。

ロギコスな哲学的分析の仕事はひとつには考察対象を網羅的で相互に排他的な分類のなかにおくことである。分類の最も重要な職務は「許容されているものども」について包括的、網羅的、汲み尽くし的であることそしてそのなかでの下位分類が「何も残さない」相互に排他的であることである。「許容されているものども」[網羅性]の何ものをも残さない[排他性]ならば、その者は十全に知識を持つとわれらは言うであろう」(*Top.* I3.101b5-10)。何で

あれ、或る対象を考察し、知識を獲得するためには同一性を確立すべく他の事物との差異を明確に摘出することが求められる。汲み尽くしかつ相互の排他性の要請は存在者の基礎的な分類である「十の範疇」に限らず、「三段論法の妥当な十四の式」や「四つの探求項目」そして「二種の自然（形相と質料）」や「四つの根拠（質料（因）、始動（因）、形相（因）そして目的（因））」そして「四種の運動（実体、量、性質、場所）」の枚挙や導出の分析においても用いられる手法である。この手続きによってのみ、確実な思考の前進が期される。

言語哲学のこの基礎のもとに因果的な自然世界の理論が「自然学的に（ピュシコース）」展開される。科学的知識をもたらす因果性の理論は『分析論後書』において三段論法を基礎論理とした論証理論により展開されている。質料と形相は事物に内在するその事物が一であることの根拠として提示され、彼は質料形相論として因果性の理論を構築する。ここでも帰一的展開が遂行され、実体である形相が事物の構成要素である質料を統一するものとして位置づけられる。これが存在論構築の第二の柱である。

その質料と形相は存在様式として力能と完成に対応するものとして存在論に組み込まれる。様相分析が彼の存在論の第三の柱であるが、「力能」「完成」そして「実働」の三つの概念とその組み合わせによりあらゆる存在者の存在様式が探求される。これは事物が「いかにあるか」を明らかにするものである。彼は言う、「本質とそのロゴスがいかにあるかを気づかずにいてはならない、それなしに探求することは何もなさないことである」（1025b28-30）。この存在様式について、生物の複製機構に見られるように親と子は種において同じ形相を持つ。そのさいに形相の存在様式は「完成」と呼ばれるが、彼は「双方にとっての完成が存在しなければならない」と語る（202a15）。一つの存在様式が存在するということは理解に困難をきたすが、彼が「在るものに自体的に内属するものども」（1003a21）をそして「在る限りにおいて内属するものども」（1026a32）を考察する普遍存在論を構築するさいには、この「内属するものども」にこのような存在者の存在様式が数えられ、それが考察の対象となっている。存在様式を存在として考察することはありうることであ

る。というよりもむしろ、存在の学は存在様式を存在として考察することにおいてこそその独自性を発揮すると言える。例えば、生物学が「いかにあるか」という在り方を考察するさいには、生命あるものとして考察する以外にないであろう。存在様式ないし在り方は存在論固有の考察対象である。このように存在の一切がそこから秩序づけられる端的な存在として実体が探求される。

ここで『形而上学』第五卷八章「実体」の辞書項目を主に参照して実体とその関連諸概念の概括的理解を得ておきたい。「実体」は一般的に二つの仕方でも語られ、一つは [S1] 独立した「基体」となる存在者を意味しており、そのもう一方は [S2] 「或るものの実体」または「おのおののものの実体」というように属格において表現される事物に伴われるものである ([S1]: e.g., 1028b36, 1038b2, 1042a26, 90a10, b30, 91b9, 92a6, b13, 29, 93b26, [S2]: 1028b35, 1031a18, 1038b10, 83b26, 90b16, 96a34, b12)。『形而上学』(V8) 「語彙集」の実体の辞書項目において実体の三つの条件が提示される。最初に [S1] 基体としての実体に対応するものとして、語彙集によれば地水火風の「単純物体」やそれらから構成される「動物」が実体であるとされる。その理由として [Sa] 「これらすべては或る基体について語られることなく、別のものどもがそれらに即して語られる」ことが挙げられている (1017b13)。[S2] により、アリストテレスは語彙集の術語によれば [Sb] 「基体について語られない事物に内在している、在ることの根拠」として「これらの事物に内在する構成諸部分であり、定義するものでありまた或るこれを意味表示するもの」を提示している。[S2] により、「さらに」彼は [Sc] 「何であつたか (本質)」を理解している (1017b15-23)。[Sc] は [Sb] と同じ様式において導入されており、「これ [何であつたか] は、その説明言表が定義であるところのおのおののものの実体 (*ūsia hekastū*) であると語られる」 (1017b23)。

彼の『分析論後書』における発見的論証的探求論において、アリストテレスが「実体であることの根拠」(90a9f) に言及するとき、実体の根拠は [Sb] 「内在する構成要素」と [Sc] 「本質」の両者に相応する仕方でも、しかも [Sc] が因果論的に解釈されるという条件のもとで、それ自身実体でなければなら

ない。これは可能でありまた、実体と実体としてのその根拠が実在において分離されえない限り、実体の離存性、独立性規準を侵害しない。魂は自らが内在する身体を生かしめている限り、「ソクラテス」という呼びかけにより統合体ソクラテスと彼の魂双方に指示が届いている(1037a7-8)。エルゴン上魂と身体は分離されていない。分離された身体は「むくろ」と呼ばれる。アリストテレスは「根拠の数は……「何故」の問いの下に理解される事物の数と同じである」(198a14f)と述べるが、「本質(何であったかということ)」は「何であったかということ、全体 (*to holon*)、統合 (*hē sunthesis*) そして形相として」(1013b23-24) 四つの根拠のうち一つとして言及されている、厳密に言えば「形相」は「本質の説明言表」であるけれども (*Phy.* II 7 198a14, *Met.* V 2.1013b22, a27) (なお、「始動因 (*ti ekinēse prōton*)」や「目的因 (*tinōs heneka*)」も「ロゴコースに言えば本質である」と語られる文脈もあり、「本質」という概念は一般的には内在する場合も外在する場合も因果論的に事物を秩序づける第一の根拠を意味している (1041a28-30))。

実際、アリストテレスが [S2] 「おのおののものの実体」に言及するとき、彼は [Sb] と [Sc], または [Sb] か [Sc] を念頭に置いていたようにみえる (83a24, a39, 90b16, 93a12f, 96a34f, cf.1017b21f, 983a27)。「ひとはいかに「何であるか」においてある述語を狩るべきか」という一節において「統合は事物の実体 (*ūsia tū pragmatos*) でなければならない」と述べられている (96a22, 34)。例えば、すべて三は数、奇、二つの意味で (即ち、約しえず、合成されぬという意味で) 素であるという要素を持つ。「三」の定義形成句は三が「何であったかということ」を意味表示する「第一の奇数」である (96a35f)。私は「Sは何であるか」の要素の全体性の故に、「おのおのの事物 S の実体」は「おのおのの事物 S」, 即ち、実体それ自体に他ならないと理解する。

この対応は何故主語に位置づけられる [Sa] [S1] 基体としての実体と [Sc] [S2] 「本質」を意味表示する述語の位置づけをえる「定義形成句」は同一の存在者、即ち実体を意味表示しうるのかを説明している。仮に厳密な同一性述定が「人間は理性的な動物である」によって与えられるとして、[S1] 「人

間」と[*S2*]「理性的な動物」は実体を意味表示している。この主張の一つの根拠として、「おのおのの実体に内含されている要素 (*hosa en tē ūsia hekastū*)」(83b26) という一節を挙げることができる。[*S2*] はここでおのおのの事物は何であるかの述語により意味表示されている。彼が[*S1*] と[*S2*] を使用する理由は、これらは交換可能な主語と述語を述べているが故に、これら二つの表現における「実体」が同一の存在者(実体)を意味表示しているからである。実際、第七巻第六章において「本質とおのおののものは同一かそれとも異なるか」を問い、「第一のものどもそして自体的に語られるものどもについては、おのおのであることとおのおのは同一であること明らかである」(1032a4-6) と結論する。ここで注意深く導入される「おのおののもの」そして「第一のもの」が実際に何であるかは現実の探求に依存するが、「第一のもの」と呼ばれる何かそういうものが存在しなければならないことはロギコースに論証されている。理想的なケースにおいては、われわれは何故[*Sa*] 独立した基体 *S* としての実体が[*Sc*]「*S*は何であったかということ」と同一の存在者でありうるかをロギコースに理解できる。また、[*Sc*]の内在的統体性の故に、それは本質を[*Sb*]「存在の根拠」として理解する可能性を開く。

アリストテレスは語彙集のこれらの議論に基づき「実体は二つの様式に即して(*kata duo tropūs*)語られることが帰結する」と結論している(1017b23)。「それは[*S1*]([*Sa*])究極の基体と(*te*)、それはもはや別のものについて語られないものであるが、そして(*kai*)[*S2*]([*Sb*][*Sc*])或るこれであることによって(*tode ti on*)離存的なものでもある(*kai chōriston ē*)ところのものである。しかし、それぞれの形姿そして形相はこのようなもの[*S2*]である」(b23-26)。

当該の二条件[*S2*]或るこれ性および離存性条件はセットを形成し一つの様式のもとでの実体の条件を提示していると見做されている。ここでは実体の語り方の一つの様式としてセットで提示されている。ただ、前者は *be* 動詞の現在分詞表現を伴うことによって或るこれ性条件が離存性条件に先行すること(「～であることによって」)を表現していると思われる。これは指示の現場を表現しており、実際或るこれであるものはそのことの故に今・ここで

離存的でもあると解することができる。この点については後に詳しく考察する。

ただし、[S2]は内在的な存在の根拠としての実体を意味しているとする私の解釈が正しいなら、ここでの「離存的なもの」は「ロゴス上」のそれを第一に指示していなければならない。実際、次の箇所において「別の仕方においては [S2b] ロゴス [形相] と形姿が基体である、それは「或るこれ」であることによってゴス上離存的なものであるところのものである (*ho tode ti on tō logō chōriston estin*)」(1042a28-29) と語られている。ここで注意すべきは、関係文は単数現在形 *be* 動詞であり、「ロゴスと形姿」は何らかの仕方で同一の事柄つまり「或るこれであることによってロゴス上離存的なもの」のことである。「ロゴス上」の離存性が明言されているが、その根拠はロゴスと形姿の規定性による。実体が「二つの様式」において語られるが、[S1] 基体としての語り方と [S2] 或るこれであることによって離存的なものであるとしての語り方は異なるとされている。すぐ上で見たように、或る仕方ではロゴスや形姿は基体として位置づけられる。例えば、「魂」は「ロゴス上の実体」であるが、知識や感覚の基体として「知識は魂のうちにある」(210b1, 417b22) と言われ、また「魂」を主語にして「魂は生きている物体の根拠として始原である」、「われらは「魂が苦しむ、喜ぶ……」と語る」と述語を伴うことがある (415b8, 408b1)。

他方、形相や形姿は「おのおのの実体」という仕方実体が論じられるときは、それが内在する統合体が基体として語られ、その基体の或るこれ性そしてそれ故の離存性条件を担うものとして語られる。そしてそれはその内在的な存在の根拠が指示されていると言うべきである。言語実践「これ」が統合体と内在し実働する魂としての形相の「二重の意味表示 (指示)」をなすこと、さらに形相と形姿の関係などは後に考察する。

1.3 範疇分類と実体の「或るこれ」という指示を可能にする内在形相の実働

アリストテレスは実体を『形而上学』第七―九巻 (VII―IX) において、一方で、[S1] 主語となっても述語とならない究極の「基体」という方向に第一

の存在を探求しつつ、他方で[S2]「おのおのの実体」という仕方での基体となる事物の端的なあるないし存在の根拠としての実体を探求する。基体が存在することは明らかであるとして、その存在の根拠は基体の「何であるか」をめぐる述定の分析を介して第一の存在が探求される。

存在のロゴスを求める『形而上学』においては存在者の範疇は単に形式的な述語と述定の分類に留まらず、実体と属性の存在論的差異の探求に向かう。アリストテレスはアカデメイアにおける公式的な探求様式である分割法に基づく類と種差という枠組みの中での『トピカ』において範疇理論を構築している。アリストテレスは『トピカ』第一巻九章において、所謂プレディカビリア(述語づけ可能なもの)論から「述定の範疇(Category (class) of Predication (CP))」とそれに基づき「存在者の範疇(Category (class) of entities (CE))」を導出するその仕方を論じている。

プレディカビリア(述語づけ可能なもの)とは本質を意味表示する「定義形成句」と意味表示しないが主語と述語が交換されうる「固有性」さらに「類」と「付帯性」であり、これらは「何であるか？」への四つの可能な応答として同一性を表現し、あらゆる同一性言明を網羅した相互に排他的であることが第一巻四―八章で証明されている。アリストテレスは述語のタイプであるプレディカビリアをもとに述定の範疇の理論を発展させることによって議論の種類を吟味する。この章の目的は「議論がそれらに関わりそしてそれらに基づいているところのものども」つまり議論の対象と構成要素の数を単に言語次元において明らかにすることである(103b39f, cf. 105a20)。述定の範疇(Category of Predications (CP))は弁証術の議論の数と種類を決める文脈において「はい」と「いいえ」以外の応答を要求する疑問詞をすべて提示し、これらの疑問詞を用いることなしに予め応答者が諾否だけで応答できるそのような命題のシステムを構築するという文脈において提示されている。そこから、同一性の問い「何であるか？」が問われる十個の存在者の範疇(Category of Entities (CE))が導出されている。

これらの議論から、(s1)「何であるか」を意味表示する者(*ho to ti esti sēmainōn*)は時に(s2)実体を、時に性質(どのようにあるか)を、そ

して時に別の諸述定の或るものを意味表示する (*sēmainei*) ということは明らかである。というのは、或る人が彼の前に置かれており、そこに置かれているものは人間もしくは動物であると語るときには、彼は「何であるか」を述べており、実体を意味表示しているからである。だが、白い色が彼の前に置かれており、そこに置かれているものは白であるもしくは色であると語るときには、彼は「何であるか」を述べており、性質 [どのようにあるか] を意味表示しているのである。……そのようなものどものそれぞれに関して、まさにそのもの [それぞれのもの] が (i) それ自体について語られるか、もしくはそれについてその類が語られるかのいずれかであるならば、その述定は何であるかを意味表示しているが、しかしそれ [それぞれのもの] が (ii) 何か別のものについて語られるならば、その述定は何であるかを意味表示しておらず、むしろどれほどの量であるか、どのようにあるか、あるいは別の諸述定のうちの或るものを意味表示している (103b28-39)。

この一節に明かなように、主語について述語の述べ立てを通じて「何であるか」を語り、それは存在者の一つの類を指示している。実体語は実体語により自己述定の連鎖が形成され、性質語も同様である。一方では実体以外には「何であるか？」とは別の疑問詞による適切な問いが提示され、総計十個の種類の述定が形成され、そのうえでそれらのそれぞれにおいて同一性の問い「何であるか？」が問われ、それに対応する十個の存在者の類、所謂範疇を形成していたのである。

彼は「意味表示する (*sēmainei*)」という意味論形成の中核語を動詞形で二度語ることにより、言語間の名前 (主語) に述べ立てられる説明言表 (述語) により成立するものと、その述べ立て (述定) を介した言語と世界の間での指示機能を持つ様式とを判別しつつ関係づける。ここで「時に」とあるのは「何であるか」は十種類の存在者に適用される (例「[性質] 白は色である」) からであり、第二の「意味表示する」によりその述定の一つが実体に届く場合を設定している。「何であるか」の説明言表の主語と述語のあいだの意味表示を形成する述定を介した世界への意味表示 [指示] を「二様の意味表示 (dual

signification)」と呼ぶ。また「そこに置かれているもの」により非存在のケースを排除し、述定による指示が実体に届く場合を設定している。成功した場合には二様の意味表示は同時に遂行される。しかしペガサスのような非存在のケースにおいても最初の「意味表示する」により言語間のあいだで意味の理解が成立する意味論的に浅い立場が表明されている。それは「彼は「何であるか」を述べており、実体を意味表示している」により確認される。言語次元で主語と述語のあいだで有意味な言明が成立する。その上で同時に世界にある実体への指示が成立する。これにより述定の類と存在者の類の対応の基礎が敷かれたと言える。ただしここでは『形而上学』に見られる「存在するものどもの諸類 (*ta genē tōn ontōn*) (998b4) や「存在するものの諸述定」 (1065b8) という存在者の分類や述定の種類は語られず、言語次元における述定の類に即して存在者に指示が遂行されている。

実体と属性の存在論的差異も「自己述定 (*peri hautū*: of itself predication)」と「他己述定 (*peri heterū*: of other predication)」の区別に基づいてだけロギコースに導出されている。上記引用文の「人間」や「色」の例における「それぞれのもの」 (*hekaston*) という語は (i) それ自体についての述定の一部であるか、(ii) 何か別のものについての述定の一部であるかどうかである。述定のこの区分は網羅的である、というのも、一方、(i) 同一性述定は定義形成句か類により構成され、(ii) 他己述定は固有性か付帯性により構成されるからである。もし (i) 「まさにそのもの」 (*auto = hekaston*) がそれ自体について語られるか、その類がそれ (*hekaston*) について語られるならば、その述語づけは「何であるか」の述定の範疇に属する。「何であるか」を述べることは十種の異なる仕方があり、それらの各々に別々のタイプの存在者 (実体、性質、量等) が対応することになる。対照的に、語が (ii) 別のものについて語られるときには、当該の述定は後者が何であるかを示さず、どのようなものであるか等を示す。例えば、「白い」が「熊」に述語づけられるときに、それは熊がどのようなものであるかを指摘する。固有性あるいは付帯性が別のものに述語づけられるときには、その述定は何であるかを示さず、むしろ何か他の存在者の範疇を、それが所有する述定のその他九種の範疇のうちの

一つに一致することによって、意味表示する。

しかしながら、実体と他の存在者の範疇との間には非対称性がある。或る実体は、述定の役割を果たし得ないので、タイプ (ii) 他已述定においては用いられ得ない。或る人が「白は熊である」と述べるならば、「熊」は白が何であるかも、どのようにあるかも、また白に属するいかなる範疇をも意味表示し得ない。実体術語はタイプ (i) 同一性述定においてのみ用いられ得る一方、他の語はタイプ (i) と (ii) の双方の述定において用いられ得る。諸実体は決して諸存在者のその他の範疇について述語づけられ得ないのである。ただし、その他の諸存在者はそれらについて適切に述語づけられる。

アリストテレスは実体の範疇 (CE) が「何であるか」の範疇 (CP) に対応すると主張することが出来る。なぜなら、実体術語はタイプ (i) の述定において用いられる得るのみである語に限られる一方、その他全ての語はタイプ (i) および (ii) の双方の述定において用いられ得るからである。実体にあたる諸語が果たす唯一の役割は、「Fは何であるか?」という問いへの応答においてFが何であるかを特定することであるから、実体にあたる諸術語はFがどのようにあるかやそれがどれほど大きいかといったことを述べるべく用いられ得ない。対照的に、他のタイプの語は何であるか（或る量等）やどのようにあるか、どれほど大きいかも述べる事が出来る。実体にあたる諸術語は「Fは何であるか?」という問いに応答する際に用いられ得るのみである一方、その他全ての諸語はこの問いに応答する際にもその他の問いに応答する際にも同様に用いられ得る。かくして諸実体は、その他全てのタイプの存在が (i) と (ii) のタイプ双方の述定において述語づけられ得るように、タイプ (i) 同一性述定においてのみ述語づけられ得る唯一のタイプの存在者であることになる。

この『トピカ』における議論の対象と数を決める述定と存在者の類の導出に基づき、『分析論後書』においては分割法の欠陥を乗り越える論証理論の展開を通じて「何であるか」「何であったかということ（本質）」の因果論的展開をなすにいたった。『形而上学』における範疇論は実体の帰一的構造のもとでの因果論的な分類を遂行するものである。従って、範疇理論も新しい解釈

を要求するものとなっている。

「定義」とは「何であるかの説明言表」(*An.Post.II*10.93b29)であり、「本質(何であったか)」は「その説明言表が定義であるところのものである」(*Met.VII*4.1030a6)。それゆえ、たとえ名前が説明言表と同じものを意味表示するにしても定義があるわけではない。そうであるとするなら、「あらゆる説明言表が定義形成句になってしまうであろう」(*VII*4.1030a6-9)。また「本質(Fであることは何であったか)」について、「存在するものどものそれぞれFにとって、まさにFであるところのものであること (*to einai hoper estin* [F]) は一である」と語られる (*Top.VII*.141a35)。これは現実世界に対する参照なしに、一なる事物には一なる本質が存在せねばならないという「いかに語るべきか」という視点から一つの存在主張である。そしてそれは「いかにあるか」の探求を方向づける。存在主張はそのもとにある存在者の認識を意味せず、一般的な存在論的主張である。例えば、「それぞれ (F) にとっての本質は (F) そのものに即して語られるところのものである」や「第一にそして端的に定義と本質は実体についてある」がその種の主張である (1029b14, 1030b5)。本質があるところの事物 F はただ一つであり、その一なる事物の一なる本質が「定義されうるもの (*dunaton..horisasthai*)」である (*Top.I*5.102a1)。これらの主張は世界の具体的な事態についての情報を与えるわけではないという意味で内容空疎でもある。形相、始動因そして目的因が事物の一性の根拠とされる文脈で「ロギコースに言えば本質である」とそれぞれが位置づけられる (1041a28)。アリストテレスは第七巻六章において「[Fの] 本質とそれぞれのもの [F] は同じか異なるか」を問い、ロギコスな議論の展開のもとに、「それよりも先なる実体そして本性がない」自体的にある「第一のものども」に関しては同じであるとする (1031a15, 30, 32a5)。例えば、魂はその第一のものであり、「かたや魂と魂であることは同じであり、人間は人間と同じではない、もし「魂」もまた「人間」と語られるのでなければ」と一つの存在主張がなされる (*VIII*2.1043b2-4)。このロギコスな概念「本質」がさらなる思考と探求の方向、枠を定める。その探求は「本質とその説明言表(ロゴス)がいかにあるか (*pōs esti*) に気づかずにはいけない、その

ことなしには何も探求しないことである」に向けられる (VII.1025b28-30, cf. VII.1030a27 (*pōs echei*))。

『形而上学』第七卷一章において、アリストテレスは「「存在」はいかに語られるべきか?」「何であるか」は……複数の仕方でも語られるのか?」(1030a17)等の視点から存在のロギコスな分析を遂行することにより、実体の存在論的優先性を確立した実体と他の存在者の存在論的非対称性を確立している。そこでの論述は「何であるか」を述べることの二様の意味表示機能に訴えそして実体と他の範疇の述定の非対称性に訴えており、『トピカ』第一巻九章における当該箇所を展開するものであるとすることができる。ただし、新たにそしてそこでは実体範疇は「或るこれ」として提示されている。これは形相が質料に内在し実働することによってのみ可能となる言語による指示行為である。従って、指示は質料形相論と様相存在論に基づく背景理論なしには理解できない事物の一性をめぐる概念である。アリストテレスは言う。

われらは「どれほどの仕方でも」についての箇所 (V7) において先に分析したように、「在る」は多くの仕方でも語られる。というのも、一方それは「何であるか」をそして「或るこれ (*tode ti*)」を意味表示しており、他方、それは「性質」、または「量」、またはこの仕方でも述語となる別のものどもの「それぞれ」を (*tōn allōn hekaston tōn hūto katēgrūmenōn*) 意味表示しているからである。「在る」はこれだけの仕方でも語られるので、(s1)「何であるか」がこれらの第一のものであって、まさにこれが (s2) 実体を意味表示すること (*tūton proton on to ti estin hoper sēmainei tēn ūsian*) 明らかである。なぜなら、われらが「これはどのようにあるか? (*poion ti tode;*)」を語るとき、われらは「善い」とか「悪い」とか言い、「三キュービット」とか「人間」とは言わない。しかし、われらが「何であるか」を語るとき、われらは「白」とか「熱い」とか「三キュービット」とか言わずに、「人間」とか「神」と言う (1028a10-18)。……従って、[a30] 実体は第一義的にあるものであり、また何ものかではなく端的にあるものであろうこと明らかである。

さて、「第一のもの」は多くの仕方で語られる。しかし、それにもかかわらず実体はあらゆる仕方の説明言表上も、認識上も、時間上も第一のものである。というのも、別の諸述語 (*katēgorēmātōn* 名詞形) のいずれも離存的ではなくこれだけがそうだからである。これは説明言表上第一である。[a35] なぜなら、それぞれの説明言表に実体のそれが内在すること必然だからである。われらがそれぞれのものを最も知っていると思うのは、われらが性質や量や場所よりも人間や火が何であるかを知っているであろうときである。[1028b1] というのも、これら自身のそれぞれをわれらが知っているのは、量や性質が何であるかをわれらが知っているときだからである。実に、かつてそして今さらに常に探求されるものそして常にアポリアとなるもの、それは在るものとは何であるかそれは即ち実体とは何であるかである。即ち、[28b5] 或る人々はそれが「一」と、他の人々は「一より多」と主張し、或る人々は「有限」と他の人々は「無限」と主張している。それ故に、われらにとっても、言ってみればとりわけそして第一にさらにもっぱらそのようにあるものについて、それが何であるかを理論的に考察しなければならない (1028a10-b7)。

ここで、存在の語られ方として「～である」と語られる述語の種類が問題となっている。そのことは「述語となるものどものそれぞれ (*katēgorūmenon*)」(動詞形) や「諸述語 (*katēgorēma*)」(名詞形) という表現により示され、その述語が述語づけられるその仕方により「ある」の多義性が表現されている。(ギリシア語では *be* 動詞は繫辞と述語のあいだに何ら表現上の差異はない)。例えば、実体語の何であるかの自己述定の連鎖においては「ソクラテス」「人間」「生物」という仕方です述語となるものどもが実体を意味表示する。「何であるか」と「或るこれ」は実体を意味表示する述語が持つ特徴であるとされている。

「何であるか」はそれぞれの範疇において語られる。「何であるか」は一つの様式において実体そして或るこれを意味表示し、別の様式では述語となるものどものそれぞれ、量、性質そして別のそのようなものを意味表示する。というのも「ある」はすべて [の範疇] に同一の仕方ではないが、かたや第

一に他方続く仕方で、内属するように、何であるかもまた端的には実体に、或る仕方で別のものどもに内属するからである」(1030a17-23)。実体が他の属性範疇に対し非対称的であることは「何であるか？」と他の疑問詞の述定をめぐり、『トピカ』第一巻九章で確立されていることは既に確認した。

この議論は『形而上学』当該個所にも受け継がれている。解明すべきは実体についての新しい展開である。「それ〔「在る」〕は「何であるか」をそして「或るこれ (*tode ti*)」を意味表示している」。実体範疇については近接箇所において「(s1) 「何であるか」は…… (s2) 実体そして或るこれを意味表示する」(1030a18) さらには「「在る」はかたや (s2) 或るこれを……意味表示する」(1030b11) と語られる。実体範疇についてなぜ「或るこれ」で言い換えたり言及しているのか明らかにされねばならない。『トピカ』の存在者の範疇の導出においては「或るこれ」は見られない。形相の内在による「(或る) これ」の指示の二重性の理論は因果性の理論の確立を必要とするからである。実体語については「何であるか？」に対する応答「何であるか」が述語となる。実体範疇以外の他の範疇には別の疑問詞例えば「いかにあるか?」「どれほどあるか?」「いつか?」等が適用されることがふさわしい。他方、実体については疑問詞「何であるか?」がそしてそのみが適用される。「或るこれ」は実体範疇に適用される直接指示表現である。

私は実体について何であるかを語ることそのことを通じて或るこれを指示すると解する。つまり二様の意味表示の機能 (s1) (s2) がここでも見られると解する。「何であるか」を語る述語となるものは「或るこれ (*tode ti*)」である。問い「Sは何であるか?」に対する「この仕方で述語となるものどものそれぞれ」のうち最も相応しいものは「このようなものである」でも「これほどのものである」でも「この時」でもなく「これである」というものであるに違いない。つまり直接指示としての「これ」が最も適切に応答となる問いは「いかにあるか?」でも「どれほどあるか?」でもなく、「何であるか?」であると言える。

私は当該の第七巻一章における「一方それは (s1) 「何であるか」をそして (s2) 「或るこれ (*tode ti*)」を意味表示している」は意味表示の二様の機能に

基づく、何であるかを述べることで主語と述語の間で意味を理解し、同時に或るこれを指示するという仕方を実体に属する特徴に基づき実体存在者を指示していると解する。「カリアスは何であるか？」に対し、「彼は (s1) この或る人間である」と言うことにより応答するとき、われわれは同時にカリアスにより例化されている (s2) この人間を指示している。アリストテレスは同一性述定が第一義に実体に属することを指摘することにより、実体の優先性を主張している。彼は「何であるか」がこれらの第一のものであって、まさにこれが (s2) 実体を意味表示する」と語る。彼は問い「何であるか？」に対する一般的かつ抽象的な応答であると想定されている「何であるか」の領域を「まさにこれが実体を意味表示する」という従属節を加えることにより限定している。この限定により、彼は「何であるか」の使用を実体の場合にのみ限定している。他の存在者は、実体の同一性が第一義に固定される限りにおいて、「これ (tode) はいかにあるか？」のように既に同一指定された「これ」について述語づけられうる。

アリストテレスは、疑問詞のタイプとそれらの対応する術語のあいだの区別に訴えることにより、何であるかと実体のあいだの連関を説明する。この引用文において、彼は差し向けられるべき本来的な疑問詞を対応する存在者の術語の類に応じて分類している。われわれは「人間」や「神」のような実体語について言及することにより、「これはいかにあるか？」という問いに答えるべきではなく、「白」とか「善い」等の他の種類の術語に訴えて答えねばならない。問い「これは何であるか？」に対し答えることは第一義的に実体に向けられる。というのも、実体であるところの「これ」が同一性述定により固定されないなら、性質や量などの他の存在者は基体「これ」について述語づけられえないからである。

『トピカ』におけるように、この箇所においても、述定は疑問文の形式に即して範疇へと分割される。彼がここで問うている「Fは何であるか？」という問いに応答する第一範疇を (s1) 意味表示する述定は、神や人間のような実体を (s2) 意味表示する。さらに、諸実体は「Fは何であるか？」というものの以外の問いに応答するためには必要とされないだろうが、他の種の存在者は他

のタイプの疑問文に応答すべく要求されることになる。この章は、『トピカ』第一巻九章がそうであるように、「Fは何であるか？」という問いを発する際には、存在者の他の範疇が言及され得るということを認める。アリストテレスは「われらがその量や性質が何であるかを知っている時にのみこれらの事物のそれぞれを知っているのであるから、われらは性質や量、あるいはどこにあるということを知るよりも、むしろ或るものが何であるか、例えば人間が何であるかとか火が何であるかということを知るときに、最も十分にそれぞれの事物を知っていると思う」(1028a36-b2)と述べている。しかし、ここでも、(s1) 性質が何であるかを示す際、ひとは (s2) 世界における当該の性質「いかにある」を意味表示する。これら全てのケースにおいて、アリストテレスは問われている語と同じものを (s1) 意味表示する別の句を作り出すことと、世界における或る対象を (s2) 意味表示することを比較すべく、意味表示の二様の機能を活用している。

この様式において、『形而上学』第七巻一章において、彼は存在論的に (i) 何であるかの述定と (ii) 述定の他のタイプの非対称性を確立している。彼はまた述定の類 (CP)、とりわけ何であるかと存在者の類 (CE)、とりわけ実体のあいだの対応を確立している。

ただし、実体の探求であるこの巻においては「或るこれ」をめぐる探求が展開される。これは即ち個体と普遍の対比のなかで実体を探求するその方向を提示している。もはや『トピカ』におけるように、個体も普遍も実体語として同様の仕方に対処することはできない。或るこれを中心に普遍や質料が、もしそれが可能であるとして、いかなる仕方であらうかを吟味することになる。アリストテレスはロゴスが質料に内在することを介して力能における「或るこれ」という仕方で普遍を様相的次元において分析することが可能になるとする。言語次元の多くの問題、例えば実体語の述定の上昇や個と普遍さらには「これ」という指示の問題は様相概念を導入することによってのみ最終的に解決される。

1.4 ロゴスとエルゴンにより構成される様相存在論に基づく存在の帰一的理解

4.1 三つの様相概念の提示と相補的探求

アリストテレスは『形而上学』第九巻一章冒頭で、存在探究の二つの方法と構想を提示する。彼はそこで疑問詞の分析に基づく述定の種類の枚挙から導かれる存在者の類としての範疇分析と存在者の存在様式/様態 (the way of being) の分析を提示し包括的な存在者の知識をめざす。まず存在の帰一的構造を確認したうえで、それを確立するものとしてそれまでに明らかにした範疇論と並行しかつそれを支えるものとして様相論的分析を提示する。

かくして、第一に存在するものについてまた存在者の別のすべての述定がそれに対して還元されるものについて、即ち実体について語られた。というのも、実体の説明言表に即して他の在るものども、量や性質そしてそのように語られる別のものが語られるからである。なぜなら、すべてが実体の説明言表を持つであろうからである、ちょうどわれらが最初の議論の箇所 [VIII] で語ったように。しかし、「存在」は、かたや、何であるかによって或いは性質或いは量によって語られるが、他方、[L] 力能および完成に即して (*kata dunamin kai entelecheian*) かつ (*kai*) [E] 働きに即して (*kata to ergon*) 語られるので、われらは力能と完成についても徹底的に規定しよう [ch.1-10]、そしてはじめに、かたや、とりわけ本来的に語られる力能 [D1=「運動に即す力能」] について規定しよう [ch.1-5]、ただし、それはわれらが現在目指していることがらに対し最も有益なそれ (*chrēsīmotatē*) [[D2] 「待機力能」] というわけではないのであるが。というのも、力能 (*hē dunamis*) および実働 (*hē energeia*) は単に [D1] 運動に即して (*kata kinēsin*) だけ語られるものどもよりもより多くのもの (eg. [D2]) についてあるからである。これ [D1] について語ってから、実働についての諸規定のなかで [ch.6-10]、他のものども [D2] [D3] [「保存力能」(1050a13-15)] についても明らかにしよう (1045b27-46a4)。

アリストテレスは「存在」が範疇分類の他に様相分析によっても語られる

として、様相論を展開する。「存在」は[L]力能と完成に即して(*kata dunamin kai entelekheian*) かつ(*kai*) [E] 働きに即して(*kata to ergon*) 語られる」において、前置詞「即して(*kata*)」と接続詞「かつ(*kai*)」により存在への二つのアクセスの視点として様相[L] [E]の総合により、ちょうど範疇分類がそうであるように、あらゆる存在者の包括的知識をめざしている。様相分析は範疇分析のように「或いは(*ē*)」ではなく「かつ」により結合され、相互に排他的ではないことを示している。何故「即して」が一度に三つの語句を繋げなかったかと言え、二つの「即して」はそれぞれ存在へのアクセスの異なる視点を提示しているからである。だが、例えば M. Heidegger はこの前置詞の機能を理解し損ね「デュナミスとエンテレケイアとエルゴンの観点において(*im Hinblick auf dunamis und entelekheia und ergon*)」と翻訳し、この巻を‘*dunamis und energeia*’の視点からの存在の探究であるとし、方法論を理解しないばかりか、「完成」への考慮を欠いている²。二つのアクセスをこそ明らかにしなければならない。

アリストテレス哲学の大きな特徴の一つは類義語そして関連語をセットにして思考を展開することにある。それにより彼は先人から引き継いだ諸難問の解決をはかっている。「何であるか(*τὸ τί ἐστι/to ti esti*: ソクラテスの同一性の問い)」と「何であつたか(*τὸ τί ἦν εἶναι/to ti ēn einai*: 本質=定義可能なもの)」の関係についてはロギコスな議論として先に考察した。「何であるか」において語られる要素が事物に固有なものとなるとき、「本質」が規定される(*An.Post.II6*)。ここでは、[L]「ロゴスアプローチ」と[E]「エルゴンアプローチ」と呼ぶべき視点から判別される関連語を挙げる。二つの視点の相補的展開を担うものとして、例えば、「形相(*εἶδος/eidos*: ロゴスに即した実体)」と「形姿(*μορφή/morphē*: 質料と形相の統合体の形: 例えば、鋳型に流し込まれた素材と「混合」された形姿)」、「目的(*τὸ οὗ ἐνεκα/to hū heneka*: 何かがあるためのところのそれ)」と「ゴール(*τέλος/telos*)」、「運動(*κίνησις/kinēsis*: 未完の連続的な存在者)」と「変化(*μεταβολή/metabolē*: 二時点間における差異)」、さらに「力能と完成(形相の存在様式(完成: *ἐντελέχεια/entelecheia*) が質料(力能: *δύναμις/dunamis*) のロゴス)」

の組と「力能と実働 (ἐνέργεια < ἐν-ἔργον/ *energeia* < *en-ergon*: 力能の今・ここの発現)」の組の対比はそれぞれ前者が [L] ロゴスアプローチを形成し、後者が [E] エルゴンアプローチを形成している。そしてそれらの相補的展開が遂行されていることを明らかにしたい。研究史上これらの関係が不明瞭なまま或いは混同され議論されてきたため、彼の繊細な思考の展開が十全に把握されることはなかった。

これらは双方のグループとも世界の側の実在を構成する存在者でありまたその働きさらには存在様式であるが、それに対する人間のアクセスの異なりに応じて判別される。私はこれを [L] 「ロゴス(説明言表)に即した実体 (*ūsia kata ton logon*)」と [E] 「実働としての実体 (*tēn hōs energeian ūsian*)」という実体の二つの記述の異なりに見出されると解する (eg. *Met.* VII10.1035b13, VIII2.1042b10)。前者は基本的に [L] 事物の一性のロゴスとしての普遍的な定義を形成する視点から提示されるものである。後者は基本的に [E] 存在者の力動的な働きを今・ここの具体的な発見的探求の文脈において捉える感覚等の認知機能の視点から提示されるものである。

彼はこの二つのアクセス ([L] [E]) を提示して連言により繋げている, 「存在」は [L] 力能と完成に即して (*kata dunamin kai entelecheian*) そして (*kai*) [E] エルゴンに即して (*kata to ergon*) 語られる」 (IX1.1045b33-35)。実体 [L] [E] の双方は同一のものでありえ、例えば「魂」は物体なしにはない [L] ロゴスに即した実体として複合的なものであり、その定義は「力能と完成に即して」与えられ、そしてそれは [E] 実働としての実体でもあり、「エルゴンに即して」内魂物の生命において確認される。双方は二つの相補的なアクセスを通じて同一の実体魂として理解されるであろう。

形相の存在様式である完成がロゴスとエルゴン双方を媒介するもの、力能と実働双方をロゴスにおいてまたエルゴンにおいて媒介するものとしてそれ自身ロゴス(理)とロゴスの質料への内在を介した実働双方の存在様式であることにより、彼は双方の道理ある総合を目指したことを明らかにするであろう。また、思考と感覚等直接の認識を遂行している魂そのものが何でありまたいかに働くのかの理論も求められよう。これは心身論、魂論として展開

される学的営みである。魂も一つの不可視な存在者である以上、存在者の包括的な理論のもとにその解明が進められる。

4.2 [L] ロゴスと [E] エルゴンの分節と総合

アリストテレスによる様相存在論はロゴスという目に見えないものの働き（エルゴン）を理解するうえでとりわけ重要な貢献を果たしうるように思える。アリストテレスは行為主体の能動と受動の関わり、出来事をも含めた、あらゆる事物・ものごとの存在様式を三つの術語（「完成（*entelecheia*）」、「力能（*dunamis*）」そして「実働（*energeia*）」とその組み合わせにより包括的に解明する様相存在論即ち存在様式、在り方の理論を展開している。魂のように身体に内在する不可視なロゴスの存在様式は力能と完成の組において、そのエルゴンは力能と実働の組みにおいて捉えられる。私にはアリストテレス全集が十二世紀にラテン語にそのように翻訳されて以降、伝統的に多くの場合「実働（*energeia*）」と「完成（*entelecheia*）」を判別せずに、双方を「現実態（*actus*）」の名のもとに理解し、「可能態と現実態（Potentiality-Actuality）」という枠のなかで様相が理解されたことはアリストテレス哲学研究にとって大きなスキャンダルだと思われる³。ここでは伝統的な他の説に応接する暇は無く註に譲り、私に最も道理あると思われる理解を示す⁴。

アリストテレスにおいて「ロゴス（理）」は不可視であるが、彼は事物に内在するロゴスの存在様式を捉える表現を必要としており、「完成」と「実働」を導入したと思われる。「完成」は、後に詳しく考察されるが、アリストテレスの思考が常にそうであるように一つの成功した視点（*successful point of view*）から提示される概念である。彼は「完成」の導入によりあらゆる存在者をこの視点から秩序づけるその視点を獲得している。「完成」は一種の「限界（*peras*）」として「それに向かうそれ（*ephi ho*）」即ち「目的」と「それからのそれ（*apo hū*）」即ち「始動因」の「両方（*amphō*）」の存在様式を担っている（*Met.V17.1022a8*）。即ち完成は生成のゴールにおいて実現される一なる事物にロゴスとして内在する善や形相の存在様式であると同時に、その存在様式は動かすもの（始動因）に内在するロゴスの存在様式でもある。ここ

で「ロゴス」とは「一なる説明言表」という秩序ある言語的存在者であり、そしてそのロゴスにより指示されるそれに対応するところの世界にある一なる不可視な存在者のことである。

完成は、一方、対応する力能においてあるものをエルゴン上それに向けて動かすところのそのゴールを設定するという意味で、力能にあるものの何であるかを説明する不可視なロゴスとされる善や形相の存在様式である。完成は、他方、そこにおいてロゴスを持つ事物がエルゴン上可視的なゴールにあるものや形姿として他の事物におけるないし他のものである限りにおける自らを介して働きにおいてあるもの即ち始動因に内在するロゴスの存在様式である。例えば、魂は身体に内在しつつ、身体がそのためにある目的因であり、しかも自ら動かずして身体を動かす始動因でもある。存在論があらゆる存在者の解明に向かうものである以上、魂や観知的な存在者の存在様式も解明されねばならず、その存在様式は「完成」と呼ばれる。目的因はロゴスに属し、始動因は今・ここにおいて観察されるエルゴンに属する。「完成」は魂の存在様式としてロゴスとエルゴン双方を媒介するそのような蝶番の機能を果たしていると思われる。

「完成」は一つの文脈では「知識がそうであるように」、他の文脈では「知識を観想することがそうであるように」と例示により語られる (*De An.* III. 412a22)。「知識」は幾つかの意味において理解される。それは「知っている人間の認知的活動 (the cognitive activity)」か「知識の統一体 (a body of knowledge)、科学即ち命題の体系」を意味するとされる⁵。ここでは命題として文により表現される第一に言語的な存在者として理解する。というのも、もうひとつの文脈ではその「知識を観想すること」が認知的活動を表現しているから、言語による定式として誰にも共有されるところの知識を理解する。知識は、まず、ロゴスであり第一の完成という存在様式を担い、そのロゴスを獲得した者が完成にあって観想活動する場合にもそれは完成という存在様式においてある。かくして「完成」はロゴスにもエルゴンにも適用される存在様式である。例えば、アインシュタインの脳内ニューロンのシナプス連合 $S1-Sn$ が生じたとき、彼には $E=mc^2$ という知識ないしロゴスが $S1-Sn$ と分

離されない仕方です。彼がその観想の働きを止めればその知識は待機機能として彼の脳に収納されているが、彼が死ねばその合成体は消滅している、ただしそのロゴスはシナプスから「解かれて」いるだけであり、ロゴスが「消滅」したとは語られないのではあるが。その証拠にそのロゴスは次世代に伝達され、知識 $E=mc^2$ はロゴス上彼の脳から分離され共有の財産となる、ただし個々の物理学者の脳のシナプスの働きはその真の理解にある場合には常に $S1-Sn$ であるが。そのロゴスの存在様式は「知識がそうであるように」ロゴスそれ自身としてまた「知識を観想することがそうであるように」その質料的な媒体を介しての実働として完成である。換言すれば、ロゴスはそれ自身として完成であり、同時にそれはそれが完成において内在するもの統合体を介して働きにおいてある。

アリストテレスはロゴスとエルゴンの分節において同じ語句例えば「身体」が実際エルゴン上今・ここで生きている「身体」とロゴス上ロゴスである魂から分離された「身体」においては同名異義原理が適用されるとし、生きているひとの働きにおいてある脳状態としての「知識を観想していること」に対し、一般化されロゴス化されている「知識」は存在論的身分において異なるとされる。実働とロゴスはロゴス上分節される。もしひとの魂をエルゴン上身体から分離するなら殺人者となる。形相や善はエルゴン上分離されない仕方です。エルゴンのロゴスとして存在する。同名異義原理とはアリストテレスによれば一方、今・ここで働いている「知識」とロゴス上分離された「知識」は異なる意味を持つというものである。

魂に適用するなら、一方、生きているカリアスに対し「これ」という指示行為は統合体カリアスとそれを一ならしめている魂の双方に届く。しかし、他方、もし死者ならば、「これ」はムクロを指示し当然生命原理である魂に到達することはない。不可視かつ不動でありながら、物体をして今・ここで動かしているものがあるとすれば、「これ」により指示され、ロゴス（一なる説明言表としての定義）の形成においては身体部分から分節されて理解されることになる。他方、エルゴン上それは不可分離である。冒頭に掲げたプラトンの第二の航海はアイデアの離在と分有に向かうが、アリストテレスはその

航海には同乗せず，師のアポリアを乗り越えるべくロゴス上の分離とエルゴン上の不分離の理論を展開する。ただし，彼は自ら「いかに語るべきか」「いかに問うべきか」という矛盾律に基づく言語の規範的仕様の分析を介して「形式言論構築術 (*logikē*)」を展開するが，それは師の「最も明晰なこと (*aspharestaton*)」，「最も堅固なこと (*errōmenēstaton*)」だけを語る第二の航海の航跡を辿ったものであり延長線上にある (cf. *Top.* I.11, 14, *Tim.* 49d)。彼のロギコスな探求はエルゴンにより相補的なものとされる。

ここでロゴスとエルゴンの分節と総合の見取り図を一般的な仕方で提示しておこう。不可視なものを探求対象とすると，双方の「共鳴和合」，「同意」という仕方で相補的展開が不可欠であることの基礎的な理解を得るためである (*Nic.Eth.* 1172b3-8, *Gen.Anim.* 729b22, cf. 1072a20, 1086a9, 1340b7, 1344a9, 1374b9)。ロゴスはそれ自身として不可視であるが，それがエルゴンに反映される限りにおいてその実在性とロゴスとしての妥当性が確認される。また後に考察する進化生物学に見られるように，内在的なロゴスなき帰納的，統計的，確率的エルゴンの定量的記述はそのロゴスを密輸入してつつ故意に無視するか思考の欠如か，そのいずれでないにしても蓋然的なものに留まるであろう。双方は個々のケースにおいてあくまで程度の差を許容するが，極性化して言うことが許容されるならば，ロゴス上次のように分節される。

[L] ロゴス (理)

[E] エルゴン (働き)

実在：理，比，複合的なもの (合成体) の一性の根拠 vs 今・ここの不可分の単純なもの (可感覚，叡知的対象) の働き，魂の個々の働き
魂のアクセス：

方法：矛盾律と言語の規範性に基づき「いかに語るべきか？」

vs 感覚等の接触的知識に基づき「いかにあるか？」

実践：定義，演繹等による分節と総合の普遍的言語による考察

vs 不可分な個体の今・ここの認識，個別行為と帰納的集積

ゴール：普遍的，必然的なものの共時的知識

vs 現に働きにおいてあるものの一時的、連続的認識

欠陥（相補性の必要）：定義形成語句の（エルゴンにおける使用との対比
における）同名異義

vs 必然性および普遍的知識の欠如

歴史的事例：エレア派，プラトン（第二の航海），大陸合理論

vs ヘラクレイトス派，イギリス経験論

この図式的な理解は双方が相互の補助を必要としていることを示している。誰であれ存在者の学的認識を求めて存在論構築を構想するとするなら、理論は働きにおいてある具体的な存在者の個別的認識を普遍的に説明するものでなければならず、個別的な認識は存在論の理論としての妥当性を保証、検証するものでなければならない。そしてロゴスとエルゴンはそれを扱う普遍性の程度において、それぞれの局面で送り返しが求められるそのようなものである。

プラトンはロゴスへと逃れ第二の航海に出立して提示した確実な命題は「美しいものは美によって美しい」（*phaedo*.100e）という類のトートロジカルなものであり、そこから美それ自体として離存的で自己同一においてあるアイデアの存在に導かれた。もしロゴスとエルゴンがプラトンのアイデア論のように離存と分有の関係としてではなく、ロゴスが何らかの仕方でこの世界のただなかにおけるエルゴンに内在し（この内在を [LinE] と表記する）、しかもエルゴンを形成しているとするならば、さらにエルゴンが、そのロゴスの正しさを保証するものであるとするならば、双方の総合がなされたことになるであろう。アリストテレスは「かつて問われまた今問われ常にアポリアとなるもの、それは在るものとは何か、それは即ち実体とは何か」と語るとき、最も包括的な次元におけるロゴスとエルゴンの送り返しによる総合の不断性を語っている（*Met.* VIII.1.1028b2-5）。彼は言う、「本質とそのロゴスがいかにあるかを気づかずにいてはならない、それなしに探求することは何もしないことである」（VI.1025b28-30）。彼は今・ここに働いているエルゴンの只中にロゴスの実在性を把握すべく、ロゴスとエルゴンの相補的展開を遂

行している。

1.5 アリストテレスの実在論——ロゴスとエルゴンの包括的基礎理論——

5.1 普遍存在論と神学の総合

先に彼の存在論が、実体語と属性語の述定の言語的振る舞いの差異から導出される「実体」「性質」等の「存在者の類」のロゴス（形式言論構築術的）な議論である範疇論を基礎にして構築されることを確認した。そこでは「ある」をめぐる言語の規範的使用の議論が展開され、それは可視的な実体も不可視的な実体も同じ権利において扱う基礎理論である。そのうえにアリストテレスは「自然」と呼ばれる存在者に内在しその生成と存在を秩序づける質料と形相の因果性の理論を展開した。この質料と形相の内在性の主張こそプラトンのイデア論の離存性と分有のアポリアを回避する一つの解決案として考案された。エルゴンに内在するロゴスという主張は先行者たちのアポリアを歴史的背景にしている。

この生成消滅するものの原理である自然が因果性の理論として展開されたことに対応すべく、存在の理論が構築されている。あらゆる存在者の存在様式を考察する様相存在論が自然次元における質料と形相という存在者の関係を開示する質料形相論をより基礎的な次元で「在るものを在るとして」探求する普遍存在論の主翼を担っている。最も一般的に言えば、「存在（ある）」と「非存在（あらぬ）」さらにはそのあいだに成立しているであろう「生成消滅（なる、めつする）」について包括的な理解を提示する学的営みがあるとすればそれは「存在論」と呼ばれる。

実践学は行為を制作学は文学作品や技術品等の製作めざすのに対し、理論学は知ることをそれ自身の故にめざす。理論学には「数学」、「自然学」そして「神学」が属するとされる（*Met.* VII.1.1026a19）。アリストテレスは存在者を存在として考察する「第一哲学」と呼ぶ帰一的存在論の構築を介して、従来のアポリアを克服しつつ、普遍存在論と神の探求としての神学との統一を企てる。彼は言う「かくして、もし自然によって構成される実体とは別に離れて異なる実体が存在しないなら、自然学が第一哲学となるであろう。しか

し不動の実体が存在するならこの学がより先であり第一哲学である、そして第一であるという仕方で普遍的である。在るものについて在る限りにおいて考察することそして在るものは何であるのかそして存在である限りにおいて内属することがら〔存在者の類や存在様式〕を考察することはこの学に属する」(1026a27-32)。

存在者を存在として考察するこの「この〔理論〕学に属する」一つの営みは存在者を「存在者の類」と語られる範疇によりグループに分けることにより「存在は何であるか」の探求を遂行することである。そこで重要なのは実体範疇と属性範疇に属するものどもの存在論的差異と秩序づけである。さらに、「存在である限りにおいて内属することがら」とは何であれ存在者は自ら何らかの存在様式ないし在り方においてあるが、それが様相存在論として展開される。存在者を存在として考察する基礎として範疇分析があり、その実体論の展開としてとりわけ「自然」と呼ばれる質料と形相の関係の理論があり、さらにその様相分析がある。この普遍存在論と矛盾のない仕方で神学が遂行される。

アリストテレスはここで「第一であるという仕方で普遍的」ということこの理解は「存在」と「一」を多義性のままに放置することなしに、何であれ「在る」と語られるものを第一の存在者との帰一的構造のもとに秩序づけ一つの理論学の構成をめざしている。このような帰一的存在論においては「不動の動者」と呼ばれる神が第一の存在者である。そのような究極的な存在者との関連において秩序づけられつつ、相対的に独立した第一のものどもとさらなる因果的連関を形成する諸項が秩序づけられる。第一哲学は普遍的存在論か神学かが問われてきたが、帰一的に理解する限り双方は秩序づけられるであろう。この帰一構造に見られるように、彼の関係の存在論の基本エンジンが質料と形相の因果的な関係ならびに、その存在様式としての力能と完成そして力能と実働の統帥的な仕方における「一」と「在ること」をめぐる存在様式の関係の解明である。そして質料と形相そしてその存在様式である力能と完成のペアは事物の一性を形成するロゴスによる探求であり、そして力能の実働は今・ここにおいて働きにおいてある存在者の存在様式の探求である。

そして力能の実働であるエルゴンに完成としてロゴスが内在する限り包括的な理論が構築されよう。

実際、彼は神学的議論を展開する『形而上学』第十二巻において、一つの宇宙と一つの不動の動者が存在することの論証のなかで、「完成」の概念に訴えて神が説明言表上そして数において一であると論じている。

数において多であるあらゆるものどもは質料を持つ（というのも一にして同じ説明言表は例えば「人間」のそのように多くのものどもについてあるが、ソクラテスは一人だからである）。だが、第一の本質[何であったか]は質料を持たない、というのも完成だからである。かくして第一の不動であって動かすものはロゴス（説明言表）そして数において一である（XII8.1074a33-37）。

ここで「完成」は質料の故に変化のなかで多様でありうるものとは異なる「統帥的に一かつ在ること」（412a21）という存在様式のことであり、アリストテレスはそれを第一の本質に帰属させている。それにより不動の動者は数においてただ一つでありまた帰一的構造のもとに一つの説明言表により開示される一なるものであることを特徴づけている。神学的議論のなかに普遍存在論の主要な鍵概念である「完成」が適用されることにより、彼は神学—存在論アポリアつまり第一哲学は神学であるのか、存在論であるのかの難問に陥ってはいない。普遍的存在論において、存在である限りにおいて「内属することがら」として存在様式としての三種類の様相概念「完成」、「力能」そして「実働」が何であり、いかなる関係にあるかが探求される。

存在者を存在として考察するこの第一哲学においてあらゆる存在者を包摂する理論が目指されているからには、不可視的な存在者魂やヌースそして神なども考察対象に含まれるとすることは道理ある。今見た不動の動者の理解は複合的なものではないが故に、定義の形成によるアクセスが拒まれており、何らかの認知機能による直接的な把握が求められる。彼は、実際、『形而上学』第七巻十七章冒頭で存在論の最終目標について言う、「実体とは何でありまたどのようなものかを語らねばならないが、今度は言わば[Lとは]別の出発点を形成して語ろう、というのも、もしかするとそのこと[E]から可感覚的実

体とは分離されているかの実体 (*kechōrismenē tōn aisthētōn ūsiōn*) についても明らかになるでもあろうからである」(VII17.1041a6-9)。私にはアリストテレスは不可視な存在者の把握をいかに遂行すべきかを真剣に受け止め、第七卷十七章以降第八卷六章まで主にエルゴンアプローチ [E] により実体の探求が遂行され、第九卷において様相存在論の展開に基づき双方の総合が企てられていると解する。彼は先述のように第九卷冒頭で「存在」は [L] 力能と完成に即して、また [E] 働きに即して語られる」という二つの視点を取り入れ、不可視な神やヌース、魂が理解されることにより完結する彼の存在論の残された仕事として、ロゴスの一性とそれが言わば可視化されている働きの多様性の次元の総合を企てている (IX1.1045b34)。

彼は『形而上学』第七卷十七章以降第八卷六章において、「実働としての実体」という視点から形相の実働としての形姿の観察を介して事物の一性の探求を遂行する。彼は『形而上学』中心巻 (VII-IX) において [L] と [E] 双方の分析を経て、第九卷十章において、常に実働においてある「非合成諸実体」の認識とその認知機能について提示する。彼は冒頭で真と偽に対応する存在様式に言及すべく対照的な二項の幾つかの組み合わせについて言う。「存在」と「非存在」はかたや述定の類に即して、他方それらの力能或いは実働に即して或いはその反対対立に即して語られるので、最も統帥的な仕方における存在は真か偽である」(IX10.1051a34-b2)。即ち、世界の側の存在様式つまり結合されていたり分離されていたりする存在様式が最も統帥的な仕方判断の真偽と関係づけられているとする。世界がそうであるように結合し分離するとき真であり、さもなければ偽となる。このように「統帥的に」は二項の関係概念を、一方向的に秩序づける存在様式として表現している。

非合成的なものの認知については叡知 (*nūs*) が「触れるか触れないか」という仕方でのみ実働するか実働しないかつまり知か無知のいずれかであり、決して偽の可能性はないとされる。コンピューターを駆使する現代人には叡知作用 (*noēsis*) をサーチにそして触知を合致する電子媒体同士のヒットに譬えることが分かりやすいであろう。「かたや叡知の運動が叡知作用であり、他方それは円の回転である」(*De An.*I3.407a20)。閉じたネットワークのなかで

同型のものが合致するように、叡知は叡知対象と同じ系のなかに存在する。『形而上学』はこのようにそれまで培った論証を発見するものとしての発見的探求論の延長線上で、さらには「叡知」の実働による接触的な探求が遂行される。

アリストテレスは不可視なものの実在を議論しており、その探求が複合的な存在者のロゴス（理）に対する探求に適した定義の形成を介する [L] ロゴスアプローチと不可分な存在者に対する直接的な認識に適した [E] エルゴンアプローチの相補的展開により遂行されている。この考察を通じて不可視な神についても何らかの対応を見出すことが期待される。ここでは質料形相論と様相存在論により、一なるものごととそのものごと同士の多様な関わり、出来事、行為、認知活動等あらゆる振舞いを力動的に把握する包括的なロゴス（理論）の方向性を提示したい。アリストテレスの [L] [E] 二つの存在者の存在の分析がいかなるものであり、いかに相補的に展開されるかに集中してテキストの分析に従事する。

5.2 アリストテレスの実在論

ロゴスの予備的理解

ここで、哲学において常に問題とされる世界と人間、実在と認識の関係についてアリストテレスが実在論的立場を取っていることを確認したい。実在論とは世界は秩序により制御されており、秩序の原理であるロゴスのそれ自身としての実在性を主張するものであると言ってよい。「ロゴス」を基本的に「説明言表」ないし「理（ことわり）」と訳す。これは一方で人間が提示する最善の説明言表としての定義をめざす諸部分から構成される言語表現を、他方その言表により指示される世界を織り成す理（ことわり）を意味表示している。ロゴス（理）は実在としてそれ自身不可視な形相（*eidos*）や目的（*to hū heneka*）としてのロゴス即ち「説明言表により意味表示（指示）される理」を意味している⁶。

一方、世界ないし事物・事象（もの・できごと）はその存在様式として秩序あるものであり、人間の認知機能とは独立に自らのロゴス（理）を備えて

それ自身において存立しており、他方、人間の認知的行為が提示する最善のロゴス（説明言表・定義）は世界の存在様式に合致するという實在論に与している。彼は言う、「定義は一つのロゴス（説明言表）であり、すべてのロゴスは部分を持つので、ちょうどロゴスが事物（*prāgma*：もの・ごと）に対してあるように、ロゴスの部分は事物（もの・ごと）の部分に同様にある」（*Met.* VII10.1034b20）。ここではひとが形成する「ロゴス」が「事物（*prāgma*）」即ちものや出来事との対応関係にあるとされている。説明言表の部分が事物の部分の構成秩序、理に対応し得ることによって、複合的な事物が複合的なロゴスの対応づけにより把握される。

「ロゴス」は一つには言語次元において用いられる一般に言葉をそしてより限定的に定義を形成する説明言表を意味する。例えば、「直角のロゴスは鋭角のロゴスに分節されず、鋭角のそれが直角に分節される。というのも鋭角を定義する者は直角を用いるから」（1035b6）が挙げられる。「半円」と「円」、「字母」と「音節」そして「指」と「身体」も同様である（1035b6-11）。鋭角はその最善の説明が与えられるとき知られるものであり、定義実践がその一性を把握することにより確認される存在者であると言える。世界のロゴスの在り方に基づき正しい言語使用が確定される。同様に、形相は質料から「ロゴス（説明言表）によって離散的なもの（*tō logō chōriston*）」（1042a29）と言われる場合も、言語実践による實在（ロゴス）への接近が遂行されている。そこではロゴス次元が確保され形相の実働は括弧に入れられている、たとえ外的環境の妨げがなく同時に実働するにしても。

ロゴスとエルゴンは實在の側で世界を織りなす二つの縦糸と横糸のようなものである。實在論はエルゴン・働きにロゴスが内在しており、素材を介して実働することにより個々の働きは秩序あると主張する。實在に対するアクセスとして、魂は [L] 言葉による一般的なロゴスの形成と [E] 感覚等の今・ここにおいて働く認知機能により知識と情報を得る。そのとき、世界はその姿を秩序あるものとして魂に自らを現わす。世界がカオティックな生成消滅（なりさりゆく）の舞台であるなら、一なる事物について成立する定義（ロゴス）は形成できないであろう。彼は言う、「自然学者においては双方の根拠が

語られるべきだが、何かがそのためのそれ（目的）は〔質料より〕一層根拠である。というのも、これが質料の根拠であり、質料がゴールの根拠ではないからである。〔エルゴン上の〕ゴール（終局）は〔ロゴス上〕目的でありそして定義とロゴス（説明言表）に基づく原理（始原）である（*to telos to hū heneka kai hē archē apo tū horismū kai tū logū*）（*Phy.*II9.200a34）。エルゴン上のゴールはロゴス上「何かが「それ」のためのそれ」（目的）における「それ」に代入されるものとして「目的」に他ならず、そしてその目的はそれ自身として不可視であるが事物の一性を秩序づける定義の形成により原理、始原であることが確認される。ロゴス的な存在者である目的は事象の一性の説明言表の形成を介して質料に秩序を与える根拠として、さらにエルゴン上ゴールとして観察される働きを介して確認される。

ロゴスとエルゴンは分離されたままではなく、それらの総合こそ課題となる。双方は実在への二つのアクセスとして「ロゴスによってそしてエルゴンによって」さらには「ロゴスのみならず、エルゴンにおいても」という仕方では双方が相補的なものとして位置づけられている（eg.729b22, 1072a20, 1086a9, 1340b7, 1344a9, 1374b9）。そしてロゴスはエルゴンの確かめにより「信用される」（1172a23）。エルゴン分析を介してロゴスは言わば可視化されている。魂の認知機能に即して、或る場合には〔L〕普遍的な説明言表により定義の形成を通じて、他の場合には〔E〕個々の合成体や叡知対象について感覚やノエシス（ヌース（叡知）の働かないし探索作用）による認識を通じて、事物の構成要素とそれらの一性ならびに多様性が探求される。実在論はロゴスの働きに応じて魂の個々の直接的な認知機能である感覚や叡知の実働においても確認される。

私が「ロゴスアプローチ〔L〕」と言うとき、エレア派やプラトンの第二の航海におけるロゴスによる探求の伝統のなかでアリストテレスによる「いかに語るべきか」を問うロギコスな探求を端緒とする「普遍的に語る〔考察する〕」その探求を意味している（eg.1037a22, 1071a17, 1087b17, 274a19-29, 280a33, 282a14, 83a1, 121a6, 141a15, 142b20, 748a8, 82b35, 84b2, 88a19, 204b4, 264a8, 316a11, 1069a28）。より具体的には「何であるか」のもの自体

ないし自己同一性の問いに対する普遍的なロゴスの形成を遂行するさいに、質料と形相それに対応する力能と完成により実在としてのロゴスを捉えるべく遂行する企てを言っている。もちろんこれは思考の一つの働き・エルゴンであるが、語られたものとしての普遍的なロゴスが実在としてのロゴスを対象にするものである限り、共時的、無時間的で普遍的なロゴス次元を析出することができるかと理解している。可感覚的実体の場合には質料と形相はロゴスにおいてのみ分離され、生成消滅がそこにおいて確認されるエルゴンのうえで双方の分離は確認されない。そこに二つのアプローチの非対称性を見ることができる。

5.3 魂の直接的な実在認識

個別的な魂の認知的働きは実在の今・ここのエルゴンに应じる今・ここの認知的エルゴンとしてエルゴン次元を形成する。アリストテレスは「[E] 実働に即した [今・ここの] 知識は事物と同じものである」と言う (*De An.* III.5.430a19, 431a1, cf. 429a10-18, b5-9)。さらに「感覚しうるものは力能において現に [今・ここで] 完成における可感覚の対象のようなものである。かくして、かたやそれは、似ていないものであることによって受動するが、他方受動したときには同化されてしまっているそしてかのものの如きものである」と言われる (II.5.418a3-6)。ここで「如きもの」とあるのは「感覚は質料なしに当該の諸可感覚的形相の受容しうるものである」(II.12.424a18)という限定により説明される。感覚が成立するとき、感覚器官を通じて魂は対象の質料ぬきにその形相を受容する。それ故に視覚が実働するとき質料ある外界の事物とそのまま同じになるわけではない。彼は「魂が諸形相の場所である」(III.4.429a27)と語られることに同意している。彼は言う、「質料なきものどもにおいては、叡知することと叡知されることは同じである。というのも観想的な知識とこの仕方では知られるものは同じものだからである」(430a3-5)。このような直接的な認識においてはロゴスとしての形相はエルゴン化されていると言える。例えば、白が感覚されたとして、感覚が形相を受容すると語られる限りにおいて、それはロゴスを持っており（例えば「光を反射する色」）、そ

のロゴスを直接認識したと語ることも許容される。発見的探求論においては説明言表の或る集合体である「論証が発見される」と言われることもある(46b20)。

彼は定義形成以外の認知機能に訴えて今・この具体的な事物の認識獲得に向かう事例を挙げることがある。「[L] ロゴス [理]」の諸部分は形相の諸部分のみであり、それは普遍のロゴス(説明言表)である。というのも、円であることと円、また魂であることと魂は同じだからである。だが統合体については現に[今・ここで]、例えばこの円そして何らかの可感覺的なもの[「銅製の円」]や叡知的なもの[「数学的対象」]の個別的なものどもについては、[L] 定義は存在せず、[E] 叡知作用(*noēsis*)ないし感覚によって認識される」(VII10.1036a2-6)。「E」感覚や叡知による認識はロゴスの形成とは異なるアクセスである。不可視なロゴス例えば魂や普遍の円が統合体と語られる個別的なもののエルゴンに内在することにより力能の実働に秩序を与えている。個々の対象例えば「この」銅製の円については魂の対応する認知機能により認識され、対象に応じて異なるアクセスが取られる。

彼は続けて言う、「しかし、それらが完成から離脱してしまったなら(*apelthontes ek tēs entelecheias*)、それら[eg. 銅製の円]が存在するか否かは[感覚や叡知作用が発動しないため]明らかではない。しかし、それらは常に[L] 普遍的なロゴス(説明言表)により語られそして認識される。質料はそれ自らに即しては不可知なのである」(1036a6-9)。定義の対象とならない現に今・ここに存在している統合体や可感覺的、叡知対象となる個別者については感覚や叡知作用という魂の対応する認知的働きにより認識される。しかし、統合体の規定性を担う形相の存在様式である完成から逸脱するとき、もはや対象からの触発を必要とする感覚や叡知は発動しない。それ故に、存在するか否か個的には明らかではない。

ロゴスはエルゴン次元においてこのような合成体において実働し、質料がそれを保持する力能を喪失する時、合成体は消滅するが、ロゴスはそれ自身として生成消滅過程を経ることはない。例えば、先に $E=mc^2$ の事例で確認したように、一オクターブの調和音は質料である空気が弦の長さの二対一の比

を受容することにより奏でられる。しかし、空気が散逸しだしその比を保持できなくなるとき、ロゴスはエルゴン上「解かれる (*luetai*)」が、ロゴスそれ自身が例えば一対三に変化するわけではない (1036a6, cf. GC.II0.328a27)。合成体である調和音は今・ここで消滅するが、比はそれ自身としては少なくとも消滅過程を経ることはない。ただし、この形相としてのロゴスが質料からロゴス上分離されるがエルゴン上分離されないこの非対称性こそ本稿で探求される大きな課題である。

感覚等の認知情報を取り入れつつ、定義は部分を持つことにより、事物の部分に対応することができる。これにより事物を一なるものとさせている見えないロゴス (理) ないしロゴスに即した実体を明らかにする定義 (ロゴス) の形成と、一なる事物の多様な働きを観察、知覚することによって明らかにする魂の認知機能の働き (エルゴン)、これら二つのアプローチが人間の側からの実在へのアクセスとして採用され、相補的に展開される。

5.4 エルゴンのロゴス化による定義への組み込み

実在の認識としては、エルゴンに内在するロゴスを捉え、一なる事物の本質を開示する説明言表である定義を、実在を織り成すエルゴンのロゴス化により組み込みつつ形成することが一つの目標となる。換言すれば、[L] ロゴスとしての存在者は一性を表現する存在様式に即して [L] 定義の形成を介して語られ、[E] 今・ここにおいて観察される限りの働きにおいてある存在者は [E] 働きの観察に即して語られる。そして双方の語りは相補的なものであることがめざされる。万物流転論者が主張するように世界が流転であっても、エレア派がの主張のように端的な一であっても部分からなるいかなるロゴスをも形成しえないであろう。彼は自らの帰一的存在論により、可感覚的事物は内在的自然の合成により、また存在様式の合成により定義を形成しうるものとした。

実際、彼は説明言表にエルゴンを言わばロゴス化し組み込むことにより、総合的な理解を追及している。ロゴス化とは今・ここにおいて感覚されるものを一般化し定義の形成句として用いることである。彼は言う、「動物のロゴ

スに即した実体そして形相そしてこのような身体における本質は魂であるので、それぞれの部分[eg. 視覚]は、少なくともそれが適切に定義されるなら、エルゴン [見る] なしには定義されない、そのエルゴンは感覚 [魂] なしには [動物に] 属さないであろうものである」と言う (VII10.1035b14-18)。例えば、ロゴスに即した実体の部分「視覚」の定義は、その働きである「視覚の視」(1050a24) を取り入れ、「力能において視を持つ物体 (瞳や水晶体) の形相即ち完成である」という質料と形相、力能と完成の合成によるものとなろう。「見る」というそのエルゴンが第一義的に合成体に属するその実働は名詞化等により何らかロゴス化され、「力能において「視」を持つ物体」として様相的に存在者化され、定義の部分に組み込まれる (cf. *De An.* III.1.412b17, b29)。

アリストテレスの実在論とは感覚においても、またその情報を取り入れた普遍的な事物の一性の定義においても、世界のロゴスに対応するロゴスの形成が可能でありまた魂が把握するロゴスとしての形相は事物の形相と同一であるそのような実在および認知機能の理解のことである。

第二章 様相概念の導入

2.1 様相概念の予備的理解

アリストテレスはプラトンから引き継いだ伝統的な「エルゴン (*ergon*)」と「力能 (*dunamis*)」の概念とは別に、新たに「実働 (*energeia*)」と「完成 (*entelecheia*)」の概念を導入し、その相補性の理論を展開する。当時、「力能 (*dunamis*)」と「働き (*ergon*)」は日常語として広く用いられていた。アリストテレスが当初その枠組みにおいて思考し、その乗り越えを試みた師プラトンの『ソフィスト』においては次の記述が見られる。

彼はソフィストが誰であるかを規定する試みの中で、彼らは真理ではなく論過やいかなる手段に訴えても自らの政治的、個人的利益と勝利をめざす「争論家 (*anti-logikos*)」(232b) であるとするが、ロゴスとエルゴンの対比を導入しつつまず彼らを分類して言う。「もう一方の捕獲術はエルゴン (働き・実

踐)に即してであれロゴス(議論・理論)に即してであれ、力ずくで一氣に手に入れる「征服」であろう」(219d)。また、彼は「力能」とその働きについて言う、「或る力能に基づく受動や能動 (*pathēma ē poiēma ek dunameōs tinos*) は相互に出会うものども (*sunionton*) から生じるものである。……われらは、受動することないし最小のものに対してでも働きかけることの力能が或るものに備わっているとき、存在するものどもの十分な規定であるとした」(248bc)。真実在の探求のなかで運動や変化は能動的な力能と受動的な力能をもった二つの事物とその接触により生じるとされ、そして力能とその能動的、受動的実働が実在の規定であるとされている。そこに単なる無秩序な生成流転ではなく秩序を見出せるかが、プラトンの課題であった (cf.252a)。

アリストテレスによればプラトンはこの現実世界(感性界)は生成流転しており何も同一性に留まることはないというヘラクレイトス主義に同意していた。プラトンは「可感覚的事物すべては流動しておりこれらについて知識はない」と主張していたことが報告されている (*Met.*I6.987a29-b1)。そこでは運動は能動主体と受動主体そして接触という力能とエルゴンの三局構造のもとにそのつど感覚に基づき把握そして計測される他なかった。プラトンは「完成」の概念をもたず、働きを能動力能と受動力能を持つ二つのものの出会い、衝突において捉え、そのエルゴンにおいて存在者の規定を見出し得ると想定していたのであろう。

ここで「完成」について触れたのはこの概念が「実働」の概念とともに正しく理解されなかったからである。これらの様相概念「力能」「完成」そして「実働」は本稿を通じてその解明に向かうが、ここでは言語使用上の事実の確認を含めて理解の方向と線のみを簡単に得ておく。いかなる文脈においてまたいかなる問題を解くべく「実働」と「完成」の概念が導入されたかもこれらの基礎的な理解の展開において解明したい。

彼は「完成」を「一」と「在ること」は複数の仕方で語られるので、統帥的な仕方において「[そう語られるもの]は完成である」と簡潔に規定している (*De An.*III.412a21)。ここで「存在ないし存在者 (*to on*)」ではなく「在ること」と *einai* (Be 動詞不定形) とあるのは「完成」が「力能」や「実働」

と共に存在者の存在様式、在り方を開示する様相概念だからである。私は Themistius と共に *entelecheia* は状態の副詞と所有 (have) 動詞が形成する句 *entelōs echein* に抽象名詞化の接尾辞 *-eia* (例, *alēth-eia* (真理)) により一般化, 抽象名詞化したと介する。実際, この語は複数形において用いられることは一切ない。一般的にこの種の副詞と所有 (have) 動詞が形成する句 '*hūtōs echein*' は「この仕方であること (to be so)」を意味する常套句である (cf. 185b29, 1017a29)⁸。同様に *entelōs echien* は「完成においてあること」を意味している。その短縮形として「完成」の訳語をあてる。存在の在り方は範疇の一つとしての「状態」よりもはるかに広い存在様式をカバーする (註 3 参照)。また *energeia* は後述のように能動と受動を区別しないで表現される出来事として理解されており, 「働きにおいてあること」という意味で「実働」と訳す。

Dunamis を「力能」と訳すのは単に物理的な根源物質の持つ「衝動」という意味での「力」の移行, 力の発現だけが問題になるのではなく, 論理次元における「可能性」を表現する語でもあるからである。さらにはその力を行使するか否かに関して能動行為主体の裁量に任される待機的な態勢をも意味するため, 包括的に「力能」により理解する。「力能にあってそして完成にならないものは不定である」 (*Met.* IV 4.1007b28) と語られる。減衰や増大や待機等のただなかにある多様な力能を備えるものも, その力能は常に「何かの」それとしてそれぞれ一つの規定性を得る。存在様式において何かの力能として自らの規定性と方向性を得るのは, 力能がそこに向けられている完成にあるもののロゴスと関係づけられる限りにおいてである。運動はアリストテレスのシステムにおいてはエルゴン上未完の力能の未完の実働であり, 待機力能は完成にある事物に内属して, 統合体がそれにより実働することもしないことも許容されている存在様式である。運動の力能が「別のものにおける変化の始原と語られる規定された〔運動に即した〕力能」と規定されるのに対して, 待機力能は「第一に力能あるものは実働することが許容されているものであることによって力能ある」と規定される (IX 8.1049b6, 13)。

「完成」は「統帥的な仕方における一と在ること」であった (*De An.* III.

412a21)。「完成」は力能との関係概念であり、完成は力能を「統帥的に」ロゴス上そしてエルゴン上秩序づける存在様式である。「完成は力能にあるもののロゴスである」(II4.415b14)と語られるように、例えば石や木が「建築されうるもの」という規定を受けるのは家のロゴスである完成においてある棟梁の思考にある設計図と関連づけられる限りにおいてである。「建築されうるものが、われらはそれ自身[石や木]をそのようのものであるという限りにおいて、完成にある(*entelecheia ē*)とき、建築される、そしてそれは建築実働である」(cf.*Phy.*III1.201a16-18)。完成は石や木等力能あると規定されうるものの稼動域をロゴス上定め、その外にいかなる当該の力能あるものを見出しえないという仕方では力能とその実働を秩序づける。彼は言う、「完全なもの(*teleion*)はその外に何か力能あるものを捉えることのないものである」(*Met.*X4.1055a11)。この完全なものが他のものと統帥的な仕方において関連するとき、その存在様式は完成である。換言すれば、「完成」は複合的なもの(例えば、魂のように身体なしにはないもの)の一性と在ることをその外側で見出すことの出来ない統帥的な仕方における一と在ることの十全な存在様式を表現している。

先の建築の引用文において「完成にあるとき」における「完成」とは建築活動のゴールである合成体家のロゴスが建築家・棟梁の思考におけるロゴス(設計図)と同じものであるその存在様式である。というのも、建築が成功したなら、設計図通りに家がエルゴン上完成するであろうからである。ゴールは目的でもある。完成は「人間が人間を生む」複製機構に見られるように始動因そして目的因双方の存在様式である。この始動因が持つ完成に関係付けられるとき石や木という事物がロゴス上「建築されうるもの」という特徴づけを獲得し、そして大工による建築活動が生じる。実際、彼は「完成における思考から力能にあるものに基づき生成することの定義形成句は「もし外的なものの何も妨げなければ、主体が欲するときに、生成する」である」(*Met.*IX7.1049a5-7)と規定している。石や木が建築されうるものという特徴を得るのは建築家の「完成における思考(設計図)」即ちロゴスに組込まれる限りのことである。

従って、力能の何であるかを明らかにするためには人工物、自然物とを問わず目的因や形相因のような完成への言及が不可欠となる。この運動力能の説明は[L] 力能と完成に即した始動因の持つロゴス（説明言表）の提示によるロゴスアプローチであると言える。従来「完成」の概念がなかったために、力能のロゴスが定まらず、プラトンにおいては「運動に即した力能」としての始動因のもつ能動力能と対応する受動力能そして相互の接触によるエルゴンだけが問題とされてきた（*Met.*IX1.1046a2）（註7参照）。アリストテレスもエルゴン次元における「運動」とその力能の関係についてはプラトンの三局構造のもとに考察するが、「完成」の故に二種類の力能と実働が判別され、運動は未完の力能の「或る実働」という仕方で位置づけられることになる（*Phy.*III2.201b31-33）。

「完成が力能にあるもののロゴス」の一応の理解をえたものとして、アリストテレスは「存在」の語り方として『形而上学』第九卷一章において二つのアクセスを提示している。そこでは「力能と完成に即して」と「そして」により並置されているものが「エルゴンに即した」存在へのアクセスである。これは彼の様相存在論のもとにおいては、[E]「力能（*dunamis*）と実働（*energeia*）」（1046a1）のペアによる今・この働き（エルゴン）であり、今・この具体的な観察がエルゴン次元においてその認識をもたらす。力能の今・この発現である実働即ち「働きにおいてあること（being at-work, am Werk sein）」は「ある」の一つの存在様式として存在論的に規定される。例えば、一般動詞表現「健康にしている（*hugiaizei*）」は「健康にしている者である」（*hugiaizon esti*）」と同じ意味であり、一般動詞により表現されるものは働きにおいて「ある」ものとしての「実働」に他ならない（185b29, 1017a29）。

「実働」の動詞形（eg.*energein*）は受動態で表現されることがなく、通常の「動かされる」等受動態動詞も一般的には「働きにおいてあること」として能動者と受動者双方の中立的な視点から観察を通じて把握される文脈が想定されている。彼は受動と能動を同じ仕方で対処できるとして言う、「受動することそして動かされることそして実働することは同じものであるとしてわれらは語ろう。というのも、運動は未完ではあるが、或る種の実働だからである。

あらゆるものは形成しうるそして実働にあるものによって受動した動かされるからである」(*De An.*II5.417a14-18)。例外なくあらゆる受動するものは実働にあるものによって動かされる。実働することと動かされることは相即する。それゆえに始動因としての能動者の力能の発現は相手方から記述すれば受動であり、中立的な「働きにおいてある」と理解しうる。かくしてこれは行為というより、それをも包括する出来事の範疇に属することがらであると言える。

彼は受動者の運動を引き起こす始動因が持つ力能を「第一の力能」と呼び、「別のものにおける別のものである限りにおける変化の始原」として特徴づけている(*IX*1.1046a10-11)。つまり始動因が持つ力能は能動者と受動者に分節される限りでの受動者を変化させる力能として言わば力と力のぶつかり合いの局面を想定して展開する。始動因は今・このエルゴン次元における観察対象である。始動因はホテン（「そこから」 *hothen hē kinēsis*）という場所の副詞やプロトン（「最初に」 *hē ti prōton ekinēse*）という時間の端緒を表現する語を伴い、時空特定可能と考えられている（eg.194b29, 94a22, 243a32, 1012a29）。これは始動因による力の遣り取りの現場を特定したうえでの帰納的なエルゴンアプローチであり、本質の定義は括弧にいれられている。運動はエルゴン次元においてその都度観察されるものとして看做されてきたことを示している。なお運動においては後に考察するように、能動者と受動者のあいだで「形相が伝達される」。従って、ロゴス上「運動」の定義には連続体存在者の在り方として「完成」に対する言及が不可欠なものとなる。

このように能動と受動の相即は、後述のように、形相の授受を媒介にして一般的には相互的な構造にあるために、行為ではなく出来事として理解される。日本語「実働」は「働きにおいてあること」の略語として用いる。「今・ここ」は「その時・そこ」という仕方での一般化を許容し、力能と実働の組はそのロゴス次元における分節がなされうるが、今・この働きは基本的に帰納的な認知と情報の蓄積のもとに探求が遂行される。

実働はその時点で実働している基体への帰属という仕方では、実働はその基体としての形相やその形相が内属する統合体を媒介にする。ここで基体は質

料と形相の合成に基づく「統合体 (*to sunolon*)」と呼ばれる生成消滅する個体のことである。形相の実働はこの基体を媒介にする。「例えば、視は見ている者のうちに、知識の観想 (*theōria*) は知識を観想している者のうちにそして生命は魂のうちにある、それ故に幸福も魂のうちにある、というのもそれは或る性質の生命だから。かくして実体そして形相は実働で (=働きのにおいて) あること明らかである」(IX8.1050a35-b2)。形相の実働がいかに基体に帰属するかというその仕方はここでは人間と魂とされる基体が現在分詞形により表現されており、見ている者は見ている限り、知識を観想している者は知識を観想している限り、魂ある者 (内魂物) は生命ある限り、それぞれの対応する実働が帰属する。実働はその帰属する存在者と離れておらず、「魂」としての形相が実働であるのは直接的には魂にそしてエルゴン上は統合体である生物に生命活動という実働が内属するからであり、また内属する限りにおいてである。ただし、これは今・この現場を一般化した記述であり、「何も他の妨げるものがなければ」という条件が付される。

以上、言語的振る舞いの考察を通じて三つの様相概念それぞれの概略的理解を得たこととしよう。「完成」において当該事物の一性と存在が実現されているが、この概念はロゴスとエルゴン「二つの文脈において、かたや [L] 知識がそうであるように、他方 [E] 知識を観想することがそうであるように語られる」(412a22)。かくして、「完成」は [L] 一方で力能がそれ自身としては不定であるなか、それをロゴス上特定するとともに、他方 [E] 力能と実働の組を完成に至るものと完成においてあるものの二種類に判別し、媒介する蝶番の機能を担っている。彼は言う「運動は未完なもの [力能] の実働 (*tū atelūs energeia*) であったのであり、他方端的な実働 (*hē d'haplōs energeia*) は他のものであり、完成されたもの [待機力能] の実働 (*hē tū tetelesmenū*) である」(*De An.*III7.431a6-7)。未完な力能の実働と完成された力能の実働は現在形と現在完了形が同時に適用されるか否かの時制テストにより判別される。「見ている者」は「見てしまっている者」であるが、「学んでいる者」は「学んでしまっている者」ではない。なお、ここで現在完了受動分詞形で「完成されたもの (pf:tetelesmai < pr.teleō)」が見られることは、新造語「完成

(*entelecheia*)」がなぜ複数形も動詞形も持たないか説明している。エルゴン次元における合成体の完成を表現する動詞は従来の *teleioō* (make perfect, complete, accomplish (LSJ) : その名詞形 *teleiōsis*) ないし *teleō* (fulfill, accomplish, execute, perform (LSJ)) により賄われると考えていたからであると思われる。これらの用語は従来複合的なもの合成体における完成や完全や成就を表現するものとして、しかも実際に働きにおいてあるものとして用いられていたため、彼は目的因でもあり始動因に内在もするロゴスの存在様式をそれ自身として表現する術語を必要としていたのだと思われる。ロゴス次元におけるロゴスの存在様式は「第一の完成」と限定されて用いられる (*De An.* III.1.412a26)。

このように私は力能と実働の組を基本的に魂の今・ここの観察による個体の把握を遂行する [E] エルゴン分析とし、力能と完成の組をロゴス次元における普遍的 [L] ロゴス分析という判別のもとにあり、彼は事物の存在に対し、さらにはそのロゴスとエルゴンに対しこの様相的アクセスを試みていると理解する。

2.2 様相アプローチと関連語の対応と相違

ここでは、様相アプローチ [L] ロゴスアプローチと [E] エルゴンアプローチの視点から判別される関連語を相補的な組みを形成しているものとして挙げる。アリストテレスは常に双方の相補的視点から存在者とは何か、さらには存在者に内属する限りのものの理論を構築する (それ故&を用いる)。

[L] ロゴスアプローチ & [E] エルゴンアプローチ

「形相 (*eidos* : ロゴスに即した実体)」

& 「形姿 (*morphē* : 質料と形相の統合体の形 : 実働としての実体)」

「目的 (*to hū heneka* : 何かがそれのためにあるところのそれ)」

& 「ゴール (*telos* : より先とより後を経た終局)」

「運動 (*kinēsis* : 未完の連続的な存在者)」

& 「変化 (*metabolē* : 二時点間における差異)」

「力能と完成(形相の存在様式(完成：*entelecheia*)が質料(力能：*dunamis*)のロゴス)」の組&「力能と実働(*energeia*<*en-ergon*：力能の今・この働き、発現)」の組

私は左辺[L]の側にいれた語彙や組には不可視なものが含まれていると理解している。右辺[E]の側にいれた語彙や組は認知主体である魂の働きにおいて直接観察されるものであると理解している(ただし、魂の一つの認知機能である「叡知」はその不可視な対象「叡知対象」を直接的に接触することを通じて認識するが、これについては別の対処が必要とされる)。かくして相補的な展開が不可欠となる。ただし、留意すべきことは魂による[L][E]二種類のアプローチそのものが魂という一つの実在の[E]エルゴンであることである。これら[L][E]がそこに向かう実在の側にも、また魂の認識上のアクセスの側にも魂が実在するものである限り、[L][E]ロゴスとエルゴン双方が見出され、議論は複雑になるがアリストテレス自身それぞれの概念のカヴァーする領域を注意深く分節している。そして私の理解では二つのアクセスを分節する理由は一方が不可視なものを巻き込むために道理あるものであることを明らかにしていくであろう。

例えば、運動は未完の力能の実働であり、ロゴス上「力能にあるものの完成、力能にある限り」という連続体存在者として定義されるが、運動はロゴスを備える始動因としての能動者の側ではなく、ロゴスを受容する受動者の働きに限定される(*Phy.III1*)。始動因の働きは受動者の受動に対応する実働であっても、性質変化などを蒙る運動には帰属させられない。未完の実働過程は観察されそして未完の力能という存在様式に位置づけられるが、受容したロゴスはそれ自身としては見出されず、ただ力能にあるものの方向を観察する限りにおいて、確認される。なお、この連続体存在者「運動」は[L]により普遍的に定義されうるものであると同時に、個々に[E]動かされるものである。魂の[E]アプローチの術語である「変化」も変化として記述されるものである限りのものは同様に[E]エルゴンである。魂の[E]認知的アクセスは二つの今のあいだの差異の認識により把握される「変化」として運

動を捉えなおす。現に動いているその運動は今・ここにおいて変化としてしか認識されない。これは単なる実在の側のエルゴンの記述ではなく、「[魂の]エルゴンアプローチ [E]」によるものである。そして先の魂による「運動は何であるか」の様相的な定義の形成を「[魂の] ロゴスアプローチ [L]」と呼ぶ。困難な点は魂の二つの認知的アプローチそのものが実在でもあることである。かくして魂の働きとして[L] [E]の具体的な働きが探求対象とされる時、彼は実在論者であり、観念論者、反実在論者ではないがゆえに、それらは実在としての「ロゴス」とも「エルゴン」とも呼ばれることがあるであろう。

私はアリストテレスが用いる術語「形姿」「ゴール」そして「変化」そして様相存在分析における「力能と実働」は当然実在を指示するものであるが、それらの概念を用いての魂の認知的アクセスをエルゴンアプローチ [E] として限定する。というのも、それらは魂の今・ここ或いはより普遍的にその時・そこにおける認知的活動を含意、想定することなしには同定されないからである。アリストテレス自身そのような方法的な自覚のもとにこの類義語による思考を展開していると思われる。

これらの様相アプローチのおおまかな理解を得たとして、様相概念がいかなる文脈において導入されたかを続いて考察したい。

2.3 「実働」と「完成」概念導入の文脈

3.1 「最初に哲学した人々」

非存在からの生成への「恐怖」

ここでこれまでの議論を踏まえて、アリストテレスはなぜ「実働」と「完成」という新しい概念を必要としていたのか、いかなる問題を解決するために導入されたのかを考察したい。アリストテレスは伝統的な概念「エルゴン (*ergon* : 働きとその産物)」を様相存在論の一つの視点として継続的に用いるが、ロゴスのエルゴンに対する内在の仕方を明瞭にすべく、この日常語の両義性の分節を契機に新しい概念の導入とともに様相存在論を展開したのだと思われる。彼はこの語が二つの文脈において用いられる両義的な概念であ

るとするが、アリストテレスは「エルゴン」の両義性をそのまま放置せず新しい二つの概念の導入により関連付けたことをここで論じたい。

最初に彼は彼の先行哲学者たちの諸立場がもたらすアポリアに対する応答として彼の様相概念に訴えて解決を図っていることを簡単に見る。そのことは彼が、先行哲学者たちの思索の主題であった存在と非存在さらには生成の諸概念そのものの理解として新しい概念を必要としていたことを示している。様相概念が従来存在論のアポリアを解決することができるということは、それがいかなる文脈において必要とされていたかを告げている。まず、実際にどのような解決案であったかを考察し、『形而上学』第九巻三章において彼が存在と非存在そして生成をめぐる文脈において彼が三つの概念をいかなるものとして導入したかを報告しておりそれを考察することを通じて、導入の文脈を確定したい。

先行哲学者は一様に存在と非存在、一と多の理解をそれぞれの仕方で提示してきた。夜空を見あげる者は観察経験に基づき森羅万象、宇宙が一なるものであると主張しよう。エレア派の祖クセノパネスは「全宇宙を見上げて、「神は一であること (*to hen einai*) だ」と言ったことが報告されている (*Met.* I5.986b24)。ロゴスの力に頼る者は「在るは在る」、「在らぬは在らぬ」という同一律とそれを支える矛盾律に依拠し、生成消滅する自然的世界を真実在であることを否定し、「ある」を厳密に語る場を見つけ出し、それを一として特徴づけるであろう。「パルメニデスは存在とは別に、いかなる非存在のあることのないことは自明のことと考えて、そこから存在は一であること、そして別の何ものでもないこと必然である」とした (*Met.* I986b27-29)。アリストテレスはまた彼の見解をこう報告している。「『存在』は、「一」がそれについて述語づけられるでもあろう、その一を意味表示するだけではなく、それはまさに在るところのものそしてまさに一であるところのもの (*hoper on kai hoper hen*) を意味表示すること必然である」 (*Phy.* I3.185b20, 186a34)。アリストテレスは彼を「ロゴスに即して一に触れた (*kata ton logon henos haptesthai*)」と評価し、「最初の知者たち」が「原理を物的なもの (*sōmatikon*)」としたことに対比している。プラトンは一方「可感覚的事物はすべて

絶えず流転しており」、これらには「共通の定義形成句」それ故「知識」は存在せず、他方これらと「分有」の関係にある対応する存在者を不生不滅なものとして立て、「存在するものどものアイデアと呼んだ」。アリストテレスはそれらの先行者の存在と一をめぐる諸見解を一言に要約して言う、「彼らは存在者がそれらに基づいている第一のものどもについて、それらは果たして一か多か、そしてもし多なら、有限か無限かを探究しているが、そうすることにより彼らは原理と構成要素が一か多かを探究している」(*Phy.*I1184b23-25, cf. *Met.*I5)。

アリストテレスは先行者たちの立場のいずれにも無からの生成に対する恐れがあったと解する。「最初に哲学した人々が最も怖れ続けたのは、先在している何でもないものに基づき生成することが帰結することであった (*homalista phobūmenoi diotelesan hoi prōtoi philosophēsantes, to ek mēdenos gignesthai prohuparchontos*)」(*Gen et Corr* (GC).I3.317b23-31)。これはパウロにおける「無からの創造 (*creation ex nihilo*)」と呼ばれる見解にも引き継がれた問題である。ギリシャ哲学者たちにより解決案として提示されてきたものとしては、一つには無始無終なものとして万物流転し続けているとし存在を排除するか、流転を迷妄として存在は一であり不動であるとするか、感覚に即しては流転、変化を認めたうえで、存在をロゴスに即してだけ語ることが許容されるとし、ロゴスと感覚を分断するかであった。

無からの生成に対する恐怖のなかでギリシャ哲学者たちは創造者としての神の概念に訴えることにより解決を求めなかった。全き無、全き非存在は存在と関わることはないという考えは道理ある。その枠の中では伝統的な「無からの創造」とは「或る」在らぬものからの創造と理解されよう。以下、アリストテレスの存在と非存在と生成をめぐる分析の検討を遂行する。

存在と非存在そして生成の先行哲学者のアポリアと「力能と完成」の組による解決

アリストテレスは存在様式の分析の視点からこれらのアポリアに取り組み、彼らのすべてが存在と一の理解において不明瞭であり、それ故に多くの

混乱を引き起こしている」と解する。[a] エレア派は論理法則（ロゴス）に即して確実に語りうるものは何かに集中し、運動や生成変化を否定するに至ったが、その必然的帰結として彼ら一元論者は「一」と「存在」を同義とし、事柄として同じであるとした。[b]ヘラクレイトス派は万物が流転しており、自己同一性を保つものはなく、従って「存在」と「一」の非存在を主張した。[c] アナクサゴラス、プロタゴラス、デモクリトスは万物は混在していると考え、「存在」と「一」の不定性を主張することにより矛盾律を否定した。[d] プラトンは生成流転の世界とは別にそこにおいて「一」と「存在」が端的に語られる自己同一性を保つ存在者の世界を立て、離存と分有の二世界説を展開したと言える。

アリストテレスは諸説の吟味の視点を「一」と「ある」が統帥的に語られているか否かに定めることにより、「完成」と「力能」の組を提示し、この統帥的な存在様式において合成体に成立するロゴス（説明言表）の提示を介して一性を把握するべく存在論を構築する。先行者たちの見解には力能と完成のいずれかの概念が不在であるか、それらの関係を明確に摘出することに失敗しており、それらを秩序づける総合的な視点が要求される。一般的に言えば、異なる視点を導入することにより「同じものが同時に一であり多である」と、また「或る仕方では、端的に、在らぬものから生成し、他の仕方では、常に、在るものから生成する」と語りうる状況がうまれるとするなら、これらの難問に応答する道が開かれよう。実際、アリストテレスは力能と完成の組により [a]－[d] の難問に応答を企てている。ここでそれを簡潔に提示する。

最初に、「存在即一説」を考察する。アリストテレスは [a] エレア派の一元論に抗して「同じものが一でありかつ多である」ことの裏付けとして、[A]「というのも一つは力能においてもまた完成においてもあるから」(Phy.I2.186a3)と語り、双方の組み合わせにより事物の一でありかつ多である様式を語る。同じものが二つの存在様式においてある二つの一を含み持つなら存在と一の同義性、つまり硬直した「あらゆるものは〔一義的に (*monachōs*) (185b31)〕一である」(185a22)と主張する一元論者 (*to hen kataskeuazōn*)

(325a30) の見解から解放される。

パルメニデスも「現象にはいやでも従わざるを得なかったので、存在を説明言表に即して (*kata ton logon*) 一であるが、感覚に即してより多いものであると想定した」(*Met.* I5.986b27-33)。ここでロゴスと感覚が対比され、その対比に基づき二つの世界が提示されていることはアリストテレスの存在論が乗り越えるべき明白なアポリアとして理解されよう。彼は一つの世界のただなかに存在と非存在、生成と消滅これらを総合する理論を必要とし、経験的な次元で存在と非存在を語りうる領域を確保すること、すなわちロゴス(理)とエルゴン(働き)の相補的な展開が不可欠となる。エレア派の運動を否定する争論的な存在理解に対して、「在る」は「まさに或る[一つの]在るもの (*to hoper on ti einai*)」を、「在らぬ」は「或る[一つの]在らぬもの (*mē on ti*)」を意味表示するとすることにより、他のものどもと比較できる同じ次元においてつまりこの生成消滅する現実世界において「在る」「在らぬ」を語る道が開かれる(187a3-11)。彼は存在様式の二視点の導入とそれに基づき、力能と完成の合成により連続的存在者として定義形成により把握される「運動」と感覚により把握される「変化」の相補的視点からアポリア解決を企てる。アリストテレスによるこの苦境の脱出方法として、まず自然学者たちと共に、「われらにおいては自然に在るものどもはすべてであれ或るものどもであれ動かされるものであることを基礎に定立しよう」(I2.185a13)とし、存在者は変化のもとに多であることを容認し、多くの一と存在者が内属する一つの世界の包括的理解を追求する。

次に、「万物流転説」を考察する。[b]ヘラクレイトス等「万物流転論者(一切生成論者)」は一切が変化のうちにあり自己同一性はどこにも見出せないとする。クラテュロスにいたっては師よりも急進的に同じ川を二度どころか、一度さえ渡れないとし、「何事も語られるべきではないと考えられ、わずかに指を動かすだけで」であったとされる(IV5.1010a17)。これには「存在」と「一」の概念を否定すること、さらにはいかなる指定されうる存在様式の否定も含まれる。この流転説も非存在からの生成の不可能性に対する一種の対応であるとすれば、非存在からの生成が何らか語られまた秩序ある生成が何ら

か語られる限りにおいて、流転説に応答することとなる。アリストテレスの流転説批判は簡潔であり、何かが消滅するとするなら、それは存在しているものでなければならないとする。さらに何かが生成するなら、「これがそこから生成するところのもの〔質料〕や、それによってその生成過程が始まるころのもの〔始動因〕が存在すること、そしてそれは無限に遡及することのないこと必然である」(1010a20-22)。このことは力能と完成の枠による存在様式の分析からすれば、[B]「もし何かが生成するとなら、生成がそこからあるであろうところのそして消滅するものはそれへと変化すること必然であるところの或る実体が、力能においてあり、完成においては無いであろうこと明らかである」(*Gen.Cor.I*3.317b23-26)。

アリストテレスが生成の一つの記述として「生成は力能における実体から完成にある実体にいたる」(*GC.I*5.320a13)と語るとき、「変化の一種」である連続体存在者としての「運動」の視点から提示している。「運動」は「力能の完成、力能においてある限り」と定義されていた(*Phy.III*1291a9-11)。運動が存在することそしてそれは一性を持つものであることを示すことは、単にエレア派に対してだけではなく流転派に対しても明白な応答となる。彼は、運動と変化を複層的な視点から捉え相補的に展開することにより、存在(ある)と生成(なる)の総合を企てている。このようにロゴスアプローチつまり一性の定義により把握される運動とエルゴンアプローチつまり二時点間の差異の観察を介して変化として把握される運動が相補的に存在と生成の探求の視点を提供している。かくして「ある」と「一」を不動の世界でも流転の世界でもない中間的な世界、或いは双方を包摂する総合的な世界において語り得る方策が求められる。

先の[a]エレア派の主張は結果としてライバルである[b]ヘラクレイトス主義者とは正反対の主張とも思われようが、アリストテレスは双方とも「存在」と「一」の理解において同じ帰結をうみだすと言う。「もし一切の事物が、ちょうど「外套(*lōpion*)」と「上着(*himation*)」のように、説明言表(ロゴス)上一であるなら、そのとき彼ら[エレア派]はヘラクレイトスの教説を主張していることになる、なぜなら善であることと悪であることは同じこと

であるから」(185b19-22)。つまり存在するものは「善」「悪」や「人間」や「馬」であれただ一つだけであり、しかも存在と一が、説明言表上「外套」と「上着」の定義が同じであるように、同じものであるなら、「悪」と「善」も同じことを意味表示する。その結果「一つ」として語り判別しうるものはないという点で、エレア派は生成流転論者と同じ主張となる。皮肉なことに、双方とも存在と一をめぐる不明瞭さにおいて同じ穴の貉とされる。運動、変化を否定する者は結局一切は運動、変化だけであると主張するものと同様に、「存在」と「一」を語る適切な文脈を確保できない結果となる (cf.1010a 35-36)。

続いて、「万物混在説」と「相対論」を一緒にして考察する。[c] アナクサゴラスの万物混在説「あらゆるものは一緒に混在している」そしてプロタゴラスの相対説「各人にそう思われ、現れている通りにそのまま真実である」も一切は不定であるという見解として同じグループ [c] に属する。誰かに人は船ではないと思えるなら、船ではないという見解を挙げてアリストテレスは言う、「いやしくも矛盾が真であるなら、そうである。そしてアナクサゴラスの「あらゆるものは一緒に混在している」ということにもなる。その結果、真実にはいかなる一も内属しない。彼らは、かくして、不定なことを語っているとと思われる、そして自分たちとしては存在を語っていると思いながらも、非存在について語っている。なぜなら、[C] 力能においてありまた完成においてないものは不定なものだからである」(1007b25-29)。

彼らの混在説や相対説においてあらゆるものをめぐる形而上学的言明が存在についてなされていると思われようが、非存在についてのものであるとされる。その理由文として [C] が提示されている。[b] は確信的に存在と一に対する言及は不可能であるという主張であるのに対し、[c] は存在についての説であるという自覚のもとに遂行されているが、不定なものは完成において同一指定されないという意味において、非存在についての何ら有意義なものとはならない主張であるとされている。一方で一緒に混合、混在されている「あらゆるもの」は何か一つのものとして確定されうる力能をもっているであろうが、この「あらゆるもの」は力能において不定である。何になる

か何ら規定されていないからである。一緒に混在しているものどもは完成において一ではないために、何ら明確な規定を獲得していない。

続いて「原子論」を考察する。[d] 充実体であるアトム（原子）と空虚から世界は構成されているとする原子論者も実は [c] と同様の結果になるとされている。同じものが甘かったり、そうでなかったりするそのような観察を通じて難問に逢着した人々は「相反するものごとが同じものから生成するものを見て、矛盾した或いは相反したものごとが同時に同じものに属し得ると考えた」（*Met.*IV5.1009a23-25）。存在しないものは生成することができないという道理ある前提のもとで、デモクリトス等は「相反するものは双方とも生成する以前に同様に既に存在していたはずである」（1009a26）とした。彼は非存在である「空虚」と存在である「充実体」を挙げ、「両者とも任意のものに即して同様に内属している部分」（1009a28）であるとした。つまり存在と非存在は混在していると原子論者たちは主張したことになる。

アリストテレスは原子論をアナクサゴラスの先の見解と共に「或る意味で正しく、或る意味で誤っている」と評価を下す。「存在」は二義的に語られる、その結果、或るものは非存在から生成することが許容されるその仕方があり、他方生成することが許容されない仕方がある、そして同時に同じものが在りかつ在らぬが、同じものに即してではない。というのも [D] 同じものは同時に力能において反対のものどもであることが許容されるが、完成においては許容されないからである」（IV5.1009a32-36）。ここでは [D] において彼は矛盾律に抵触しない仕方と同じものが在りかつ在らぬ状況を力能と完成の概念の導入により位置づけている。存在は力能と完成に即して語られ、力能に即して非存在から生成すると語りうるとし、完成に即しては語り得ないとする。[C] における力能にあつて、完成においてないものは不定であり、その意味で非存在と語り得るその流儀に即している。

最後に、「イデア論」を考察する。[e] プラトンのイデア論に対してもこの存在様式の視点から成り立ちえないとする。彼はカリ阿斯等個々の人間とイデア人間は同じ人間であるなら、これら双方に述語づけられる「第三人間」が想定されねばならず、それは無限に遡及するという第三人間論の難問を提

示し、そしてアイデア論を矛盾律に基づきロゴスの力のみにより反駁する。アイデアを完成においてあるとし、また個々の事物が完成においてあるとする。二つの完成においてあるものが、一つの完成においてあるものを形成することはできない。[D]において見たように完成には反対のものどもが想定され得ないからである。彼はアイデアの離在と分有を批判して言う。

「完成において内在する諸実体に基づいて実体があることは不可能である。なぜなら、この仕方では完成において二であるものは完成においていかなるときも一であることは不可能だからである。しかし、[E] 力能において二であるなら、[完成において]一であることになるだろう、例えば少なくとも力能において二つの半分のものどもに基づく二倍の長さのように、というのも完成は分離するからである。従ってもし実体が一であるなら、内在する諸実体に基づくことはないであろう」(1039a3-8)。

このように彼は先行哲学者の難問解決の大きな道具としてこの力能と完成の組を用いている。完成と力能のペアは非存在からの生成に対応できるものとして、また矛盾律否定論者、一切偶然論者にさらにはアイデア論に対しても対応すると考えている。なぜなら、存在と一が統帥的な仕方では語られる「完成」の概念は対応する力能の概念を必要としており、この組み合わせにより事物の一なる存在を特定することができ、また生成変化を肯定したそれを説明すべく力能における一性とさらには反対対立を含むものとしての多性に対応できるからである。アリストテレスは[c] 批判の文脈で、それぞれの語句は一つのことを意味表示し、そしてそれが実体の存在と一性により保証されていると論じる。

「一般にこの[相対] 説[人間は同時に非人間である]を唱える者たちは実体そして本質を否定している。というのも、彼らにはあらゆるものが付帯してしまっていると、そしてまさに人間であることないし動物であることは存在しないと主張すること必然だからである。というのも、まさに人間であることが何かあるであろうなら、これは非一人間であることないし人間であらぬことではないであろう、これらはその否定文ではあるが。というのも、それが意味表示したところのものは一つであった、そしてそれは或るものの実

体であった。実体を意味表示することはそのもの自身であることとは何か別のことではない」(1007a20-27)。

これが先行者の諸説 [a] [b] [c] [d] [e] の克服から導出されることである。一切偶然論者そして矛盾律否定論者を克服することにより、一つである実体と本質の存在そして実体の存在様式として「そのもの自身であること」を打ち立てることになる。これは「統制的に一かつ在ること」である完成の存在様式の確立に他ならないと言える。そしてこれは [a] エレア派の争論的な議論からの解放をも含意する。存在と一は相互に含意する仕方人間や動物の事例において論じられているからである。

以上が先行哲学者が抱えるアポリアに対しアリストテレスの様相概念がいかなる解決案を提示しているかの考察である。そのことは必然的にアリストテレスがいかなる問題を解くべく新しい概念を必要としていたかをも説明している。以下、彼自身の証言に基づき、存在と非存在と生成の秩序ある総合的理解のために従来の「力能」と「エルゴン」の組による能動力能と受動力能の接触という運動のエルゴン分析が生成を存在論に組み込む理論として不十分であること、そしてロゴスの存在様式がエルゴンに内在することの確立がなぜ不可欠であったかを確認する。それを通じて彼の新概念導入の文脈を確認しそして歴史的経緯を追跡することができると思われる。

3.2 力能と実働の分節と実働と完成の共置 ― 様相概念導入の文脈 ― メガラ派における突然の否定即不可能性のアポリア

ここで、アリストテレスが自ら新概念を必要とする思考の現場であると考え、導入理由を説明していると思われる『形而上学』第九巻三章を分析する。そこでは最初に力能と実働の判別を否定するメガラ派の主張の不合理さを指摘し、実働が観察されるものは顕在化していない当該の力能の不可能でないことを確認できるとする。そして実働と完成の関係がいかなるものであるか、さらに完成との関係において非存在と不可能性の分離が論じられる。つまり力能と実働の癒着さらには非存在と不可能性の癒着を断つものとして完成の概念が必要とされていることを明らかにする。

ロゴス上またエルゴン上統帥する仕方においてある「完成」は二種類の力能と実働の組を判別する役割を担っていることをここまで確認した。従来この概念がなかったために、プラトンにおいては「運動に即した力能」としての始動因のもつ能動力能と対応する受動力能そして相互の接触によるエルゴンだけが問題とされてきた。アリストテレスも運動をエルゴン上この三局構造において理解するが、完成により始めて保証される待機力能なしにはメガラ派のアポリアつまり実働と力能は常に共時的であり、実働（例「見る」）の単純否定（見ない）は力能（できる）の否定（できない）を意味してしまう。

メガラ派は「何かが実働している時だけ、力能あること (*dunasthai*) が存在する、しかし、実働していないとき、力能あることは存在しない」(IX.1046b29)と主張する。例えば、大工が建築するさい、建築中その力能と働きは同時にあるが、一服しているときは建築力能も失われると主張した。また、見ている時は見ることを可能にする力能も現在するが、目を閉じるとその力能はもはや存在せず、再び目を開けると同時に力能が存在するようになると主張した。しかし見ることをやめるたびに視力を失うとすれば、「一日に幾度も盲者であることになろう」(1047a9f)。それ故にメガラ派は「ものの運動をも生成をも取り上げてしまう」(1047a14)と批判される。立っている者は常に立っており、座っている者は常に座っていることになろうからである。彼は「このこと [突然否定 (立たない) = 不可能 (立ち得ない)] を語ることが許容されないなら」とロギコースにメガラ派の主張を論駁し、「力能と実働は異なるものであること明らかである」とする(1047a16-18)。かくしてアリストテレスは二つの次元の判別が不可欠であると主張する。

アリストテレスはメガラ派の主張を大工術のようなロゴスを伴う技術から「無魂物も同様である」と拡張して、「知覚されているものなしには、冷や熱、甘みも総じて可感覚的なものは何も存在しないであろう」と万物に適用される見解であるとする(1047a4-6)。この見解の背後には、実働が観察、認知される限りにおいてひとはその力能の存在を確認するという観察、認知こそ確かさの源とする一種の経験主義への信任がある。メガラ派の主張は存在を魂

の知覚経験に還元するプロタゴラス主義の一ヴァージョンである。かくして人間が万物の尺度であるという「プロタゴラスの説を語ることが彼らには帰結する」(1047a6)。一切の存在と認知の共時性の主張は人間尺度説を語ることである。

「実働」という概念は「完成」とともにアリストテレス以前には見られないため、メガラ派の主張は彼が自らの術語により種々の働きを一般的に表現したことが想定されるが、「実働する（働きにおいてあること）」は今・この具体的状況において用いられる動詞であることをこの説の紹介から確実に読み取りうることである。ただし、或る特定の時空において働いていることにのみかつその時に限り力能もあると双方の癒着を主張するメガラ派には賛同することはない。彼はこの章の後半でこの実働と力能の同化、さらには非存在と不可能性の同化に対する克服としてこれら二つの概念が導入されているないし少くとも必要とされていることを明らかにしている。

彼は能動者の統帥的な存在様式をつまり実働することもしないことも裁量のうちにある待機力能を確立する必要があった。ここでは完成の導入により動かされるものに内属する未完の力能と統合体に内属する待機力能が概念上判別される。完成即ち統帥的に一そして在ることはロゴス上力能の何であるかを定めるが、完成にあるものが実働する故にロゴス上実働は力能に先行する。彼は双方を説明して言う、「実働はロゴス上力能よりもより先である。というのも、実働することが許容されていることによって第一の力能あるものは力能あるからである。例えば「私は「建築すること (*oikodomein*) のできること」を「建築しうる (*oikodomikon*)」と言う」が、ロゴス上実働のほうが力能より先行している」(1049b12-15)。ここで「実働することが許容されている」「第一の力能あるもの」とはいつでも実働できる状態にある「待機力能」にある者のことである。そして完成においてある者の実働はロゴス上待機力能「より先」であり、待機力能は完成においてある実働に対する言及なしに理解されない。見習い大工の未完の力能が名前「建築しうる」を得るのは、建築実践に基づきそう名づけられる。その修業期間を経て自らの力能が十全に発揮され一人前の大工として完成にある者はいつでも建築することの

できる能動的な待機力能においてある。そして待機力能は統合体である大工に帰属する。そして次節で確認するように、それぞれの実働と待機力能の対応については「定義形成句」を提示することによってではなく今・この実働の現場で「類比項を共に見る」帰納的な仕方の確認されると言われている。

ここでは、その建築実践は棟梁のロゴスつまり始動因と目的因双方の存在様式である完成といかなる関係におかれるのか一般的に確認する。「実働は完成と共に置かれる」。アリストテレスは『形而上学』第九卷第三章においてロゴスにメガラ派の実働と力能の癒着を断ったうえで、エレア派やメガラ派のように非存在がただちに不可能と同化されないことを、力能が実働の確認を介して不可能性から判別されることにより明らかにする。

力能あるものとは、その力能を持つことが語られるところのものの実働がそれに内属するなら、何も不可能なものがないところのものである。私が言うのは、例えば、座ることができました座ることが許容されているなら、もし座ることがこのものに内属するなら、何も不可能なものはないということである（1047a24-28）。

アリストテレスはここで何かが実働においてあるか否かは経験的なことであることを認めたとうえで、何かに実働が内属する限り、不可能性の様相は当然のこととして排除されていると主張する。メガラ派は突然様相の否定を不可能としたが、その見解はロゴス上突然様相の否定は不可能様相ではないこと、さらにはエルゴン上実働の事例を示すことによって否定される。非存在はいわば実働の準備期間でもありうる。

そしてこの一般的な規定が実働概念の或る時点においては非存在であり、非動であるにしても、別の時点で実働されるものへの拡張的な適用を基礎づける。彼は存在、非存在さらに生成を念頭に置き三様相の包括的な関係に言及する。力能と不可能の関係は未完のものであれ待機のものであれ論理的次元において「反対対立（実働 F と非実働 $\text{not } F$ ）への可能性」として一様に扱われるが、実働は完成と共に置かれるものであり、完成を規準にし未完の力能の働きである運動が新しく位置づけられる。アリストテレスは座るという実働が見出されるなら、それは不可能ではないということが帰結するとし

て言う。

そして動かされることないし動かすこと、静止することないし静止させること、在ることや生成することないし在らぬことや生成しないことも同様である〔即ち実働において確認される〕。しかし、名前「実働」は「完成」に対して共置されているものであり (*hē pros tēn entelecheian suntithemenē*)、とりわけ運動から他のものども〔「在ることや生成すること」〕のうえにも適用されるに至っている。というのも実働はとりわけ運動であるように思われているからである。それ故に、彼らは動かされることを〔エレア派のように〕非存在のものどもに配置しないが、他の或る諸述定、例えば「在らぬものどもは思考されかつ欲求されるものであるが、しかし動かされるものではない」を非存在に割り当てる。しかしこのことは、それらは実働においてはなものでありながら、〔思考され、欲求されるという〕実働にあることになるであろう。というのも、在らぬものどものうち或るものは力能においてあるが、しかし〔実働において〕在らぬものだからである。というのも、それは完成においてないからである (1047a28-b2)。

「実働」即ち「働きにおいてあること」は存在者の一性を開示する「完成」と共に置かれている。実働においてあるとするなら、「それは完成において」ある。運動は能動者と受動者の接触により生起するが、それは受動者に帰属する。そのさい、動かすものと動かされるもの「双方にとっての完成が存在しなければならぬ」(*Phy.III3.202a15*)。始動因と受動力能者二つの存在者のあいだに一つの完成が存在しなければならぬ。このことは二つの存在者によりシェアされる「完成」は何か一つの時空を占める存在者ではなく、一つの存在様式であることを示している。生成のゴールにおいて実現される目的因と生成の始点を形成する始動因が同じロゴスをシェアするものである限り、それは必然的なことである。すなわち運動の最初と最後にそして端的実働の一切において実働は完成との関係に置かれている。彼はこの共置により行為や生成さらに存在であれ完成への考慮なしには実働も考慮されないと主張する。換言すれば、ロゴスの存在なしにいかなる実働も存在しないと彼は

主張している。完成は形相の存在様式それも他の仕方でありえぬ存在様式だからである。

彼は名前「実働」が運動から他の存在や生成に拡張されたという歴史的経緯を確認する。「運動はとりわけ実働であると思われている」(1047a32)という見解がメガラ派のものか定かではないが、運動に即して実働が考察されてきた伝統を確認することができる。プラトンにおいては運動と実働は基本的に分節されていなかった(註7参照)。誰であれ彼らはエレア派とは異なり「動かされるものは非存在ではない」とし非存在に配置することはないが、むしろ述定「在らぬものどもは思考されまた欲求されるものであるが、運動されるものでない」を非存在に割り当てている。心的行為の対象「思考されるもの」と「欲求されるもの」を非存在に割り当てる者がいた。大統領で在らぬ者における欲求内容「大統領」は非存在であるとされる世界と心のあいだの断絶を主張する者たちである。他方、欲求内容「大統領」は非存在であり動かされず静止しているとされる。運動は非存在ではないとされる。プラトンは「在ると思われているもの即ち生成は、運動がこれを供給するが、在らぬこと消滅することは静止がこれを供給する」という誰かの説を、熱や火のように運動と摩擦によりものごとが生み出されることから道理あるものであるとして紹介している(*Theae*.153a)。消滅や非存在は静止に伴うと考えた者がいたことをここで確認できる。

彼らは魂の実働である思考や欲求を非存在者に述べ立てており、アリストテレスは彼らの矛盾を指摘する。非存在者は或る一定の時間の幅のなかに置かれる。そのうえで、彼は先にアナクサゴラス説において見たように、完成との関連に置かれることのない力能はどれほどそれ自身多様なものであっても不定であり、実働においては在らぬものであるという理解を提示する(cf. IV4.1007b29f)。子供は大統領にも教師にも大工にもなる力能を備えていようが、それ自身としては不定であり、大統領でも大工でも「あらぬ」。このように一般的な仕方でロギコースに完成の概念の導入により力能は或る種の非存在から完成において獲得される待機力能に至るまでの通時的な視点に置き直され、時間の幅を持つものとして実働との癒着から解放される。

彼は非存在ではあるが力能あるものの余地を確保する。例えば、アメリカ生まれの少年少女はその大統領になる力能がある (cf. *De An.* II.5.417a27)。しかし、その時点で実働において大統領ではない本人が「大統領であること」という完成に方向づけられない限り、生成の過程つまり実働においてはまだまだ、不定である。彼ら的大統領になりたいという自らの思いは「動かされるものではない」と言えばそうではなく、目的論的な仕方でのゴールにより動かされると語ることができる。そしてその過程としての実働はその都度今・ここで確認されるものである。

「実働」は力能の発現であるが、存在と非存在は完成との関連のなかに置かれ、個々の今・この認知的次元とは別に関わるものであることがロギコースに論証される。この点で Makin の「エネルゲイアは元来広い領域の諸状況を力や力能の広い領域のいかなるものの行使をもカヴァーする。しかし、それ以前には存在すべく行使されていなかった力を行使しているものとして、何ものかの現実存在していること (something's existing actually) をカヴァーしてはいない」という指摘は誤解である⁹。エレア派が「存在」を祭り上げるために、動きを示す一般動詞例えば「歩く」を用い「ある」を避けるが、アリストテレスは「*彼は健康である者である (hugiainon estin)*」或るいは「*彼は健康にしている (hugiainei)*」のあいだに、また「*彼は歩いている者である*」或るいは「*彼は歩いている*」に何の相違もない」と言う (1017a28-31)。「あらゆるものにとって在ることの根拠は実体であるが、動物にとって生きることは在ることである。魂はその根拠でありまた原理である」と言われるように、エルゴン次元において、今・ここで生きる等の働きを介して存在は確認される (415b12-15)。彼の発見的探求論によれば、「*がある*」存在は魂の直接的な認知機能を介して発見されるものである。それ故に何かが実働であるなら、それは完成に向かうものであるか完成においてあるもののそれであり、実働は完成があることの少なくとも、十分条件を提示している。また完成がなければ、実働もない。これを「完成と実働の共置」と呼ぶ。今・ここで働きにおいてあることには完成においてあるロゴスが内在している。換言すれば、カオティックな運動が見出されるとすれば、秩序あるその逸

脱として処理されるであろう。

存在、非存在そして生成をめぐり、完成がいかなる仕方で力能に対しまたその未完の実働としての運動に対し統帥的であるかは理解されたこととしよう。さらには待機力能にあるものの実働との関係としても、完成なしには待機力能が成立しないことを確認し、完成にあるものの実働がいかなるものであるか理解されたこととしよう。

これらを踏まえて、アリストテレスは「名前「実働」は「完成」に対して共置されているものであり、とりわけ運動から他のものども[「在ることや生成すること」]のうえにも適用されるに至っている」と語るとき、彼は二つの概念の導入の文脈を指摘している。以下運動との関係で、アリストテレスが「エルゴン」の二義を放置せずに関係づけるべく二つの概念を導入したことを第九卷八章により確認したい。

「エルゴン」の両義性を媒介する「実働」と「完成」

アリストテレスは『エウデモス倫理学』において「「エルゴン（働き）」は二通りに（*dichōs*）語られる」とし、魂の働きには [Er1] 力能の使用それ自身が究極的なものと [Er2] 魂の力能の使用の結果としてそれから離れた成果・産物という意味での働きがあるとされる。「[Er2] 或るものどもには使用を離れた何か他の働き（*to ergon para tēn chrēsin*）がある、例えば建築力能の〔使用を離れた〕家のように、しかしそれ〔家〕は建築実働ではない、そして治療力能の〔使用を離れた〕健康のように、しかしそれ〔健康〕は健康化でも治療行為でもない。他方、[Er1] 或るものどもには使用が働き（*hē chrēsis ergon*）である、例えば視覚の視のようにまた数学的知識の観想のように」（EE.III.1219a13-17）。

この語の実働とその産物の両義性、所謂 act/result ambiguity は存在様式研究の明瞭化に何らかの示唆を与える。「働き」の基本用法として主体として魂が想定され、その力能の「使用」と解しており、魂はその基体である「使用者」である。「魂の働き（*ergon*）を生かしめること（*to zēn poiein*）」であるとせよ、使用と覚醒がそれに属する。というのも、睡眠は或る不活動であ

りまた休息 (*argia tis kai hēsuchia*) だからである」(1219a24f)。その第二義は [Er2] 「使用を離れた何か他のエルゴン (働き)」と述べられている。その事例は建築や医術の使用を離れた「家や健康」である (1219a14)。

『エウデモス倫理学』のエルゴンの両義性は能動者の働きとして語られ、働きかけられる受動者が考慮されることはない。これは魂の徳を考察する倫理学という研究領域の制約によるものであろう。ただし、アリストテレスは能動と受動を一つの実働が関わるものという理解を展開し、複雑化をせず必要以上に存在者を増やさなかったため、受動者の側からも対応を記述することができる。一般的に日常語「エルゴン」には能動と受動の関わりが不明瞭なままに残されていると思われる。恐らくこれは「働き」の日常的な用法であったであろう。日本語においても「働き」は能動者に帰属するものとして、それも始点の側からではなく、終局の側から語られる。それはエルゴンがそれ自身単独で何らかの規定性を持つことが求められているからであろう。それ故に終局的ないし成功した視点から記述されている。

日本語でも「彼の行為 (作品, 働き・仕事) (*ergon*) は美しい (評価できる)」のようにそれ自身明確な特徴を担ったものとして用いられる。「彼の行為 (作品, 働き・仕事) は未完である」はせいぜい「彼は未完の行為 (作品, 働き・仕事) に従事している」と別の動詞により補われることを必要としており、その動詞により途上性が表現されよう。作品制作においては時制テストを懸けると「従事している」と同時に「従事してしまっている」とは言えない。その補いの必要がその概念それ自身の規定性を含意している。働きの能動性と終局性は双方の日常語に共通していると言えよう。働きが運動と関わる限りにおいて、存在論は能動と受動の相互作用に対する考慮を必要とし、その関係こそ解明しなければならない。

ここで、ロゴスは [Er2] 産物・エルゴンなのかが問われよう。もしロゴスがエルゴンであるなら、彼の双方による相補的な展開は混乱したものになるであろう。これまでに確認したことは、彼はロゴスはエルゴンに内在するが、それは合成体を介したエルゴンを展開することにより直接的な同定は回避されているはずである。「彼のアイディア (理論・ひらめき) はこれを契機に生

み出された」と言う日常的な発話において、何か普遍的なロゴスが産出されているように思われる。アリストテレスのシステムにおいてはロゴスは自ら動かずして素材を動かすものであった。そのアイディアはロゴス上分離されるが、エルゴン上当人の脳のシナプス連合と分離されない。「健康」は確かに医者医療行為を離れているという意味で産物であるが、身体における熱と冷の均衡という合成体であると理解する。そのロゴスはロゴス上身体から分離される。ロゴスは質料に受け取られるものではあっても産出されるものとは考えられていない。アリストテレスの存在論の一つの結論は生成消滅過程を経るものは統合体、合成体のみであるというものである。ロゴスはロゴス上分離されそれ自身を摘出することができる。他方ロゴスはエルゴン上分離されないことにより、分離されない統合体が生成消滅を蒙る。

$E=mc^2$ のような「知識」もアインシュタインの脳の今・このシナプス連合を離れて、共有の財産という意味では彼の知性の産物であると言えよう。これを観想する物理学者は第一義のエルゴン [Er1] においてある。素人が言葉だけで理解せず $E=mc^2$ を語るとしてもこれは同名異義であり、「知識」と言えないであろう。ロゴスは実働しているときと実働していないときは同名異義であることになろう。日常語では魂が主体として物理学者が産出したロゴスを改めて学ぶことも使用することもあるということに何ら問題はない。しかし、力能と実働の種類を分節するアリストテレスには日常語「エルゴン」は能動者の終局的使用とさらにその能動者が生み出すその使用とは別の産物であるとされることに同じ語の持つ両義性を関連付けることを放棄していないし不明瞭なままに放置されているように思われたのであろう。「終局的」とはその先にさらなる終局の存在しないもののことだからである。かくして双方とも、終局的な実働であるとともに終局的でない実働である運動が帰属する受動者を必要としている。

アリストテレスは『形而上学』第九卷八章においてやはり「エルゴン」が語られる同じ二つの文脈を提示するが、双方ともゴールであることを指摘することにより、新しい二つの概念との関連を明らかにしている。先に魂の能動主体の実働とその結果としての産物が指摘されているのを考察した。ここ

では一方のエルゴンを実働に帰属させ、他方のエルゴンを受動者の変化のゴールにおけるその運動とは別の産物として受動を考慮にいて語られている。これまで見てきたように、「運動は未完なもの[力能]の実働であったのであり、他方端的な実働は他のものであり、完成されたもの[待機力能]の実働 (*hē tū tetelesmenū*) である」と二種類の力能と実働が完成を媒介に判別されていた (*De An.*III7.431a1-7)。歴史的にはこの判別を可能にしたものは、日常語「エルゴン」が自ら精密化を要求しているそのような文脈であったと思われる。

彼は受動的視点から産物としてのエルゴンを説明することにより、この判別を明らかにしている。能動実働は受動者に内属することにより、合成体の産物が形成される。彼はそこに実働と力能を二種類に分節する必要を見出したことが推測される。彼はこの日常語の二重性を用いて、新たに導入された概念「実働」と「完成」を関連付けて言う、

働き (*ergon*) はゴール (*telos*) である。しかし、実働は働きである、それ故に名前「実働」は働きに即して語られそして完成に緊密に結びついている。しかし、[Er1] 或るものどもについては[魂による]使用が終局的なものであるので、例えば視覚の視のように、視覚のエルゴン(働き)からそれとは離れて他のいかなるものも生起しないように、他方、[Er2] 或るものどもからは何ものかが生じるので、例えば、建築力能から建築実働を離れて家が生じるように、いずれにせよ、かしこでは[使用は]ゴールであり、後者では[建築実働は]力能より一層ゴールである。というのも、建築実働は建築されるものの内にあり、そしてそれ[建築されるもの]は家と同時に成りかつあるからである。かくして使用を離れて何か異なる生じるものがあるものどもについては、これらの実働は作られるものの内にある、例えば建築実働は建築されるものの内にそして機織は機織られるものの内にあるように、別のものどもについても同様であり、運動は動かされるものの内にある (*Met.*IX8.1050a21-34)。彼はここでエルゴンを同様に二種類に分節している。

[Er1] 或るものどもの使用は究極的なものであるので、例えば、視覚

の視（見ること）そしてそれ（視）を離れて視覚から何か他のエルゴンは何も生じない。

[Er2] 或るものどもからは何かが生じるので、例えば、建築力能から家が建築実働を離れて生じる（1050a23-27）。

アリストテレスは日常語である「エルゴン（働き）」を利用し「実働」と「完成」の概念を導入し関連付けをしている。彼は「実働」を基本的に力能の[Er1]究極的「使用」としてのエルゴンと捉え、それは例えば時制テストを施すなら「見る」（現在形）は「見てしまっていること」（現在完了形）を含意し、テロスをその都度実現している（IX6.1048b23）。「視」のような感覚や「知識を観想すること」（教授活動も含む）は「端的な実働」とも「完成されたもの[待機力能]の実働」とも言われるが、これらは受動者に帰せられる「運動」ではない。実働が運動であるか端的実働であるかは[L]現在形と現在完了形が同時に適用されるかをめぐる時制テストの適用により判別される。これは「いかに語るべきか」の[L]ロギコシな手法であり、今・この観察を必要としない。「学習」は運動であり、「学習する（教授される）」と同時に「学習して（教授されて）しまっている」とは言えない（*Met.*IX6.1048b23-35）。彼がこのエルゴンについてその帰属する実体との関連を語るとき、今・この[E]「実働としての実体」を語っており、魂としての形相は身体を介して見また理論活動している（cf.IX8.1050a35-b3）。それは一般的な[L]「ロギスに即した実体」と判別される。

『自然学』や『形而上学』においては家は建築家が実働の結果家を生み出すとは語られずに、石や木等建築されうる力能にあるものが動かされて家になると考えられた。というのも、建築家の実働は建築されるものの「内に(en)」にあると捉えられているからである。能動者の働きが受動者の内に吸収されるとすれば、受動者の側から同じ事態が記述されることになる。彼は言う、「あらゆるものは能動的かつ実働においてあるものによって受動した動かされる。それ故に、或る仕方では似たものにより受動するが、他の仕方では、似ていないものにより受動する。というのかたや似ていないものが受動し、他方受動した後は似たものだからである」（*De An.*II5.417a17-20）。[Er2]産

物としてのエルゴンはこのように未完の力能の運動を介した完成として位置づけなおされる。このように『形而上学』における当該箇所では産物よりもむしろ、それに至る受動者に帰属するエルゴンとしての「運動」に注意が払われている。能動者の実働は受動者に吸収され「運動は動かされるものの内にある」とされる。

他方、「使用を離れたエルゴン」とは例えば建築された家であるが、この箇所におけるアリストテレスの主張は別の産物があるものはすべて受動者に帰属する運動の終局において実現されるものである。それと同時にその受動者を加工する建築実働のような能動はやはりテロスとして特徴付けられている、或いは少なくとも「力能よりも一層」そうである。建築実働がテロスであるのは棟梁は自らの力能を使用しており、建築は常に自らの十全な建築力能の発現だからである。この事態にアリストテレスは種々手当てをしている。

エルゴン上、棟梁は常に完成においてあり、建築という実働を遂行している。実働が常に終局であるとは、例えば大工の見習いは技能において性質変化を蒙り成長してゆくが、完成においてある棟梁や熟練工は自ら何かを新たに学習するということは想定されていない。「実働はゴールである、そしてそのために力能は獲得される。というのも動物は視覚を持つために見るのではなく、見るために視覚を持つ。同様に建築するために建築力能を持つ」(IX8.1050a9-12)。実働が常にゴールであることは理解に困難なところがあるが、彼は未完の働きを運動に帰属させることにより解決を図っている。彼はこのように実働を能動的なものとして記述し、その能動が受動者に内属することを媒介にして、「運動」が受動者の働きとしてテロス以前のものとして判別されている。ここでの途上の実働は運動であり受動者に帰属するものとして扱われ、その働きとは別の異なる産物が作られる。

彼はまた『自然学』において言う「運動は或る実働であると思われている、しかし不完全なものであるが。というのも、実働がそれについてあるところの力能が不完全だからである」(Phy.III2.201b31-33)。運動がそこにおいてある受動者は未完の力能においてある。それが能動的な待機力能においてあるものとの差である。

なお、ひとは完成にある能動者と未完の受動者が関わることからにおいては、例えば「知識を教える」は「知識を教えてしまっている」と同時に語れるかアポリアとするであろう。アリストテレスは「運動が被動者のうちにあることがアポリアとなることは明らかだ」(*Phy.*III3.202a13)としているが、彼は運動を受動者にのみ帰属させ問題を解決している。知識の授与者は知識を観想するという能動において「性質変化ではなく自己自身へのそして完成への進展かそれとも性質変化の他の類である」と位置づけられる(*De An.*II5.417b6)。少なくとも教師は教授の現場で自ら無知から知への何かを新たに学習しているわけではない。彼は無知な学習者の学習過程のどの段階においても、知識の授受の視点においては端的な実働にある。彼は言う、「教授している者たちは、自ら示すことによって学生たちが実働している時、ゴールを実現してしまっていると考えている。そして自然も同様である」(*IX*8.1050a18)。自然の秩序正しさを前提にすると、自然が質料をして或る望ましい方向に動かし始めたとき、もう既にゴールは実現されてしまっている、或いは少なくともゴールと関連づけられたとすることができる。

ロゴスの存在様式としての完成が教師と生徒のあいだでさらには複製機構における始動因と受精卵のあいだで共有されている。さもなければ、生徒は教師となることも赤子が成人になることはできない。彼は運動が被動者に帰属することを説明して言う、「というのも、運動は動かさうのものによる被動者のうちに属する完成だからである。また動かさうのものの実働は〔動かされるもののそれと〕別のものではないからである。というのも、双方の完成が存在しなければならぬからである(*dei men gar einai entelecheian amphoin*)」(202a14-16)。形相が質料を介して実働することは受動者に帰属する運動とは判別される。その実働は常に完成においてある。だからこそそれは「完成に緊密に結びついている」。完成が力能の発現の二つの実働の種類を分節するという意味において、一方を語るとき、常に他方が念頭に置かれている。「未完な」実働である「運動」は完成との関連でロゴス上規定されている。運動とは異なる「他の」実働とは、例えば知識を持つ教師の教授活動のような、完成においてあるものの働きである。

「エルゴン」の二義性（実働とその離れた産物）を媒介にして二存在様式の関係が新たに築かれる。或いはこの語の両義性を新しい二つの概念の導入により秩序づけ体系化している。動かすものと動かされるものは生物の複製機構のように完成を共有することによってエルゴンは連綿として受け継がれる。これが新しい概念により説明することのできることであり、新しい概念が導入された文脈である。存在と非存在と生成が体系的に秩序づけられねばならなかった。こうして二種類の力能と実働が完成により判別され、ロゴスとエルゴンは相補的な関係に置かれる。

第三章 ロゴス言語とエルゴン言語による相補的な展開の実例

序

これらの様相概念の基本的な理解のもとに、アリストテレスにおける実体の探求において常に念頭においてある魂や叡知（ヌース）という目に見えない生命原理の実在性を捉える工夫として、ロゴスとエルゴンの相補的展開がいかん遂行されているかを追跡したい。彼の質料形相論と様相存在論を駆使し主張したその解明に取り組んでいるその思考の展開を追跡する。理性が不可視なものを道理あるものとして認めることができるとするなら、いかなる理論構成のもとにあるべきかを示す説得力ある議論の展開をそこに見出すことができる。その予備作業として或いは平行的な作業として形相と形姿の組、目的とゴールの組、運動と変化の組の分析を順次行い彼の力動的な存在論を明らかにしたい。

さらに、その視点から現代、自然主義的な立場を展開している進化生物学の理論に対し、それが相補性において不十分な理論であることを指摘したい。進化生物学は目的因を否定し、エルゴン次元のみにて理論を展開しているように見えるが、目的因を密輸入していること、そしてその統計的、確率論的ロゴスは生物事象の特有性を説明していないことを示す。それによりロゴスアプローチの不可欠性を明らかにしたい。最初に彼の存在論の見取り図を描

き、彼の実在論的立場がいかなるものであるかを確認する。

3.1 類義語の使用に見られる [L] ログスと [E] エルゴンの様相アプローチ 「これ」という指示行為 [E] による媒介される「形姿 (*morphē*)」と「形相 (*eidos*)」

ログス（形相）と質料が分離されない働きにおいてある自然的存在者はこう規定される。

自然学は動かされうる種類のものについて、そしてたいていの場合[質料と] 離存的ではないものとしてのみある [L] ログスに即した実体についての [L] 理論学である。だが本質そしてログス [本質の説明言表] が [E] いかにあるか (*pōs esti*) を [E] 気づかずにいてはならない、これなしに探求することは何もしないことである。定義されるものどもそして「何であるか」のものどものうち、或るものどもはシモン [*to simon* 窪み鼻] のようなものであり、そして或るものどもは窪み (*koilon*) のようなものである。だがかたやシモンは質料と合成されているものであり（というのも「シモン」は「窪み鼻」だから）、他方、[数学的性質] 窪み性 (*koilotēs*) は可感覚的な質料なしにあるという点で双方は異なる。もしすべての自然物、例えば鼻、目、顔、肉、骨、全体に動物……が [可感的物事] シモンと同様に語られるなら（というのも、これらの [L] 説明言表は [E] 運動なしには何ものにもなく、常に質料を持つから）、自然物においては [E] [L] いかは何であるかを探求しそして定義しなければならぬか明らかである (*Met.* V1.1025b26-26a5)。

自然物は数学の対象と異なり質料とそのログスが不可分なものとして実働しており、その実働の観察を通じて定義の形成に向かうことが確認されている。彼は本質がいかにあるかの探求において、エルゴン上の質料と形相の不可分性を示す造語 [E] 「シモン」の導入により動物等自然合成体を表示する。彼は「鼻」と「窪み性 (*koilotēs*)」から「私は二つに基づきこれにおけるこれと語られもの [LinE] をシモン性 (*hē simotēs*) と呼ぶ」と新しい語彙を導入し、双方の関係が付帯的なものではなく「鼻の自体的な様態」とする

(1030b16-20)。私はこのエルゴンにロゴスが内在している「シモン性」のような状況を [LinE] と表記する。

一方、「窪み」はそれ自身としては鼻との関連をもたないが、「シモン性」であれば「鼻における窪み性」を表現することができる。つまり質料と形相が混合されることにより合成体が一なるものであることを一つの名前を作ることにより表現できる利点がある。「肉は窪み性の部分ではない(というのもこれ [肉] は窪み性がそのうえに生じるところの質料であるから)、しかしシモン性の部分である。また銅は合成体像の部分であるが、形相として語られる像の部分ではない」(1035a4f)。

従ってシモンの鼻 (*hē simē ris*) は「窪み鼻なる鼻」ということになり、これについてはその説明言表が定義となる本質は存在しない。「シモン」の形容詞用法「シモンの (*simē*)」の使用は無限遡及を生みだすために、[L]「いかに語るべきか」という視点から禁止される (1030b28-35)。合成体の定義において形容詞用法を禁じ、[LinE]「シモン性(鼻における窪み性)」により形相部分を表現すべきであり、可感的な事物の定義はこのようなものでなければならない。自然物の探求は質料あるものの運動、今・このエルゴンの観察を通じて遂行されるが、定義においては形相と質料がロゴス上分離されるため、「シモン性」の如き形相表現が求められている。エルゴンが何らかの仕方 で定義としての説明言表に組み込まねばならない。

私は、後に主題として取り上げるが、「魂」が「身体なしになくまた或る身体でもない」と特徴づけられるとき、シモン性の一例として「魂」を理解する (*De An.* II.2.414a19)。「魂」の定義にエルゴンとしての「生命」が力能においてそれを持つ物体とともに組み込まれる。物体が力能において生命を持つに至ることにより、生命原理としての魂との内的な関係に置かれる。「もし [エルゴン上生きている] 内魂物が双方 [形相と質料] に基づいているなら、身体は魂の完成ではなく、これ [魂] が或る身体の完成である」と語られるが、そう不可逆性を語りうるのは魂のあるところそこに生命を観察することができるからである (414a17-18)。この不可逆性の故に、「魂」が形容詞化され「魂的な身体」即ち「身体の完成的な身体」は語られえない。実際彼は魂

と身体は輪廻転生論者のように「任意のものが任意のものを受け取る (*dechesthai*) という仕方で現れるのではない」と主張する (414a23-24)。その双方の関係における現象は秩序正しいものであると彼は言う、「それはロゴスに即して次の仕方で生成する。それぞれのものの完成は力能に内属しておりかつ固有の質料においてあるものに自然本性上実現されている」 (414a25-27)。身体と魂、素材と形相の固有な即ち自体的な関係解明のためにこそ彼の関連術語が駆使される。「それぞれのものの完成」とはエルゴン次元において個々のものが「そこに向かう (*epi ho*)」ところのそこである適切なゴールの存在様式を表現している。具体的存在者が主題であるため、個々のものの形相がそこにおいて獲得される適切な力能においてある質料が提示されることによって、その存在様式を「完成」と確定している。

「形姿」と「形相」の相違は、「形姿はゴールであり」生成・エルゴン次元の最後に獲得されるが、形相は「ロゴスに即した実体」であることにより、ロゴス次元においてその生成を引き起こすものが形相であり、ロゴスは生成されるものの最後に形姿という仕方で発現、実働される (*Met.* IV 4.1023a34)。アリストテレスは「自然」として自然物に内在する「質料」と「形相」を挙げてこれを説明している。彼は「自然」として「自らのうちに運動と変化の始原を持つものどものそれぞれのものに [P1] 第一の基体となる質料」と「[P2] 形姿そしてロゴスに即した形相 (*hē morphē kai to eidos kata ton logon*)」を挙げるが、双方の内在性を「自然によるもの (*phusei*)」の生成における力能と完成の関係において説明する。彼は [P1] 第一の基体となる質料を提示し、その特徴を説明して言う。

[P1]力能における肉または骨は、ロゴスに即した形相を獲得するまでは (*prin an labē to eidos to kata ton logon*)、われらはそれ [ロゴス上の形相] によって肉や骨は何であるかを定義し語るのであるが、何らかの仕方で自らの自然を持つことはなく、また自然によるものでもない。従って、自然は、[P2]別の仕方では自らのうちに運動の始原を持つものどもの形姿そして、ロゴスに即してという仕方以外では分離されないものである形相であろう (*ū chōriston on all' ē kata ton logon*)。これら

([P1] [P2])に基づくものは「自然」ではなく、「自然によるもの(*phusei*)」である。そしてこれ〔自然によるもの〕は質料よりも一層自然である。というのも、事物は完成にあるとき、力能にあるときよりも一層それぞれであると語られるからである……生成として語られる自然は自然に至る道である。……生育するものは何に至るのか。そこからではなく、それへと生育する。従って形姿が自然である (*Phys.*III.1.193a28-31, b12-18)。

エルゴン上統合体は「自然によるもの」であり、力能より「それぞれである」としての一性を担うのは、ロゴスに即した形相がその「完成にある」からである。生きうるものよりも生成のゴールにおいて形姿が実現されているところの完成にあって生きているものがそれぞれの生物である。

他方、ロゴスに即しては、力能における肉や骨などの合成体はその形相ないし目的に言及するロゴスの形成を介して、「何であるか」が知られる。例えば、「骨や肉は、魂の実働のために、力能において生命を持つ自然物体である」と定義されよう。彼は言う、「実働を離れて何か別のエルゴンが存在しないものどもについては、実働はそのものどもに内属している。例えば、視は見ている者に……そして生命は魂のうちにある」(*IX*8.1050a34-b3)。視や知識の観想そして幸福さらに一般的に生命は魂に帰属する働きである。質料は形相への言及により何であるか知られるが、形相は「ロゴスに即してという以外では〔質料から〕分離されない」ものである。「ロゴスに即した形相」が内在することによって、形相は実働している。つまり統合体における生命活動を遂行させている。エルゴン上魂と統合体は分離されないであろう。もしエルゴン上分離するなら死んでしまうであろう。

彼は『形而上学』第八巻の「可感覚的実体は何でありまたいかにあるか」(*VIII*2.1043a26)を問う文脈において、しばしば今・この実働において確認される「形姿」を主に「実動」との組において用い帰納的な探求に従事している。「何であるか」は観察される現場で指示詞例えば「この仕方です」などを伴い、様々な形姿例えば向き、位置、配列、硬軟、乾湿への感覚的な把握の言及により同定される (*VIII*2)。例えば、「風とは何か？」の問いに対する応

答は「海の静穏」であるが、かたや質料としての基体は海であり、「実働そして形姿は静穏である」(1043a24)。ここで「形相」が語られないのは、風は海が今・ここにおいて持ちうる嵐等多くの形姿のなかで一つのものだからであり、実働する形姿への指示により同定されるからである。

『天体論』第一巻九章において、可感覚的な対象である宇宙は一なる有限なるものであることを論証している。そのなかで、形姿の二義性が言及される(cf.193b19)。自然や技術において生じ、合成されるものにおいては、「形姿が自らに即してそれ自身であることと質料と混合されている形姿 (*hē morphē kai memigmenē meta tēs hulēs*) は異なっている。例えば球の形相 (*eidos*) と金そして銅の球は異なっている、そしてまた円の形姿 (*morphē*) と銅の円そして木製の円とは異なっている。というのも、球や円であることは何であつたか〔本質〕を語る際に、われらは金や銅は実体に属さないものとして、説明言表における金や銅を語らないからである」(277b30-278a4)。幾何学的対象のような叡知対象 (*noēton*) である円や球はそれ自身魂の叡知 (*nūs*) がヒットすることにより把握され、ヒットせず無知ではあっても偽の可能性はないものである(1051b30)。ヒットに基づき円の形姿を心に描くことはできるが、素材はその本質の解明に必要ではなく、この事例を介し二義が判別される(1036a3)。

そのさい形姿を自らに即して析出できる第一義は形相と同じロゴスを指示する。彼が「たとえあらゆる球が銅のそれしか観察されなかった (*hehōrōnto*) にしても」、銅であることは球の実体を形成しないと言うとき、幾何学的対象のようにロゴスが観察のエルゴンに影響されない場合のあることを示している (*Met.* VII11.1026b1)。「すべての円が銅」であつたにしても、「銅は劣らず形相の部分ではなかった」(1036b2, cf. VIII1.1042a20f)。なぜなら「銅の円そして石の円は、それらが分離されることの故に、円の実体のいかなるものでもないこと明らか」だからである(1036a33f)。このように可感覚的事物の形姿は混合的なものとして観察されるが、幾何学的対象はロゴスの抽象作用により純粋に形姿として析出されうる。その形姿のロゴスは「形相」(277b33)に他ならない。形姿と形相が並置されるときにはエルゴンとロゴスそれぞれ

の視点から提示されている。

それに対し先の可感覚的実体の事例に見たようにシモンとして質料と混合されている形姿は今・この観察によりその何であるかの探求が遂行される。質料と形姿の混合は合成体を形成しており、その形姿は「これ」という実体の三条件（基体性、或るこれ（指示可能）性、離存性）の一つを満たす。彼は言う、「基体は実体である、かたや一つの仕方では (1) 質料が基体である、ただし質料と私が言うのは実働において或るこれ〔と指示されるもの〕ではなく、力能において或るこれである。他の仕方では (2) ログスと形姿が基体であり、これは或るこれであって説明言表上離存的である。第三のものは、(3) これらに基づくもの〔統合体〕であるが、これについてのみ、生成と消滅があり、また端的に離存的である。というのもログスに即した実体のうち或るものども〔純粹形相〕は離存的であり、他の〔可感覚的な〕ものどもはそうではないからである」(VIII.1.1042a26-32)。

基体性条件を満たす三種類の実体があるが、一方で (1) 力能と (2) ログスそして (3) 実働にあるものとして判別される。(2) ログスと形姿が基体であるのは、質料への内在ゆえに、「これ」と今・ここにおいて指示される統合体の規定性を担っているからである。「他の実体は形姿と形相であり、それに即し現に〔今・ここで〕(*ēde*) 或るこれが語られる」(412a8)。「或る」が付加されることにより、「これ」という魂の語りの働きとしての今・この指示の現場を括弧にいれ、エルゴンの文脈を一般的に受け止め、指示されうる個体の規定性を一般的に表現している。「最終質料と〔混合〕形姿は同にして一である」と言われるように内的な関係がエルゴン上「これ」の指示対象として一つのものを形成している (1045b18)。そして形相までに指示が届くためには、ソクラテスは現に生きているつまり実働においてあるのでなければならない。

この指示機能は二重であるとされる。彼は「ソクラテス」と「コリスコス」は、たとえ〔彼の〕「魂」もまたそう〔二重〕であるにしても、二重 (*ditton*) である。というのもそれらはかたや魂〔形相〕を指示するものとして、他方は統合体を指示するものとしてあるからである。しかし、もしこの魂 (*hē*

phshuchē hēde) とこの身体 (*to sōma tode*) が端的にあるなら、普遍と個体双方とも同様の仕方で「端に離存的に」ある」(1037a7-10)。指示の二重性は「この魂」により魂が端的に「これ」と指示される状況にないことを含意している。魂はシモン性である。形相は純粹形姿としてのみロゴス上分節されることによって特定される。形相を混合形姿からエルゴン上抽出分離することはできない。もし分離されているなら、今・この指示行為「これ」はもはや魂には届かず、ムクロのみを指示し「身体」は同名異義的なものとなろう。「球」はそれがそこにおいて実現される時空上の素材への言及なしに、それ自身として定義される。他方、「魂」は身体への言及を不可欠とする。ロゴス次元において形相は質料といかなる仕方でも混合されないが、形姿は混合形姿として間接的に形相を指示することができる。

この点で「シモン」の導入による思考実験は有益である。この表記がもたらすものはエルゴン上シモンのような合成体の形姿は「質料と混合されたもの」であり、質料それ自身の特徴づけにすでに「形姿」と表現される形相性が含意されており、ロゴスによらなければ質料部分を取り出せないことを示している。先に「シモン性」のごときエルゴンに内在するロゴスを [LinE] と表記した。アリストテレスは言う、

自然学者においては [L] いかにかに定義すべきかそしていかに実体のロゴスは把握されるべきか、はたして [E] シモンとしてか或いはむしろ [L] 窪みとしてかを忘れてはならない。というのもこれらのうち一方は [LinE] 事物の質料を伴うシモンのロゴスが語られるからであり、他方は [L] 質料なしに窪みのそれが語られるからである。というのもシモン性は鼻において生じるからである、それ故に [LinE] これを伴うそれ自身のロゴスが理論的に考察される。なぜならシモンは窪み鼻だからである。かくして明らかに質料を伴う肉と目と残りの諸部分のロゴスを常に与えねばならない (1064a23-28)。

可感的事物の定義は工夫のもとにシモン性の如き混合形姿として定義されるが、そのさい形相は、「鼻」における「窪み性」という仕方で、ロゴス上分離される。

なお、実体の三種類を挙げる文脈で「質料」と「第三の」実体である「統合体（これらに基づくもの）」との対比において「形姿」が挙げられるときは、「形相」との連言例えば「形姿そして形相」（335b7, 412I8, 734a33, cf.1042a28, 193a30）等と表現される。この連言により、二つのことを知ることができる。一つには形相やロゴスは可感覚的事物のそれであることであり、もう一つには形姿は形相と同じ実体の種類としてエルゴン上の形相の内在を表現しうることである。即ち、この連言は生成消滅するエルゴン次元のただなかでロゴスを含意している。

換言すれば、ちょうど魂の定義に生きることが要求されるように、エルゴンがロゴスに組み込まれる。形姿と形相の相補性が必要とされるゆえんである。

3.2 「運動（*kinēsis*）」と「変化（*metabolē*）」の相補的アプローチ

次に、「運動」と「変化」について簡単にロゴスとエルゴンの相補性と「完成」の役割を確認する。彼は『自然学』第二巻一章冒頭で運動と静止の内在原理である「自然」と呼ばれる質料と形相を理解するためには「運動は何であるか」を解明しなければならないとする（200b14）。第三巻一章で定義が試みられる。[L]「運動」は「力能にあるものの完成、力能にあるものである限り」（*Phy.*III1.201a10-11, 201b5: *hēi dunaton*（力能にあるものである限り））と一般的に定義される時空の幅を持つ存在者である。この規定を受ける連続的な存在者は運動以外に存在しない。「力能にあるものである限り」という限定は「完成」が除かれる。というのも完成にあるものはもはや運動していないからである。

この運動の定義が適用される存在者の類は対応する形相の存在様式である完成が帰属する事柄に即して四つの種類（実体、質、量、場所）が挙げられる（201a9-15）。他方、彼は第五巻一章において変化の視点からは「運動は三つ〔の存在者の類〕であること必然」とし実体を排除している（225b7）。研究者はこれに困惑し彼の思考の変遷に訴えたり、「広義」と「狭義」に分けたりするが、その要はない¹⁰。運動は[L]（形相を含む定義形成）と[E]（今・

ここの観察)双方の相補性により知られる。運動はロゴス上四つの範疇に帰属し、変化という枠組みの中でエルゴン上三つの範疇に帰属する。

他方、彼は、この「普遍的な」定義との対比において、「今・ここ」の時間を考慮しつつ「その時・そこ」を含む一般的な仕方でエルゴンをロゴス化した「部分的 (*kata meros*)」な規定を提示している (cf.202b23-25)。彼は建築の例を一般的な仕方で挙げている。[E]「建築されうるものが、それ自身[石や木]をそのようなもの[建築されうるもの]であるとわれらが語る限りにおいて、完成においてあるとき、それは建築される、そしてこれが建築実働である」(201a16-18)。彼はこのエルゴン次元の事例をより一般化し、受動と能動の相即的な実働として先の「普遍的な」定義より「より可知的な」説明言表を提供する。「しかしより一層可知的なものは、「力能において能動しうるものと受動しうるものの実働、このようなものである限りにおいて」である、端的にそしてまた個々に即して建築実働であれ、医療行為であれ」(III3.202b16-18)。彼は先の普遍的定義の「完成」を「実働」に代えより可知的な説明言表を与えることもある。[E]「建築されうるものが、それ自身をそのようなものとわれらが言う限りにおいて、実働においてあるとき、建築される、そしてそれは建築である」(*Met.* XI9.1065b17-19)。注釈者たちは二つの類似の記述から「完成」と「実働」を同義なものとしてきたが、[L]と[E]の相補性と読むとき、何ら問題はない。

ここで「完成においてある」における「完成」とは建築活動のゴールである統合体家のロゴスが建築家・棟梁の思考におけるロゴス(設計図)と同じものであるその存在様式である。「完成」は形相の存在様式としてはロゴス次元において普遍的、無時間的存在様式を表現できるものであった、エルゴン次元における今・ここの実働と共に。力能にあるものと完成は力能にあるものを特定するロゴスとしての一つの合成体を形成しうる。石や木は完成に対する言及のもとに「建築されうるもの」という力能のロゴスを得る。完成は設計図という魂の一つの知的活動の存在様式としては始動因そして目的因双方の存在様式であった。この始動因が持つ完成に関係づけられるとき石や木という事物がロゴス上「建築されうるもの」という特徴づけを得、そして建

築活動が生じる。実際、彼は「完成における思考から力能に基づき生成することの定義形成句は「もし外的なものの何も妨げなければ、主体が欲するとき、生成する」である」(*Met.*IX7.1049a5-7)と規定している。石や木が建築されうるものという特徴を得るのは建築家の「完成における思考(設計図)」に組込まれる限りのことである。

運動はエルゴン上今・ここにおいて始動因により始動因に内在する完成においてあるロゴスが受動者に接触を介して伝達される。彼は言う、「それ故に運動は動かされるものの完成である、動かされるものである限りにおいて。だがこれは動かしうるもの〔始動因〕の接触によって(*thixei*)生起する、その結果同時に受動もする。動かすものは、しかし、常に形相を伝達するであろう、[実体の指示性条件を満たす]これであれ或いは[性質に対する]このような、[量に対する]これほどであれ。それ〔形相〕は、動くとき、運動の始原そして根拠であるであろう、例えば完成においてある人間が力能にある人間から人間を作るように」(*Phy.*II2.202a7-12)。ロゴス上完成の存在なしには運動は規定されず、ただのカオスとなる。

なおロゴスの伝達は物理的なものに還元されない。アリストテレスは形相と質料の自然的合成について言う、「自然合成(*sumphusis*)は接触と異なる。というのも、後者においては接触とは別に他の何も存在する必要はないが、自然合成にあるものどもにおいては或る一つの同じもの〔形相〕が双方にあり、それが接触されてあることを超えて連続性と量に即して、しかし性質に即してではなく、自然的に合成されてありまた一であることを作るからである」(*V4.1014b22-26*)。自然的合成体は能動するものと受動するもののあいだに「或る一つの同じもの」としての形相であるロゴスの授受が遂行されることにより一でありつつ、そのロゴスとしての形相それ自身は接触されるものではないがエルゴン上質料を規定することにより定量的な分析と記述を許容する存在者である。

他方、エルゴン上、棟梁は常に完成においてあり、建築という実働を遂行している。実働が常に終局であるという理解は少し難しいが、先述のようにここでは例えば大工の見習いは技能において成長してゆくが、完成において

ある棟梁や熟練工は自ら何かを新たに学習するということは想定されていない。アリストテレスは感覚が端的な実働であると理解する理由を述べる文脈において二種類の力能と実働の組を判別するものとして「完成」を提示していた(431a1-7)。

ロゴスの存在様式としての完成は例えば教師と生徒のあいだでさらには複製機構における始動因と受精卵のあいだで共有されている。さもないと、生徒が教師となることも赤子が成人になることもできない。彼は運動が被動者に帰属することを説明して言う、「というのも、運動は動かさうものによる被動者のうちに属する完成だからである。また動かさうものの実働は別のもの[完成]ではないからである。というのも、双方の完成が存在しなければならぬからである(*dei men gar einai entelecheian amphoin*)」(202a14-16)。彼は言う、「エルゴンはゴールであり、実働はエルゴンである。それ故に名前「実働」はエルゴンに即して語られる、そして完成に対し緊密に関わっている」(1050a21-23)。エルゴンは働きの最終的な形姿である。それは時制テストをクリアする実働であるか、そこから帰結する産物である。形相が質料を介して実働することは受動者に帰属する運動とは判別される。その実働は常に完成においてある。だからこそそれは完成に緊密に関わっている。

運動の一性の定義は「容易ではない」が、この様相的定義により「適切に語られた」とされる(201b16-17, 202b24)。運動否定論者や流転論者や混合論者に対して運動の一なる実在であることの確認は有効な反論となる(cf. *Phys.* I2-6)。しかし、定義は何であれ存在するものの一性を開示するものとして与えられる故に、この定義は非存在を考慮することができないという代償を払う。従って、変化の視点からの補いが不可欠となる。

運動はロゴス上力能と完成の或る合成体であり、そして完成(eg. 実体形相獲得)の手前までの未完の連続体存在者を開示している。[E]「あらゆるものは形成しうものかつ実働にあるものによって受動しかつ動かされる」(417a17f)。働きの現場にまなざしを注ぐことにより、能動者と受動者の接合において運動が生起することを確認できる。受動者は動かされるべく常に実

働いているものを必要とするという仕方では運動は彼の様相存在論に組み込まれる。この連続体存在者が「一つ」であるのは「時間に即して分割されないもの」である場合である (1016a4-6)。この時間上途切れることのない非分割な連続体存在者は例えば変化のように「白 (*leukotēs*) くなる」ではなく「白化 (*leukansis*)」と呼ばれる (224b15)。

他方、変化はこの連続体存在者がそこから生起し、そこにおいて停止しないし消滅するその両端の外を観察により捉えられうる。「変化」は二時点間に生じた差異として観察されるが、始点よりむしろ「結果において名づけられる」(224b35-235a2)。たとえば「消滅」は非存在に至る変化である。「変化 (*metabolē*)」の語彙の構成からして「その名前は、別のものの「後に (*meta*)」或るものを、そして一方がより先のものを、他方がより後のものを開示する」(225a1)。常により先とより後の二時点間の観察を必要とするものが変化である。かくして、一方突然変異はこの二時点間の素材の差異として確認されるが、運動は完成に向けて秩序づけられている (消滅はその否定により処理される)。

運動は変化の視点から限定される。彼は言う、「あらゆる運動は或る変化であり、語られた変化は三種類 (1) 非基体から基体, (2) 基体から基体, (3) 基体から非基体) であり、これらのうち (1) 生成と (3) 消滅に即した変化は運動ではなく、これらは矛盾に即したものであるので、必然的に (2) 基体から基体に至る変化のみが運動である」(V1.225a34-b3)。したがって、範疇上は性質と量そして場所においてのみ基体の持続のもとにある連続体存在者としての運動が「必然的に」変化として捉えられる (225b8)。彼は「実体に即した運動が存在しないのは存在するものどものうちいかなる反対なもの (*enantion*) も実体においては存在しないことの故にである」と説明する (225b10)。実体には存在か非存在かの矛盾対立 (*antiphrasis*) が適用されるが、反対対立は基体の持続を前提にする。「非基体から基体への矛盾に即した変化は生成であるが、かたや端的にそうである端的な生成があり、他方或るものの或る生成がある。例えば非白から白へは後者の生成であり、端的に非存在から実体へのそれは……端的な生成である」(225a12-17)。実体の端的な生成が

語られるためには非存在を視野にいられた変化の概念が不可欠である。そこでは連続的な運動は排除されている。

連続体存在者を変化の「から～へ (*ek-eis*)」視点から語る限り、基体から基体への属性変化のみが運動として数えられる。そしてその記述は魂の観察という [E] エルゴンアプローチにより為されている。彼は言う、「われらはこれら [「大きさ」「[質の] 種」「場」] のそれぞれにおいて、反対から反対へまた中間的なものに変化が生じているのを見る (*tēn metabolēn horōmen ginomenēn*)、しかも任意のものにおいて任意のものに変化があらぬことを見る」(*De Caelo*.IV3.310a23)。

「変化」は魂の実働に即して語られ、そして世界の側の出来事を捉える。「変化」に定義がないのではなく、その定義に魂のエルゴンが内在するということである。魂の働きを想定せずには変化は理解されない。ちょうど「時間」は「より先とより後に即した運動の数」(*Phy*.IV11.219b1) という定義において、基準運動 (例えば北極星をめぐる天体の円周運動) を数える知性体なしに、時間は存在しないように、二つの今を認識する知性的な魂なしには、何かから何かへの変化は存在しない。ただし、魂も実在であり、時間や変化が魂の表象や投映であるという類の観念論的主張がなされているわけではない。魂がなくとも時間の流れを数えせしめるところの運動はあったであろうし、非存在から存在への生成変化と言わしめるところの或る素材の植物魂の受容という類の出来事はあったであろう。しかし、魂の実働を含意する「変化」という概念を導入することによって、属性変化とは異なるものとして非存在から存在への実体生成を語ることが可能となり、ロゴス的な存在者である形相の伝達をめぐる力能から完成への運動を確保すること、即ち不可視なロゴスの証拠を提示することができたのである。

先の運動の様相的定義はロゴス次元において運動にのみ適用され、しかも実体の生成にも適用されるが、完成は質料のロゴスである形相の存在様式であり、それ自身合成体を介してでなければエルゴン上知られない。運動が、一方では、完成としての実体形相の獲得に至る故にロゴス上実体にも属するとすることは先に確認された(202a7-12)。そこでは、人間の受精卵から胚の

発生過程が向かうものが完成のロゴスであり生命原理である「形相」であるとされる。それが人間の内在的実体である魂であり運動の原理、根拠であるとされる (cf.1045b17)。現場で「これ」と指示が成立するのは現に生きているエルゴン上形姿そしてそれに内在するロゴスである形相の規定性によるものであった。他方、魂の認知活動上、この連続体存在者は、例えばヒトの受精卵が分裂し量的に増え移動する等、性質変化、量変化、場所移動という三つの存在者の範疇（類）のみに帰属する。

他方、「変化」として、実体生成は非存在から赤子の存在への一つの変化として語りうる。運動のロゴス上の完成は変化のエルゴン上親似の赤子が生きている事実の観察において確認される。他方、完成においてある実体に内在する形相は質料のロゴスとして一性の定義の形成を通じて把握される。或いは実体の生成を運動即ち連続体存在者という視点から記述するなら持続する基体における性質、量そして場所の変化として観察により確認される。それ自身観察されないロゴスとしての形相はエルゴン上の発生過程においては力能において内在し、その都度今・ここにおいて「より先」と「より後」においてその力能がエルゴン上確認される。力能を定量化するなら、それはロゴスとしての形相のエルゴン化、自然主義化であると言える。

3.3 「目的 (*to hū heneka*)」と「ゴール (*telos*)」の相補的アプローチ

3.1 複製機構に見られる「テロスのため」

最後に「何かがそのためのそれ(目的) (*to hū heneka*)」と「ゴール(*telos*)」の相補的展開を考察する。「目的因」は生成変化の「ゴール (完結・終局)」であり、それは他のものがそのためにあると語られるそれつまり「目的・そのための」として限定される。彼は言う、「そのためのそれ」は原理であり、生成はゴールのためにある (*tū telūs de heneka*)」(*Met.IX8.1050a6*)。つまり目的因を表現する「そのための」の「それ」に「ゴール」を代入することが許容される。「ゴール (テロス)」と「目的 (トフーヘネカ)」には時空上観察により特定できるものとロゴスにおいて特定されるものという概念上の差異がある。テロス (ゴール) の存在は目的の存在の少なくとも必要条

件を構成する。雨や氷結は自らの力というより気温の変化等外的環境の変化による循環的な自然現象であり、ゴールがあるとは言えず、目的的事であることが否定される。テロスがあっても偶然や自己偶発により生起するものは、たとえ何らかの目的に適ったとしてもその目的性は否定される。例えば、馬がひとりでに〔偶発的に〕戻ってくる場合が挙げられる。散歩しても「空腹」が実現されないとき「無駄に散歩した」と言われるが、この「無駄 (*matēn*)」が「自己偶発 (*automatēn*)」という語を構成している (*Phy.*II6.197b25)。「われらは観察に基づき、自然はいかなる場合にも可能な限り、失敗したり無駄なことをしたりしないと仮定する」は自然理解の彼の一つの基本的な立場の表明である (*Gen.An.*788b20-23, cf.741b4)。恒常的な継起の連続性に善いゴールのあるものが目的因の語られる基本的な場となる。

ここでは予備的な理解として、「人間は人間を生む」生物の複製機構の分析の記述における「目的」と「ゴール」の異なりと相補性の一例を見ておく。一方、エルゴン上ゴールはそこにおいて生命という善が実現される終極点であり生きているか否かはその都度観察される。他方、「何かがそのためのそれ (目的) はロゴスのうちにある (*to hū heneka en tō logō*)」(*Phy.*II9.200a14)。目的・善はロゴス的な存在者であり、ロゴス上その実現の手段となる素材、骨や肉など「ロゴスの質料」(200b8)の「何であるか」を規定する原理である (cf.II1.193b3-18)。アリストテレスは目的は[E]ゴール(終局)でありそして[L]「定義と説明言表からの原理(始原)」であると理解している(200a34)。エルゴン上のテロスは運動が「それに向けて」あるところの究極であるが、目的はロゴス上始原であり、それに基づき定義がそして「条件的必然性」のもとにゴールを実現するためにはいかなる素材がいかなる過程を経て生成されるかの設計図が形成される(200a13)。

3.2 自然選択における必然と偶然

善いということは偶然的なことであり、内的な関係にないという対立する見解がありえる。生物にとって生存と繁殖、繁栄が客観的に判別できる善であるとして、それは恒常的な継起の終局とはあたかも目的的事であるかのごと

くに生起したとしても、内的な関係にないという主張がある。それに対し、テロス（産出物）とトフーヘネカ（その目的）が生成（エルゴン）次元とロゴス次元の関係として離れないものとして理解することが彼の目的論的自然理解に決定的なこととなる。

論敵は言う。「自然における諸部分、例えば歯に関して、一方、前歯は必然的に尖り、噛み切るのに便利であり、他方、臼歯は必然的に平たくなり、食物を噛むのに役立つが、そのためにそれらが生成したのではなく、それは偶々はまりあったのである。何かのためにということが属しているように思われる限りの、他の諸部分についても同様である。かくして、あたかも何かのために生じたかのごとくに、そのようにすべてのことは偶々起こったのであり、或るものどもは、自己偶発的に適切に結合され生存したのであり、他のそうでない限りのものは、ちょうどエンペドクレスが人面の牛の子について語っているように、滅びたし滅びているのである」（198b10-32）。

興味深いことにダーウィンはこの箇所を『種の起源』（An Historical Sketch）冒頭において引用しているが、このアリストテレスの論敵の見解を彼のものと誤解したうえで、次のように述べている。「われらはここで前触れとしてほのめかされている（shadowed forth）自然選択の原理を見るが、しかしアリストテレスがいかにわずかにしかこの原理を十全には把握していなかったかが歯の形成の記述に示されている」（p.xiii）¹¹。このダーウィンにより自然選択の影を映しだしたとお墨付きを与えられたエンペドクレス等自然学者たちの見解は、四元素の必然的な運動により自然物は生成しており、適者として生存するのも、また不適応により滅びるのも偶然的なことであり、自然に何か内在的な目的があり、そして生成と存在をコントロールしているわけではないというものである。彼らの議論を再構成し、さらに偶然の議論を参考にして彼らの立場を明白なものにしてみよう。

- （一）自然な事物、事象は、四元素を構成する熱冷乾湿の本性的な運動の帰結として、必然的に存在した生成する（根本主張）。
- （二）自然事象である雨は、上昇、冷化そして水化という、気象上の物理化学現象によって必然的に生じる（（一）の例化）。

- (三) 雨はゼウスが穀物を成長させるために降らすのではない。穀物の成長という善そしてその腐敗という悪は、或る環境のもとで、偶々雨降りに付帯しただけである（(二)の帰結）。
- (四) 生命現象である動物の部分に関しても同様である。前歯が尖っていて噛きるのに適し、臼歯が広く食物を噛むのに役立つが、この有益性は必然因によって育った歯に偶々合致しただけである（(一)の例化）。
- (五) すべてが、あたかも何かのために生じたかのように帰結した場合には、それらは偶然に適合的に合成され、生存したのである。さもないと人面の牛の子のように、偶然に滅亡したのである（(一)―(四)の結論）。

この一連の議論において、結論として導出される(五)は目的因が自然には存在しないことを主張している。根本主張である(一)に基づき、目的因が存在しないことの証明を企てている。論敵に対する反論を吟味する前に、最初に準備作業として、外的環境に適応した適者が生存するという自然選択の思考に慣れた現代人にとって、アリストテレスがどのように応答するかを確認しておこう。自然学者たちの自然理解は、偶然的な帰結とされる善ないし目的を自然から、或いは少なくとも自然の探究の対象から一切排除する。生存と繁栄は外的な環境との偶然的な関係に依存し、外的な環境が変われば、従来生存してきた生物は滅亡するため、根拠と結果の安定した関係を目的因をめぐる形成することはできない。アリストテレスの見解はこの点において自然学者たちと鋭い対立的な関係に立つ。探究対象の自然そのもののなかに彼らが理解する特徴をもったロゴス上トップダウンを形成する目的因、理がはいる余地ははじめからなく、アリストテレスの理解における質料と始動因の必然的な形成というボトムアップにより記述される限りのものが自然の事物、事象ということになる。

3.3 生物の形姿はその生存に対し偶然的か

先行自然学者は形姿と善は偶然的なものとするが、先人たちは偶然を明確に規定せず、その考慮のなさば、アリストテレスには「驚くべきこと」であった(196a19)。「過去の賢人たちが生成と消滅についての根拠を語るさいに、

誰も偶然について何も規定することをしなかった」(196a8-10)。彼には「多くのもの」が偶然や自己偶発から生じると思われたからである。彼は偶然の理解を、根拠と結果には自体的な連関にあるものと、付帯的なものがあり、自体的連関は「一定」であるのに対し、付帯的な連関はその特定が「不定」とあるという視点から試みる。偶然は付帯的な連関を形成するが、それが不定であるのは、「無限が一つのことに随伴しうるからである」(196b27-29)。

この偶然性理解には先の自然学者たちも同意するであろう。というのも、彼らは、実質的には、善としての生存は無限に変異可能な外的環境に依存するために不定であると主張しているからである。自然と生存がこのような外的関係にあるとすれば、彼らにとって自然を理解することは偶然的に生存しているものの、必然的な生成プロセスを辿ること以上のものではないことになる。

それへの反論の成否はゴール(テロス・完結)と目的(トフーヘネカ)が自然における生成次元とロゴス次元双方の関係として離れない内的なものとして理解することができるかにかかっている。彼は「ロゴスとゴールとしての目的(トフーヘネカ)は同一である」(715a8)と言う。生成次元のゴールにおいてその事物の目的としてのロゴスが知られる。その含意は完成が持つ統合体の形姿には目的適合的な理由が内在しているということである。生成の最後に現実化される形姿は生存のために得られたのだという主張である。

一例挙げれば、「眼」と「見るため」は内的、自体的な関係である。「網膜に像を結ぶこと」という機能が何故「眼」に属するかと問われれば、機能は第一義には合成体に属するので、「それは眼がやわらかく湿った透明な球体だから」とその素材とともに形姿への言及により応答される。さらに、「何故像を結ぶことがその球体に属するか」の問いには「見るため」という目的因がその機能の合成体への必然的な帰属を説明する。結果として見る事が生起するが、眼がその結果をもたらすのは光の屈折により像を結ぶ等一連の生理的事象を一つのものにしていく形姿に内在する事象の一性を説明する根拠による。質料(角膜や硝子体等)を統一し合成体(眼)に機能を遂行させるものは目的因であり、目的因は、事実上、説明言表上本質(自体的な一であるこ

と)を開示する形相因として質料因から分節される。このような形姿をしていることは視というエルゴンに言及することなしには説明できない。アリストテレスの生命観はこの秩序ある形姿を持つことそれ自身に目的である善が帰属しているという主張と理解することができる。

彼は合成体の持つ形姿と目的のあいだに内的関係を見るが、その背後には、或る安定した外的環境を想定していることを確認できる。ダーウィンは進化を歴史的事実の系列として長い地質学的な時間において考慮していたため、適応は傾向性解釈としてであれ歴史への言及を要求するであろう。アリストテレスは「ヒトがヒトを生む」複製機構の秩序正しさの遺伝的な安定性を説明することを一つの目標としていた。かくして、両者は同一事象(種)を異なるタイムスパンで、異なる要因のもとに見ていたということになると思われる。R. Mastersのように「アリストテレスによるエンペドクレス生物学を拒否する理由は系統発生論のうちにではなく、個体発生論のうちにあり、そして理論のうちにではなく、観察のうちにあり」と言いうるであろう¹²。

ただしアリストテレスなら、共時的なロゴスがエルゴンに内在しているが故に、複製の秩序正しさが観察されると付け加えるであろう。生成消滅過程を経ないロゴスが、ホモサピエンスにおいて見出されるとして、類人猿からそのロゴスが増化したと語られるのではなく、新たなエルゴンの観察を通じて秩序あるロゴスが内在していることが確認されるということである。エルゴン上生存している限り形相は質料から分離不能であり、ロゴス上分離されるということがこの主張を可能にする。類人猿の秩序はそのエルゴンにおいて見出され、ホモサピエンスの秩序はそのエルゴンにおいて確認される以上、ロゴスは新たにロゴスアプローチによりエルゴンを定義に組み込みつつその必然的な一性の把握を介して提示されるものとなる。

3.4 目的因の存在証明

エルゴンの反現実仮想に基づく「自明性の拡張テーゼ」

アリストテレスは自然が内在的で自体的な運動と静止の原理や根拠であると規定し、それを満たすものとして質料と形相を挙げていた(192b21f)。当時

の自然学者たちは自然が目的と外的な関係しか持たず、生存と繁栄を自然の事象から排除するが、もし目的因が質料のなかに偶然的ではなく、自体的に内在し、他方、質料が生存している生物に自体的に内在しているならば、事情は異なってくる。自体的連関の要請は根拠と結果ないし生存の個別化を明瞭なものとする企てである。解決すべき問題は、秩序ある一つの可知性を持った根拠と結果の連関を自然物の生存と繁栄に見い出すことができるか否かである。

そこから恒常的な生成過程のあるところ、もし偶然か目的因のいずれかによって生成するということが前提にされるなら、それは偶然によるものでなく、目的因によると主張することができる。恒常的な過程からいきなり目的因の弁証をしようとしているわけではないが、少なくとも或る形姿、形質が生存と繁栄に適していることが観察により確認され、実際安定的にその形質が複製されているなら、その恒常性の根拠として目的因を提示できると彼は考えている。

アリストテレスは目的因の存在証明を『自然学』第二巻八章において二つ提示しているが、ここでは私が「自明性の拡張テーゼ」と呼ぶその一つを挙げる。最初に、目的論的であることがはっきりしている行為主体モデル (Agency Model) との比較により、自然によるものの目的論的な性格が鮮明にされていく。散歩という行為に対し、「なぜ散歩するのか」と問えば、「健康のため」と答えられよう。健康でありたいという魂の意図が身体の運動を引き起こしている。しかし、生体の事象たとえば「なぜ睫毛はあるか」という問いに対し、「目を守るため」という正しい応答において、意図を見出すことはできない。善への感受性を要求する行為主体モデルは自然の擬人化を引き起こしかねない。しかし、彼はそれを回避する議論を提供している。

何かゴール (終局) があるもののどもにおいては、より先なるものと続くものはそのために制作がなされる。それぞれは、もし何かが妨げるのでなければ、制作されるように、そのように自然本性上成るし、自然本性上成るように、そのように制作される。それぞれは何かのために制作され、従ってまた、何かのために自然本性上成る。例えば、もし家が

自然によって生じたものであるなら、今技術により成るその仕方では生じたであろう。しかし、もし自然によるものが、単に自然によるだけではなく、技術によっても生じたなら、自然に成ったその仕方と同じ仕方では生じたであろう (199a8)。

ここで「ゴール (テロス)」という表現が導入され、それが「何かのため」のその「何か」と同定されている。しかし、ゴールは初めから目的因(トフーヘネカ) のことであるとすれば、議論全体が論点先取を犯すことになる。ここでは「より先のもの」と「続くもの」という表現から明らかなように、「テロス」はエルゴン上の「完結、終局」を意味する。テロスがあるものの一つの代表は制作行為であり、それは制作物の完成をゴールとする。アリストテレスは制作行為において、先のものと続くものそしてゴールがあるように、自然本性に従って成るものもゴールに至るまでそのように成ると言う。

この議論は制作行為と自然事象の一方に説明的優先権を与えることなしに、双方が互いに説明的である円環的とも形容できる説明構造を示している。彼は反現実的なエルゴンを事例に挙げ説明する。もし家が自然物であったなら、今技術により作られるその同じ様式により生じたであろうし、もし植物が人工物であったならば、今自然に生じるその同じ様式により作られたであろう。このような秩序ある生成において、制作行為は常に何かのためになされるものであり、「従って」、自然も何かのためであると主張されている。制作行為のエルゴン分析が自然の目的論的構造を基礎づけているわけではない。目的論的因果性の特徴であるゴールに至るまでの過程の道筋が二つのケースにおいて等しく現在すると主張されている。それも反現実仮想により、エルゴン上のより先とより後の平行性を確認することによりロゴスとしての目的因の存在が主張される。

彼は行為主体モデルによる自然の擬人化の疑義を自覚しており、自然と技術の生成の平行性は「技術によることもなく、探究や意図することなく作る他の生物たちを見れば」、「最も明らかである」と主張する。ここで「技術」とは理論的知識と類比的な制作上の真なるロゴスのことである。技術によらず探究や思案そして選択もしない生物の行動を見る時、「燕が巣を作り」、「蜘蛛

蜘蛛が網を張る」事象は自然によってでありまた現実的に目的適合的なことである。生物を観察する時、ゴールに向かいより先とより後の生成の経過が秩序正しいものとして見いだされる。このことは安定したゴールがあるからこそ、それを実現するプロセスにおいてより先なるものと後なるものも秩序を持つという見解を説得的なものとする。自然においても技術と同様に、自然は無駄なことをすることなく、ゴールを実現するステップが合理的な仕方によって決まっているに違いない。この相違ないという主張は、善に対する感受性に訴えることなく、エルゴンの観察と人工物と自然物の反現実仮想による確認に基づくものである。

自然と技術は何かの妨げがなければ、望ましい理論における望ましい仕方と同様の過程と方法を選択する点において円還的説明を許すものであるとするなら、技術が目的的事実であることが疑いえない以上、自然物も目的的事実である。これは生成秩序を共有するもの同士の間での一方の自明性からする他方への拡張議論であり、「自明性の拡張テーゼ」と呼ぶ。

機能モデル

この見解は生物の行動や生物の生成を機能モデル (Function Model) による説明にも対応していると言うことができる。これはエルゴン次元においてのみ理論を構築するものである。例えば、腎臓の機能を血液の流入等のインプットにより、これこれの過程を踏み、アウトプットとしての老廃物の処理と記述できるとしよう。そしてその処理は結果として、事実上、有機体全体の維持に「貢献する善いもの」であるという理解を許容する。実際、生存に貢献しているからである。有機体は自らに善であるが故にという理由で、これこれの質料や過程を選択するということなしに、実際に有益である仕方では有機体は機能するというものである。その時、機能モデルは生存に貢献するこの種のアウトプットを生体というシステム全体の現在の状態とインプットの関数として表現される。これは結果としての善を始動因により説明する試みであり、これも善に対する感受性に訴えることのない定量的な説明の一形態である。

しかし、彼において機能はまず合成体（魂体）に第一に帰属するが、目的との関連においてのみ正しく語られる。例えば、心臓の機能は「血液の拍出」であるが、それは「栄養を全身に送るため」という目的への言及なしに、その機能、エルゴンの何であるかを定めることはできない。睫毛の機能は「目の或る覆い」であるとして「目の保護」への言及なしにその何であるかを知ることにはできない。他方、誰かが「肥満」の機能を「運動防止」であると言ったとして、それは或る形質が現存する理由についての説明が機能についての説明であると考えたことの誤りを示している。腎臓など部分の機能はその目的や生体全体の保存への貢献において確定される。だからこそ否定的な事態は「機能不全」と呼ばれる。

かくして、機能モデルは目的因を力能においてゴールに方向づけられた始動因として説明するものと言えるが、やはりこのインプットから産出されるアウトプットはその部分ないし全体への貢献への言及によりその機能の何であるかが判明するという意味において、背後に善である目的因を要求している。これを開示するのはその何であるかのロゴス（説明言表・定義）を形成することにより、テロス（終局）とトフォーヘネカ（目的）の内的な関係を明らかにすることである。機能モデルはその背後にある目的因への言及なしに、また善の感受性への言及なしに力能から完成への過程として特徴づけるものであると言える。

自然は自己維持のロゴスを所持している

『自然学』第二巻第八章の終結部で、自然は医者が自ら自身を治療するのに似ていると結論づけられる。医術は意図することはない。技術を所有しそれによって制作した治療する者は技術の定義上（制作上の真なるロゴス）意図することはない。「もし木材のうちに造船術が内在していたなら、それはその自然によって、[技術によってと]同様の仕方で、製造したであろう。従って、技術のうちに何かのためが内在するなら、自然においてもそうである。とりわけそれが明らかなのは、或る医者が自分で自らを治療するときである。というのも自然はこのものにあると思われるからである。かくして自然は根拠

でありそして何かのためとしてそうであることは明らかである」(199b28-b33)。手に治療術を持った医者は自身に故障が生じたさいには、他に依存することなく自ら健康を取り戻すべく、自らに身体化している技術によって、もはや思案することなく自身を癒す。ちょうど「造船術が木材に内在する」ように、ロゴスとしての自然が自然物のうちに内在しているからこそ、意図することなしにもエルゴンがゴールへと方向づけられている。

この比喩によれば、自然は自ら自己維持ないし完成のロゴスを所持し、そのロゴスを媒介に自己と環境（非自己）に関わりつつ、自己の存在を維持しているそのような原理である。自然物として能動と受動の主体は同一であり、そこに内在する自然は自律的であることが示されている。大胆に言えば、ロゴスは自ら動かず、自己維持のために身体や素材を動かしている。そこで観察されるのがエルゴンである。秩序ある生成においては、エルゴンのその都度の段階において、「ロゴスの質料」(II9.200b8)との対応関係を確認することができる。有機体は自己と環境の何らかの識別のなかで、自己の存在を維持すべく環境に適応しまた利用するそのような原理としての自然を内在する自然物だと主張できる。

ロゴスのエルゴンへの内在化は現代の進化生物学が陥る生存と適応をめぐるトートロジー問題に一つの応答を提供している。トートロジー問題とは突然変異した対立遺伝子間での生存競争を介して、「誰が生き残るのか」の問いに「適応度 (fitness) の高い者である」と応答するとして、「誰がその適応度において高いのか」の問いに「生き残る者である」と応答する類のものとされる。この相補性の立場から進化生物学に一つの挑戦を試みたい。

3.5 進化生物学への一つの挑戦

5.1 ダーウィンとその継承者たち

「自然法則」のエルゴン上の理解

このように、アリストテレスにおいてはロゴスとエルゴンの相補的展開はエルゴンにロゴスが内在し、ロゴスをエルゴンから導出するその様式において遂行されるが、生物事象の解明において不可欠である。ここで、自然選択

と遺伝理論の総合としてのネオダーウィニズムや進化生物学においても実際に求められているのはこれらの分節と総合であることを一つの挑戦として提示したい。ダーウィンは『種の起源』においてアリストテレス同様ときに自然を主語に立て例えば「自然の業が人工の業よりはるかにすぐれているように、自然選択というものも人間の微力などではとても太刀打ちできない力である」(ch.3.P.45)と言う。ダーウィンは自然の擬人化についてこう解説している。「「自然」という言葉はつい擬人化して使われてしまうものだが、私の言う「自然」は、多くの自然の法則がもたらす総合的な作用とその結果を意味しているにすぎず、法則という言葉は、われわれが実際に確かめられる一連の事象 (by laws the sequence of events as ascertained by us) という意味にすぎない」(ch.4.p.58)。ここで「実際に確かめられる[原因と結果の]一連の事象」という表現にみじくも表されているように、彼はエルゴン次元における観察とその帰納的一般化として自然法則を理解している。問題はその法則がどれだけあるのか、またとりわけ目的因はどのように機能しているのかをアリストテレスはことさら探求したが、ダーウィン以降の生物学者たちは概してその点を正面から引き受けることなく、エルゴン次元における法則化を探求したように思われる。生物事象における自然の秩序正しさの探求に従事したアリストテレスが適応度における遺伝可能な変異の観察を通じて自然選択による進化の探求に従事する現代生物学者とどれだけ概念枠を共有するか判明ではない。一方は個体の発生を主に考察し、他方は集団において類縁関係にあった生物が多様化する系統発生を歴史的に考察する。これらのタイムスパンの相違のみならず、秩序と変化という大枠においては考察の対象さえ異なると言うことができる。ただし、生物事象は一つである以上、何らかの共約性もあるに違いない。

遺伝情報と形相

最初にアリストテレスの生物哲学が遺伝子の発見により再び脚光を浴びていることを確認したい。1950年代におけるDNAの二重螺旋の発見は分子生物学にとってその後の方向を定める大きな出来事であった。1969年にノーベ

ル医学賞を受賞した M. Delbrück はアリストテレスの生物学に触れこう述べている。「現代生物学の言語に直せば……形相原理は精子に蓄えられている情報である。受精後それは一つの予めプログラムされた仕方(a preprogrammed way)において読みとられる。読みとられたもの(the readout)はそれが働きかける質料を変更するが、それは蓄えられた情報を変更はしない、それは、本来的に言えば、完成作品の部分というものではない。換言すれば、ストックホルムのあの委員会は…… DNA に含意されている原理の発見としてアリストテレスを考慮すべきであると私は思う」¹³。

また E. Mayr は伝統的目的論的言明を「プログラム」という語により置き換えることによって正当化を試みた。彼はこのデルブリュック説を引用してこう述べている。「正当化なしにではなく語られてきたことは、アリストテレスの形相的原理の（それが働きかけるところの）質料からの分離は、遺伝的プログラム(genetic program)がそれに即して表現型(phenotype)のモデル化を制御するところの現代的概念からそれほど逸脱してはいない」¹⁴。この遺伝的プログラムという観点は目的因の自然主義化の一例であると言える。

確かに『動物発生論』第二巻四章において「自然は最初に心臓から出る二本の血管を設計した(hypergraphsen)」(740a28)と語られており、形相としての自然は素材のロゴスとして設計主体として描かれることがある。ここで「自然」によって、アリストテレスは運動があり静止があるところ、それを司る自体的な内的原理、根拠である形相と質料を理解している(192b20)。

Mayr が指摘する形相と質料の「分離」についてはより精密な考察を必要とする。見てきたように、私はロゴス上分離されるが、エルゴン上分離されない双方の関係にこそ注目したい。形相は事物の質料を統一する因果論的に基礎的な特徴としてのロゴスという存在者であり、その存在様式は完成である。変化の基体は常に質料の側にあり、それが突然変異であれ、種の進化であれ受動的に変化を蒙る。質料のロゴスである形相は少なくとも生成消滅過程を経ない。

生物次元において、これらの特徴を持つロゴスとしての形相と遺伝子の情報には或る親近性が指摘されることは道理ある。なお、「情報」という概念は、

「形相」が「形姿」という統合体の視点からアクセスされるように、鍵が鍵穴に入るのも一つの情報であるように、ただちに非物質的なものと理解することは誤りである。DNAの二重螺旋は合成体である。ただし、それがロゴスにより質料が秩序づけられ形成されていることを否定するものではない。アリストテレスにとってロゴス的な存在者は常にエルゴン（実働とその成果）において確認されるそのようなものとして解明が展開されている。これは進化生物学との関係づけの手掛かりとなる。例えば、適応度は秩序を前提することなしに語りえないし、個体の発生は生成というひとつの変化に他ならない。この視点から現代生物学の若干の見解に挑戦したい。

生命の力能の包括的理解の不可欠性

進化生物学者は生育条件のなかで生存に「有利」という表現を用いることにより生命の善性に同意したとしても、生物事象の説明に善の概念は不要であり、頻度や確率等統計的記述に還元されねばならないとするであろう。とはいえ、そこに生物事象の特有性を見落とすことにならないか問われうる。生者をも死者をも中立的に扱う統計的手法は生命の力というものを、それを扱うべき適切な次元において生命の力とその原因やその帰結との関連において適切に捉えることができないであろう。

彼らも因果性と力能の明確な理解を求められているという意味で、上述のアリストテレス的なアプローチは包括的理解に不可欠であると言える。そのことは、「力」、「力能」についての明確なロゴスなしに語られる生物理論は単にエルゴン上計測される物理的なエネルギーの移行としての力に初めから限定されることになることを含意している。「ロゴスの質料」(Phy.II9.200b8)があるところでは形相への言及により特定される「ロゴスの力能」についても一般的に語られうる。生命というエルゴンとその力、力能を特定し同定するものこそ目的因であり、目的因はそのエルゴンのロゴスとして実働しているというアリストテレスの立場から応答したい。

彼は、先述のように、目的因について行為主体モデルのように、細胞であれ生体であれ善に対する感受性に訴える擬人的な理解を提示しているわけで

はない。彼はさらに目的因を単に reverse engineering に見られるように発見法として用いる反省概念でもなく、また機能主義者のように始動因に還元させることもなく、目的因の真正な因果論的役割を探求している。ここでは、現代アポリアとされている事態に彼が既に幾つか応答していたこと、そして現代に欠落している視点を提示していることを指摘したい。

彼の質料形相論そして力能完成論は遺伝的プログラムに適用されるだけではない。物理的なミクロな次元においても適用されうる。W. ハイゼンベルクは素粒子理論を存在論に対応させて言う。「もしわれらがこの事情をアリストテレスの質料と形相の概念と比較すれば、われらは彼の質料は、単なる「ポテンティア」にすぎないが、これはエネルギーの概念に比較されるべきものである。つまりエネルギーは素粒子が作られる時、形相を得ることによって「現実〔完成：千葉註〕」のものとなる」¹⁵。

これはアリストテレス的にはそれ自身不定な第一質料が何らかの規定性と言える熱冷乾湿により地水火風の根源物質を形成することに類比的である。ただし、四元素は根源的な基体（質料）としてそれぞれ土は下方に向かうなどの「基体に自体的に属する」ところの「衝動 (*hormē*)」(192b18)を持つものとして形相とは独立に語られる。生物事象において「奇形 (*terata*)」は「形相的自然が質料的自然を制御しない」(770b17)さいに生じるが、質料の独自の非目的的な力の源泉がこの衝動である。突然変異もこの質料の変異として理解されよう。このエルゴンに対して、対応するロゴスが成立するとき、そこに新たな秩序が見出される。もしあらゆる存在者はミクロからマクロに至るまでこの自然物に内在するこれらの存在の原理により包摂的に構成されているならば、生物事象の物理的事象への還元とは別の次元における包摂性の理論が構築されていることが確認できる。

生物事象は物理事象に還元されるという主張はもとより、物理事象に付随する (*supervene*) という主張も、より包括的な質料形相論のもとに捉え直されるとき、生物事象の特有性としての生成のゴールが善であるという想定は防御しやすくなることは疑いえない。彼の質料形相論そして四原因論において、生物事象の特有性として生命が善であるという物理学では扱いえない対

象をそれ自身として摘出するべく、存在の根拠としての目的因が導入される。

5.2 目的因の自然化とトートロジー問題

条件的必然性と端的必然性

誰もが生命事象に生存と繁殖という目的論的な事象を認めており、近年では目的因の自然化が提示され進化論との調停が模索されている。大塚淳は J. Haldane の「目的論は生物学の情婦のようなものだ。彼は彼女なしでは生きられないのに、彼女とともに公衆の面前に現れようとしない」を引用し、「「生きられない」のは、目的論的説明が進化生物学における主要問題、すなわち生物形質がどのような効果のために選択され、進化してきたのか、という問題への解答を与えるからである」と説明する¹⁶。

E. Sober は「目的論の自然化」の節において言う、「ダーウィンを科学的な唯物論の主張を推し進めた革新者と見做すのは正しい。彼は、生物学から目的論的な考えを放逐したのではない。むしろ彼がなしたことは、どうしたら目的論的な考えを自然主義的な枠組みのなかで理解できるかを示すことであった」¹⁷。これはアリストテレスの主張する目的論的理解と始動因および質料因に基づく必然性による説明の両立性の議論にとって示唆を与えるものである。彼は既に目的論的な議論と自然主義的な議論の統一理論を提示していた (*Phys.* II 8-9)。ここではそれを簡潔に確認したい。

自然主義的理解のトートロジー問題が指摘されている。Sober によればそれは「誰が生き残るのか」の問いに「適応度 (fitness) の高い者である」と応答するとして、「誰がその適応度において高いのか」の問いに「生き残る者である」と応答する類のものとされる。目的は進化論では自然選択の結果、つまり、適応として説明されるが、これは目的の自然化である。西脇与作が「適応度と子孫の数の間の必然的な関係を見出さなければ、二つの関係は単なる偶然か同語反復にすぎなくなってしまう」と言うとき、ロゴスとエルゴンの自体的、内的関係を問うている¹⁸。

自然選択とアリストテレスにおける発生の目的論的説明は考慮するタイムスパンが全く異なるが、彼は発生の目的論的文脈における或る種のトートロ

ジー問題を承知しており、既に応答していた。アリストテレスは見てきたように目的因の存在証明の文脈において、適応のゴールが初めから目的因（トフーヘネカ）のことであるとすれば、議論全体が論点先取を犯すことになることを自覚している。彼はエルゴン上、生成過程の観察を通じて「より先のもの」と「続くもの」を確定することにより、生成次元上「テロス（ゴール、終局）」を理解している。他方、目的因は「何かのため」すなわち「ゴールのため」と表現されるロゴスにより把握されるものである。テロスと目的は或る意味で同一のものであるが、エルゴン次元とロゴス次元としてアクセスを異にする。エルゴン上最後に実現するものが、ロゴス上目的であり、ロゴス上「ロゴスの質料」より先のものと後のものを秩序づける。それ故に、ゴールをエルゴン上でだけ論じる立場に不可避であるこの種のトートロジーに陥ることはない。

エルゴン上の不可分離とロゴス上の分離はさらに未来に生起するゴールがなぜ発生 of 過程を制御できるのか、或いは進化論的には適応の過程と産物を制御できるのかについても一つの理由を提供できるように思われる。これは、今日争われている問題について、はるか以前に目的論的理解と根源物質である質料の持つ「衝動」としての物理的な力を始動因が現実化する必然性による説明は両立的であるという主張が打ち立てられていたことを示している。彼なら一方で、ロゴス上「生存のために骨や肉等質料はこの二足と両手を備えた胴体とその上に重い頭脳を載せつつ直立した姿勢をしていなければならない」と「条件的必然性」を語り、他方でエルゴンの観察を介して「根源物質の熱は肉を軟らかくし土は骨を形成しかくして必然的にこの二足直立の形態を形成しその結果生きている」というテロスに至る「連続性と量とに即して (*kata to suneches kai poson*)」 (*Met.V4.1014b25*) 「生成のゴール (*to telos tēs geneseōs*)」 (*1015a11*) の「端的必然性」を記述するであろう。

アリストテレスは二種類の必然性について言う、「その時必然性は条件的であるが、その必然性はゴールが必然である仕方 (*hōs telos*) であるのではない。何故なら [後者の理由として、ゴールの必然性があるのは] 必然性は質料に存するからであり、[前者の理由として、必然性が条件的であるのは] それの

ためのそれはロゴス（説明言表）に存するからである」（*Phy.* II9.200a13-15）。さらに彼は言う、「従って明らかに自然物における必然性は質料として語られるところのもの（*to hōs hulē legomenon*）でありまたその運動である。また自然学者は双方の根拠を述べねばならないが、何かのためにのほうが一層根拠である。何故ならそれは質料の根拠であるが、質料はゴールの根拠ではないからである。つまりゴールは「何かが」それのためのそれであり、技術によるものと同様に、定義と説明言表から「明らかにされるところ」の原理なのである」（200a30-b1）。このように彼はロゴスがエルゴンを統御する仕方についてロゴス上目的因を分離しうるが、エルゴン上分離できないものとして明らかにしている。

ここには生きている者とは環境に適応した者だというたぐいのトートロジー問題は生じない。進化生物学者のアポリアはロゴスのエルゴンに対する内在とそこからのロゴス上の抽出をめぐる因果性についての明晰な思考を持たないが故に、頻度や確率等の統計的処理に逃げ込んでしまっているように思われる。

累積的自然選択の非ランダム性のアポリア

さらに進化生物学は自然選択がランダム（任意的）ではないという理解においてアポリアを抱えているように見える。ダーウィンは「自然選択」を説明して言う。「或る種の個体に生じた変異が、他の生物とのあいだやそれ自身の生息条件とのあいだに生じる際限なく複雑な関係のなかで、その個体にとって少しでも有利であれば、その変異は当の個体を残す方向に働くことになるだろうし、ふつうは子孫にも受け継がれていくだろう」（ch.3.p.45）。人類等生物は一步一步漸進的に累積的に変化した系列の帰結であると考えられている。R. Dawkins は『盲目の時計職人』でランダムではない「累積的選択（cumulative selection）の力を示すこと」を目標に掲げる¹⁹。

私には進化論者の自然選択の非ランダム性の「力」についての理解そして「選択」の理解が不明瞭であると思われる。ランダムとは公平な宝くじは壺からランダムに引くことが必要であり、当選のチャンス、確率は同じでなけれ

ばならない。それに対し累積的選択は単独段階選択 (single step selection) と異なり一回選別されれば終わりではなく、一回の選別の結果が次の篩い分け、選別に組み込まれる。これは選択がそのゴールにおいて獲得する形姿 (shape)、形質 (trait, character) の適応度においてランダムではないということであり、ゴールを密輸入することなしに、この非任意性の主張はなしえないように思える。

Dawkins と Sober は猿の「ハムレット」のタイプ打ちや、自転車の鍵で用いられる「組み合わせ錠」の比喻で累積的選択の非ランダム性を例示する。錠のそれぞれの窓に 0～9 の十個の数字が表示されるが、ダイヤルが三桁あるとすれば 10^3 の組み合わせがある。これが等しい確率のもとダイヤルが回されるのではなく、ターゲットにヒットしたとき、錠前はカチッという音とともに固定されるという比喻で説明される。Sober は「表示窓に現れた一文字 [数] がたまたま標的のメッセージの文字 [数] と一致すれば、そのダイヤルは動かなくなると想定する」と述べ、対応生物事象の何らかの生理的反応を要請する (p.75)。この想定について「標的と一致する」ことを「変異が生じる生物体にとって有利である」と説明している。これは先のダーウィンの「有利であれば、その変異は残る」の言い換えである。彼は言う。「変異が生じる時、それが「標的と一致する」か否か関係ない。それに対し、変異の保持 (生じた変異間に働く自然選択) は別の事柄である。生じた変異体がその場に留まる力は、大小ある。……変異間に働く自然選択はランダムではない」(p.75)。何か行為主体モデルに訴えて生物は自己と環境の変化のなかで自己維持する力能を持ちそして生き延びる方策を見出していると言いたくなる。一方ではこの擬人化を回避した説明を展開しており、それは例えば、この「力」を統計的に処理することである。

Sober は Leontin を引用して「自然選択による進化は適応度における遺伝可能な変異が存在することを必要とする」と言う。ここで「遺伝可能性」は「統計的な概念である」とされる (p.22)。伝統的には「可能性」は論理次元を含んだ「力能」の一種であり、何らかの現実性や実働との関連において力の移行を考察するが、生物学者は力を頻度や確率において統計的に処理する。

それにより有利や善に対する訴えを回避している。

この事態の背後に、ひとつには科学技術の中立性という神話がある。医術はそれ自身として中立的であり癒しにも殺しにも用いられるという理解が古来主張された。しかし、技術の力能はその目的概念にロゴス上依存する文脈依存的なものである。力能はゴールの概念なしには不定であり、メスで真っ直ぐ切る所謂「技術」に関し、その力能はゴールである健康に方向づけられることにより「何の」力能であるか初めて同定される。技術の中立性の主張はゴールに至るまでのあらゆる連関を無視した、メスのうまい使い手は危害を加えるのもうまいという文脈無視の主張にすぎない。

累積的選択における遺伝可能性について統計的にしか処理し得ないとするなら、遺伝「可能」という力能をいかに確定するかアポリアになる (Sober, p. 22)。今・ここで観測される現実的な力能の発現について進化生物学は一切言及しないのであろうか。「適応度」や「適応」がすでにゴールへの適応を含意しており、適応の過程とその産物をゴールへの言及なしに特定できないはずである。明確なロゴスを持つかが問われている。Fischer は自然選択を統計的に説明して「集団内に適応度の遺伝的分散が存在するとき、その分散の大きさに比例した速さで集団の平均適応度が増大する」(Sober, p.441) と言う。これはあまりに一般的な説明であり、経済現象にも適用される(「遺伝的分散」を「複製可能な商品の選好上の分散」とし「適応度」を「ヒット商品」に変更すれば、商品の売れ筋の選択にも適用される)。数学的対応が必然的に抱える一般性であり、生物特有の現実を説明していると理解することは困難である。生物事象をその固有の類で説明するにはやはり生命と生命原理との様相次元における関連づけが求められ、ロゴスとエルゴンの密接な相補性が求められる。

Dawkins は猿のタイプ打ちの事例を実質上否定している。「猿／シェークスピアモデルは、単独段階選択と累積的選択の区別を説明するには有効であるが、重要な面で誤解を招きやすい。その一つは、選抜「育種」のどの世代においても、その突然変異を起こした「子孫」句がはるかな理想の目標である ME THINKS IT IS LIKE A WEASEL. という文との類似性を規準にし

て判断されているということだ。生命というのはそんなものではない。……これ〔一見長期的な目的達成〕は常に数多くの世代が短期的な選択を経たことによって起こった付随的な結果なのだ。累積的自然選択という「時計職人」は、未来について盲目であり、長期の目的など何も持っていない」(p.95)。彼が「長期的な目的」否定する時、「短期的」な目的は認めるのか。遺伝子の自己複製は目的的であるのか。長期は短期的選択の「付随的な」結果であるとされるが、期間をどこで分けるのか。「再帰的プログラミング」(p.97)により単純作業の繰り返しだとして、実現されるものが生存に有利・善であることを偶然に帰するのか。善と遺伝子の複製のあいだに付帶的偶然的関係しかないのか。付随性とは偶然性のことなのか、それとも短期的な結果が変われば、長期的な結果が変わるという必要条件の提示だけなのか。それとも必然性ないし生起の十分条件を認めるのか、等ただちに問われる。再帰的プログラミングの短期的な指令があるにしても、生物体のエルゴン（産物）の長期的な蓄積の秩序正しきの説明が免責されるわけではない。

彼らは錠前等の比喩を諦め、自然選択の有利さを新たに説明しなければならない。有利さによる非ランダム性の説明は「途上のトートロジー問題」とでも呼ぶべき、「累積された遺伝子は何か」、「生存に有利なものである」、逆に「有利なものとは何か」、「累積された遺伝子である」という類の難問を抱えている。

自然選択を軸にそえる進化論が「自律的 (autonomous)」²⁰ であるためには、進化の力能とされる「生存力」と「繁殖力」についても様相的な理解つまり力能の実働についての明確な理論が不可欠である。Sober は言う、「自然選択が起こるのは、生物体が生存力において異なるとき、そして繁殖力において異なる時である」(p.116)。この主張をトートロジーに陥らせないためには力能とその完成の一性のロゴスと帰納的なその実働についての明確な理論を要求している。ランダムではない適応の過程と産物についても同様である。

このように、アリストテレスにおいてはロゴスとエルゴンの相補的展開は生物事象の解明においても不可欠である。そして進化生物学においても求められているのはこれらの分節と総合である。生物事象における自然の秩序正

しきの探求に従事したアリストテレスが、適応度における遺伝可能な変異の観察を通じて自然選択による進化の探求に従事する現代生物学者と、どれだけ概念枠を共有するか判明ではない。一方は個体の発生を主に考察し、他方は集団において類縁関係にあった生物が多様化する系統発生を歴史的に考察する。これらのタイムスパンの相違のみならず、秩序と変化という大枠においては考察の対象さえ異なると言うことができる。ただし、生物事象は一つである以上、何らかの共約性もあるに違いない。進化生物学者がアリストテレスのロゴスとエルゴンの相補的な展開に同意するなら、そのとき彼らは不可視なロゴスの実在を承認するという大きな代償を支払うことになる。しかし、文化的障壁が乗り越えられ、ただ真理のみが求められることを望む。

続いて、ロゴスとエルゴンの相補的な展開が集約的な仕方で見出される魂の定義の形成と魂の実働の様相的な理解を試みている『魂論』第二巻一章を分析する。そこでは生きている統合体は質料と形相が分離されずに、形相(魂)の実働と統合体に内属する待機力能が生きている統合的全体において類比的に理解されることおよびロゴス上の分離が同名異義的なものであることの対比により、これまでの相補的な展開の現場を押さえることになるであろう。

第四章 魂と物体の分離と不分離をめぐる相補的展開——ロゴス上の分離に伴う同名異義を克服するエルゴン——

4.1 『魂論』第二巻一章の私訳

最初に『魂論』第二巻一章の翻訳を挙げ、この章の順次的な解釈を展開することによりロゴスとエルゴンの相補的アプローチがいかなるものであるかを明らかにしたい。アリストテレスは『魂論』第二巻一章において自らの存在論的枠組みのなかで諸概念を駆使しつつ「魂が何であるか」の定義形成に従事する。この章は『形而上学』、『自然学』等で展開されている存在論および自然学を前提にして論じられており、その背景的理解なしには理解できない凝縮した議論が展開されている。魂と物体の関係は「自然」と呼ばれる自然物に内在する運動と静止の始原である形相と質料と、それに対応する存在

の在り方（様相）のもとに考察される。第二巻一章の魂が何であるかの議論は「要約的に、見取り図が描かれた」（413a9）のものであり、この種の多くの基礎的な議論ならびに『魂論』の第二巻一章以降の各論の展開の理解に基づいて始めて明確な理解に到達しうるものである。私の理解では、魂の定義の提示において、アリストテレスは魂と物体の離存、不離存をめぐる [L] ロゴスと [E] エルゴンについて [L] ロゴスと [E] エルゴン双方のアプローチに交互に従事しつつ議論を展開する。双方には非対称性がありつつ、そのことの故に相補的であることを確認したい。魂の定義は、普遍的かつ無時間的なロゴス次元において [L] 力能 (*dunamis*) と完成 (*entelecheia*) のペアによる説明言表の形成のもとに形成される (cf. *Met.* IX1.1045b27-46a4)。

[a] [412a3] 先行者たちにより魂について提示されたものどもに関しては語られたこととしよう。しかしわれらは再び初めから、(A) 魂とは何であるかそして (B) その最も共通な説明言表は何であるかを特定すべく再び取り組み。[b] 確かに、われらは存在するものどもの或る一つの類を実体であると語るが、その実体のうち、かたや、それ自体に即して「或るこれ」ではないものを「質料」として、他方、それに即して現に [今・ここで] 「或るこれ」と語られるところの「形姿」そして「形相」を、そして第三のもの「それらに基づくもの [統合体]」を、実体であると語る。[412a10] だが、かたや質料は力能であり、形相は完成である、そしてこれ [形相] は二つの文脈において、かたや [L] 「知識」がそうあるものとして、他方 [E] 「知識を観想すること」がそうあるものとして語られる。

[c] しかしながら、物体がそしてそのなかでも自然物体がとりわけ実体であるとひとびとには思われている。なぜなら、これらは他のものどもの始原だからである。だが、自然物体のうち或るものどもは生命を持ち、他のものどもは持たない。ところで、われらはそれ自身による栄養摂取と成長そして減衰を「生命」と語る。従って、生命に与るすべての自然的な物体は実体であろう、合成体として (*hōs sunthetē*) という仕方の実体ではあるが。しかし、次のような物体、即ち生命を持っている物体 (*sōma*) も存在するので、物体

は魂 (*phsuchē*) ではないであろう。なぜなら、物体は基体に即してあるものどもには属さず、むしろ、それは基体そして質料としてあるからである。

[d] [412a20] かくして、必然的なことは、魂が力能において生命を持つ自然物体の形相としての実体であることである。しかし、その「形相・」実体は完成である。かくして、魂はこのような物体の完成である。しかし、これ「完成」は二つの文脈において語られる、かたや (C1) [L] 「知識」がそうあるものとして、他方 (C2) [E] 「知識を観想すること」がそうあるものとして。かくして魂は (C1) 知識がそうであるようにあること明らかである。というのも、魂が内属することにおいて、睡眠そして覚醒が存在し、かたや覚醒は知識を観想することに類比的であり、睡眠は「知識を」所有することかつ実働しないことに類比的であるが、同じものについて知識は生成上「知識を観想すること」より先だからである。それ故に、(A) 魂は力能において生命を持つ自然物体の第一の完成である。

[412b1] ところで、「このようなもの」は道具的なものであろう。植物の部分も、まったく単純なものであるが、道具である、例えば葉は果実のさやの覆いであり、さやは果実の覆いである。ところで、根は口に「道具として」類比的である、というのも双方とも栄養を摂取するからである。もし、今や、「感覚魂等」何かすべての魂について共通のことを語らねばならないとすれば、(B) 魂は道具的な自然物体の第一の完成であるというものとなろう。

[e] それ「道具的なものの完成」故に、魂と物体は一であるかどうかを探究する必要はない、それはちょうど蜜蠟とその印型が一であるか、また一般的にそれぞれの質料と質料がその質料であるところのものが一であるかを探究する必要がないように。というのも、「一」そして「在ること」は「力能等」複数の仕方で語られるので、統帥的な仕方でそう語られるものが完成だからである。

[f] [412b10] [L] かくして、(A) (B) 魂は何であるかが普遍的に語られた。というのも、それはロゴスに即した実体だからである。それは、だが、まさに道具のなかの或るものが、例えば斧が、或る自然物体であった場合にそうであるように、このような物体であることは何であったか「本質」であ

る。というのも、かたや「斧であること」が「そのものの実体」であつたであろうからであり、そしてそれが魂であつたであろうからである。だが、これ〔実体〕が分離されたならば、それはもはや斧ではなかつたであろう、同名異義的にそうだということを除いては。しかし、現にそれは斧である。なぜなら、魂はそのような〔人工〕物体の本質でもロゴス（・説明言表）でもないからであり、そうではなく自らのうちに運動と静止の始原を持つそのような自然物体のそれだからである。

[g] だが、語られたことを諸部分についても理論的に考察しなければならない。というのももし目が動物であつたなら、視覚はそのものの魂であつたであろうからである。というのもこれ〔視覚〕は目のロゴスに即した実体だからである。[412b20]しかし、視覚が除去されるならば、目は視覚の質料であり目ではない、まさに石製や書かれた目のように同名異義というのでなければ。

[h] [E] 今や、部分的なものを[・][・][・][・]生きている統合的物体の上で把握しなければならない。というのも、部分 [eg. 視覚] が部分 [目] に対してある仕方と同じように、統合的感覚は可感覚的な統合的物体〔個体〕に対し、このようなもの〔生きている統合的物体〕である限りにおいて、類比を持つからである。だが、魂を失ってしまったものではなく、魂を持っているもの〔統合体〕が力能にあって、その結果〔今・ここで〕生きている。しかしながら、種子と種子の器〔果実〕は〔未完の〕力能においてそのような〔受粉（精）を介して魂を持つ〕物体である。かくして、かたや (C2) [E] 切断そして視がそうであるように、覚醒はこの〔生きているという〕仕方で完成である、[413a1] 他方、(C1) [L] 視覚と道具の能がそうであるように、魂は〔ロゴスに即して〕そう〔完成〕である。他方、物体は〔ロゴス上〕力能にあるものであるが、しかし、ちょうど〔ロゴス上〕瞳と視覚が目であるように、かしこでは魂と物体が生物である。[j] かくして、魂が物体から〔エルゴン上〕離れているものではないこと、あるいはもし魂が自然本性上可分割的なものであるなら、その或る諸部分は離れているものではないこと、不明瞭ではない。というのも、或るものどもの部分それら自身の完成があるからである。[k]

しかしながら、或るものどもに関しては少なくとも、いかなる物体の完成でもあらぬことの故に「離れてあることを」何も妨げない。しかしなお、魂は船の舵取り船員のような仕方です「寄航後上陸するように」物体の完成であるかは不明瞭である。[413a10]かくして、これにより要約的に魂について規定されたものとせよそして見取り図が描かれたものとせよ（Bekker 版 Text 採用。[a]-[k] は本文中における引用箇所番号）。

4.2 魂の定義の形成と身体を今・ここで生かしている魂を捉える様相的 枠組み

不可視な魂を捉える様相存在論

この章はロゴスによる魂と物体の分節とエルゴン上の両者の不分離はどのように理解されねばならないかを明らかにしている。この箇所は魂の何であるかそしていかにあるかの探求であるが、それはアリストテレス自身が「要約的」と述べているようにそれまでに構築された存在論を要約的に駆使しつつ遂行される。

この章においては力能と完成による魂の定義は存在論的な関係概念の普遍的な次元において遂行されるが、それとは別に、「クレオンやカリ阿斯」等そこにおいてのみ生成消滅が帰属する可感覚的事物「個体 (*to kath'ekaston*)」が語られる文脈がある (eg.43a20, 1042a30, 1058b7)。これは様相存在論のもとにおいては、[E] 力能 (*dunamis*) とその実働 (*energeia*) のペアによる今・この働き (エルゴン) であり、今・この具体的な観察がエルゴン次元においてその認識をもたらす (cf.1045b35)。これは質料と形相の「統合体 (*to sunolon*)」であり、力能の今・この発現である実働即ち「働きにおいてあること (being at-work, am Werk sein)」は「ある」の一つの存在様式として存在論的に規定される (185b29, 1017a29, cf.3.3)。

私は力能と実働の組を基本的に魂の今・この観察による個体の把握を遂行する[E] エルゴン分析とし、力能と完成の組をロゴス次元における普遍的[L] ロゴス分析という判別のもとにあるとして議論を展開してきた。ここでは同名異義原理の適用によりエルゴン次元とロゴス次元は非対称性を持ちつ

つ媒介されることを明らかにし、魂と物体の関係の理解は相補的展開のなかで遂行されることを見る。同名異義原理は「この身体」が生きている人の身体と死んだ身体（ムクロ）について同じ名前と呼ばれても異なる意味を持つという主張である。ムクロの場合当然指示詞「これ」は統合体とその内在原理である形相まで届くことはない。魂は存在していないからである。他方、アリストテレスは生きている人間に対しロゴスアプローチによる形相のロゴス上の分離を説明するために、同名異義原理を積極的に人工物との類比に用いていることを明らかにする。人工物はその本質が製作者の頭脳のロゴスであり、素材にその都度適用されるという仕方から分節されている。生きている生物における魂と物体のロゴス上の分離はそれと類比的でありつつ、人工物と異なりエルゴン上の分離は単に死をもたらしことが確認される。

定義、本質そして形式言論構築術

アリストテレスは第二巻一章において[a]「(A)魂は何であるかそして(B)魂の最も共通な説明言表は何であるかを規定すること」をめざす(412a5)。この二つの企てにおいて、魂の何であるかが語られる(A)一番手前かつ基本的な定義と(B)あらゆる魂の部分に対応する最も共通する説明言表が提出される。定義(A)は[L]力能と完成の組による説明言表「力能において生命を持つ自然物体の第一の完成」である(412a20)。魂は、生命を持つことのできる自然物体であること(身体でありうること)は何であったか(本質)を説明するものであり、ロゴス上そこにおいて「統帥的に一かつ在ること」が語られる「(第一の)完成」として提示され力能にあるものから分離される(412b8, 11)。

実際に生きていることは今・この身体をもった存在者の実働に他ならず、それが外的環境の妨げにより実現されないこともある。普遍的な魂の「何であるか」の定義は「第一の」完成として生きうるもののロゴスとして、「第一の」という限定を付して、その具体的な外的環境に左右される実働においてある完成から分節される。これはロゴス次元を析出する試みである。他方、定義(B)「魂は道具的な自然物体の第一の完成である」は魂の諸部分にもつ

まり生命の根拠である「栄養摂取魂」だけではなく、感覚魂等にも妥当する最も一般的な魂の説明言表である (cf.II4.415a22-25)。

この定義 (A) (B) に向かう議論を追跡しつつ、論述を展開するが、基礎的な理解を確認しておこう。名前 'F' の説明言表がその名前に述べ立てられ「何であるか」を意味表示することを介して本質を意味表示する説明言表 (定義形成句 (*horos*)) が名前に対応する事物 F の定義を形成する。「定義形成句」が意味表示する「本質」は「然りまたは否」のみによる応答を可能にする弁証術の方法の構築のなかで「何であるか？」の問いを追放し、その代わりにその可能な四つの応答のなかで成功したケースを語り方の分析として形式的に提示したものである。彼は定義形成をこの「いかに語るべきか」という「形式言論構築術 (*logikē*)」を基礎にそえ、自然の観察に基づく質料形相論と存在者を存在として考察する様相存在論の駆使のなかで遂行する。魂の定義が得られるとき、それは魂が何であるかそしていかにあるかが、ロゴス次元において、知られると言うことができる。

「完成」についても現実世界に対する参照なしに、論理法則や規範的な語りだけから幾つかの存在主張がなされることを今後確認することになるであろう。しかし、「完成はいかにあるか」を問うことはできない。一方、本質は形式的であれ存在者のプレースホルダーである限り、「いかにあるか」は問われるが、完成は「一かつ在ること」がそこにおいて「統帥的に語られる」存在様式つまり或る「いかにあるか」を予め含意したものとして提示されているからである (412b9)。探求の視点からすれば、それが語られるとき、それ以上探求が遂行されえない究極的な限界点であると言える。実際、或る働きにおいてあること (実働) が完成であるか否かは「この実働には現在形と現在完了形の語りが適用されるか」というロギコスな時制テストを課すことにより判別される。ただそのことは、本質がそうであるように、エルゴン上具体的な実働の観察により完成においてあることが確認、検証されることを妨げない。

4.3 「或るこれ」による基体と形相の二重の指示

彼は自らの存在論の核心を要約的に提示して言う、

[b] 確かに、われらは存在するものどもの或る一つの類を実体であると語るが、その一方のもの、(1) それ自体に即して「或るこれ」ではないもの (*ho kath' auto*) を「質料」として、(2) 他方のもの形姿と形相を、その形姿それ自身に即して現に [今・ここで] 「或るこれ」が語られるところの実体であると語る。そして (3) 「それらに基づくもの [統合体]」が第三のものである。[412a10] だが、かたや (1) 質料は力能であり、(2) 形相は完成である、そしてこれ [形相] は二つの文脈において、かたや [L] 「知識」がそうあるものとして、他方 [E] 「知識を観想すること」がそうあるものとして語られる (412a6-10)。

この箇所理解の補助として、やはり魂のような「ロゴスに即した実体」のロゴス上の分離が探求課題となっている『形而上学』第八巻一章の平行箇所を挙げることができる。先に第三章 3.1 「「これ」という指示行為 (E) により媒介される「形姿」と「形相」」において『形而上学』VIII1 の平行箇所を分析した (1042a26-32)。

この世界を占める存在者のうち、基体性、「或るこれ」という指示性さらに離存性条件を満たすものは「第一に在り、端的に在る」自律的な存在者である実体の類にいられる (1028a30, 1029a28)。ここ第二巻一章でそれを満たす実体の三種類が提示されているが、それ自身として語るなら、基に置かれている何ものかとして基体性条件を満たす「質料」は一種類の実体である。彼は「基体」を特徴づけて言う、「基体はそれについて別のものが語られ、かのものそれ自身はもはや別の基体に即して語られないものである」 (1028b36)。基体はそのつどの述定において、主語となり述語とならないものであり、ひとが何かを述べ立てるときに、前もってそこにあることが求められている存在者が実体の基体性条件を満たす。ただ、これは実体の一条件にすぎないが、質料がこの条件を満たす。「というのも質料が実体でなければ、別の実体が逃げ去ってしまうからである」 (1029a11)。

可感覚の実体の場合に基に置かれる素材がなければいかなるものも形成さ

れない。地水火風の根底にある「第一質料」と伝統的に呼ばれる根源的構成要素に見られるように、それらは何らかの力能を持つ。それが他の原理により秩序づけられるとき、或る規定性を持つにいたる関係概念である。ただ、質料はそれ自身としては他のものの述語になることがない故に、述定の範疇に即して何も有意義な言明を形成しないだけではなく、自らについても何らこの基体という特徴以外の規定性を持たない。「質料はそれ自身に即して、何であるかもどれほどかも、さらにそれらに即して存在が規定される別の何ものも語られることはない」(1029a20)。それは「ちょうど否定文」と同じであり、「SはPでない」において「Pでない」がSの何であるかもどれほどかも明らかにしないのと同様に、質料は基に置かれまた最終的な主語に置かれる「究極的なもの」として「自らに即して何であるかでもどれほどかでも、[述定の]別の何ものでもない」(1029a24)。質料は述語となり他の事物について他己述定を形成することもなければ、主語として他のものによるいかなる規定も受けない。

質料はこのように、「それ自身に即して或るこれではない」即ち、現場において「これ」という指示行為がそれには届かないものである。質料はそれ自身「不定なもの」(1037a27)、「不可知なもの」(1036a9)であることの故に形相との関係に置かれることを必要とし、「形相と[形相と質料]双方に基づくもの[統合体]は質料より一層実体であると考えられている」(1029a29)。

彼は質料が形相との関係においてのみ規定性を持つとするが、それをロゴス上の離存性と場所上、数上の非離存性において説明する。「より優れた理解の選択肢は、質料はあらゆる場合に非離存的(*achōriston*)であるとして、そしてそれ自身数の上では一であるが、ロゴス上一ではないものとして理解することである。……むしろ質料は、点や線がその末端であるところのかのものであり、様態なしにはありえず、また形姿なしでもありえないものである」(*Gen. Cor. I*5.320b1-17)。質料はエルゴン上形姿と非分離であり一なるものであり、ロゴス上形姿に対応する形相にその規定性を依存する。なお「ロゴス上一でない」とは、一性が力能と完成に分節されそのロゴスが完成に依存することを示していると思われる。また同名異義原理の適用により、エル

ゴン上非離存的な質料とロゴス上離存された質料のロゴスの意味上の相違をも指していると考えられる。

指示において対比されるのは、生成の最終段階で獲得される統合体の「形姿」とそれにロゴス上対応する形相である。彼は質料とは別の実体について「形姿と形相、その形姿それ自身に即して現に(*ede*: 今・ここで)「或るこれ」が語られる」と特徴づけ、また「ロゴス (説明言表により指示されるもの)と形姿が基体であり、これは或るこれ [と指示されるもの] であるが、説明言表 (ロゴス) 上離存的」と特徴づける (1042a26-30)。質料がせいぜい力能において「これ」と指示されるものであるのに対し、形姿はそれ自身、さらにそれに即して統合体が「これ」と指示される。形姿のこの特徴の背後に「ロゴス」の規定性を担う形相が対応するものとして提示されている。形相は「ロゴスに即した実体」と語られるが、それは形姿が生成の終局において観察されるのに対し、定義という一なる事物の説明言表の形成を通じて指示される存在者ロゴスであり、エルゴン上質料から分離されないが、ロゴス上質料部分から分節され「ロゴス上離存的」であるとされる実体である。

質料との関係概念である形相そしてエルゴン次元における形姿により、ロゴス次元において内在する「形相」にまで「或るこれ」という指示が成立する。「現に (*ede*)」により今・ここにおける指示の言語行為の現場が示されている。この言語行為を今・この感覚や叡知による魂の認知的行為と共に、ロゴスの形成との対比において「エルゴン」と呼び、またその今・ここにおいて具体的な認識や行為が遂行される場を「エルゴン次元」と呼んできた。一般的なロゴスにより形成されるものは普遍的かつ無時間的なものであり、それが遂行される場を「ロゴス次元」と呼んできた。

今・ここで「これ」と指示される実体の指示機能は形相の内在性故に二重であるとされる (1037a7-10)。この指示「これ」に基づく議論を「二重の指示 (double reference)」と呼び、「何であるか」の説明言表の主語と述語のあいだの意味表示を形成する述定を介した世界への意味表示 [指示] を「二様の意味表示 (dual signification)」から判別する (cf. *Top.* I9)。「或るこれ」という表現において「或る」が付加されることにより、「これ」という指示行為

における今・ここの具体的な指示の現場を括弧にいれ、言わば「そこ・その時」をも含めエルゴンの文脈を一般的に受け止め、指示されうる個体の規定性を一般的に表現している。換言すれば、「或るこれ(= *tode ti*)」とは「これ」と指示される特定の或るもの」のことである。いかなる文脈においても、形相が質料に内在し統合体を形成する事物において、「これ」という指示が成立する。「或るこれ」はまさにこの今・ここの現場ではなく個体実体を一般的な仕方で指示している(他の範疇存在者である「或る性質(*poion ti*)」(1030b12)も同様である)。この指示は実体にのみ成立し、普遍者「このようなもの」と対比されている。例えば、色見本を見て「これ」と指示し「この色と同じ白色のウエディングドレスが着たい」という発話において、実質的には「これ」は性質である白が帰属する基体としての台紙のみが指示される。「この色と同じ色」という表現に見られるように、複数ある白は正しくは「このような(*toionde, toiūto*)」色と語られねばならなかった(VII13.1039a2, cf. 1033b23, *De An.*434a18)。かくして、ログコースには「カリアスの魂はいかに語られるべきか」という規範的な語り方の問いには、「これ」という指示詞により語られる」と応答されよう。

それ自身不定な質料は形相の規定性を媒介にしてこの今・ここの個体を構成する規定性を得る。かくして、可感的な個体に対する「これ」という言語実践は「二重に意味表示すること」の故にログス次元とエルゴン次元を媒介するものとなる。ログスが実体としてある今・ここのエルゴンに内在することを示すことができる。彼はエルゴン次元に内在するログスをこう説明する。「このひとやあのひとがそこから構成されている肉や骨は異なる。統合体は一方異なるが、他方種においては異ならない、なぜならログス(説明言表)には反対対立は存在しないからである。しかし、これは[エルゴンにおいてある]最終の不可分割者(*to eschaton atomon*)である。カリアスは質料を伴ったログスである」(XIV9.1058b7-11)。反対性質を受け付けられないログスは生成消滅過程を経ることはない。統合体このカリアスは質料と形相が不可分割的なエルゴン次元においてあり生成しまた消滅する。彼は言う、「明らかに、形相としてないし実体として語られるものは生成しないが、これ[実体]に

即して語られる統合体 (*sunolos*) が生成する」(VII8.1033b16-18)。

そしてこの種の可感覚的事物とロゴスはこう対比され [L] ロゴスと [E] エルゴンの相補性を改めて確認する。可感覚的事物 (*aisthēton*) については [L] 定義が存在せず, [E] 叡知作用や感覚により知られが, それらが完成から退いてしまうと個々に感覚や叡知にヒットされることがなく, 存在するか否か明らかではない。しかし, むしろ, それらは [L] 常に普遍的な説明言表によって語られそして知られるというものであった (VII10.1036a5-9)。生成消滅する個体は今・この認知機能により知られるのに対し, 普遍はロゴスにより知られるが, もしロゴスが「質料を伴ったロゴス」として具体的なエルゴンに内在しないとするなら, 一方では個体についての普遍的な知識は得られず, 他方ではロゴスは実在に対応物をもたないただの音声の流れになるであろう。形相が基体としての質料に内在するその仕方こそ解明されねばならない。

4.4 「ロゴスに即した実体」と「実働としての実体」

魂と物体の非一性の [E] 観察に基づく帰納的主張

アリストテレスは, 実体論のこの種の基本的な理解を要約的に確認したうえで、『魂論』第二巻一章の続く箇所において, 物体が魂ではないことの一つの証明を展開する。この議論は, 物体にのみ運動や働きが帰属するとするなら, 魂がいかなる存在者かを明らかにする一つの方向を定めるものとなる。彼は実体の実働との対比において魂を, その定義形成を介して「ロゴスに即した実体」として確立する。最初に彼は生命事象の有無を介して, 魂が基体そして質料ではないことを帰納的に確認する。

[c] しかしながら, 物体がそしてそのなかでも自然物体がとりわけ実体であるとひとびとには思われている。なぜなら, これらは他のものどもの始原だからである。だが, 自然物体のうち或るものどもは生命を持ち, 他のものどもは持たない。ところで, われらはそれ自身による栄養摂取と成長そして減衰を「生命」と語る。従って, 生命に与るすべての自然的な物体は実体であろう, 合成体として (*hōs sunthetē*) という仕方

の実体ではあるが。しかし、次のような物体、即ち生命を持っている物体 (*sōma*) も存在するので、物体は魂 (*phsuchē*) ではないであろう。なぜなら、物体は基体在即してあるものどもには属さず、むしろ、それは基体そして質料としてあるからである (412a11-19)。

物体のなかでも運動と静止の始原・原理を自らに持つ自然物体は端的に存在する実体であると想定されている。自然物体のなかには生命を持つものと生命を持たないものがある。「生命とは自らによる栄養摂取そして成長ならびに衰退である。従って、生命を分け持つあらゆる物体は実体であろう、それは合成体 (*sunthetēn*) としての実体であるが」 (412a14-16)。ここで「自らによる」という合成実体の自律性が言及されている。物体は生命に見られるこの自律的な働きをそれ自身において持ちえないということが含意されている。これは生物学の基礎命題であり、生物の自律的な生命活動の非還元的主張である。なお、ここで生成消滅が帰属する個体「統合体 (*sunolos*)」ではなく「合成体 (*suntheton*)」が用いられているのは、一旦生命と物体をロゴス上判別したうえで、「分け持つ」という仕方で合成しているため、ロゴス上の一般的な議論が展開されているからであると思われる。このことは、『形而上学』第八巻三章において確認される。彼は言う、「ときにひとの名前が [L] 合成的な実体 (*tēn suntethēn ūsian*) を意味表示しているのか或いは [E] 実働そして形姿を意味表示しているかどうかを気づかずにいることを忘れてはならない」 (1043a29-31)。「ロゴスに即した実体」は「実働と形姿」ないし「実働としての実体」 (1042b10) とアクセスの異なりに応じて対比されている。普遍的な次元で形相と質料の合成を語るとき、生成消滅次元にある [E] 統合体 (*sunolon*) ではなく [L] 合成体 (*suntheton*)、「合成的実体」が用いられる。外的な妨げがなければ、そのまま「人間」は実働するでもあろうから、ロゴス次元のことであるのか判別しないことのあることが留意されている。

ここで確認すべき重要なこととして、この議論は確かにこの語彙の選択等に見られるように彼の存在論全体がこれらの主張を支えているが、存在論的な概念に訴えることなしに、生命事象の観察だけからして帰納的に生物が単なる自然物体ではないことが導出されていることである。これは個々の観察か

ら普遍的な主張を導く [E] エルゴンアプローチである。ここから「物体は魂ではないであろう」(412a17)が帰結するとされる。その根拠として物体は基体に即してあるものどもに属するのではなく、「むしろ基体そして質料としてある」ことを挙げる。質料は素材として一つの始原であるが、そこからそれ自身により生命事象を生み出すことはできないとされる。短くしかも力強い議論である。この帰納的議論を [X] 「魂と物体の非一性 (の帰納的) 主張」と呼び、その根拠となる栄養摂取による成長等の観察に基づく帰納による主張を [W] 「生物の自律的な (非還元的) 生命事象」と呼ぶ。

なおこの背後には第一巻における先行哲学者たちの諸説例えば魂は微細な物体であるなどの吟味が前提されている。ここでは [W] との関連で、魂と身体器官の働きの関係の語り方について一点だけ確認する。本来物体に帰属する運動との関連で、魂は運動するかが議論される。彼はそこで言う「魂が憐れむ、或いは学ぶ、或いは魂が思考する」と語るのではなく、「ひとが魂によってそうする」と語る方が一層適切であろう。これは運動がかの魂に内在するというのではなく、時にかのものに至り、時にかのものから [運動が生起する] ということである」(*De An.*I4.408b13-16)。魂が物体に属する運動の終点と始点の限界点として位置づけられている。この臨界こそ解明されねばならない。

魂のロゴス上の離存性 ― 完成におけるロゴスとエルゴンの分節と総合

アリストテレスは『魂論』の続く箇所において、[X] 「魂と物体の非一性主張」とその一つの根拠となる [W] 「生物の自律的な生命事象」の確認の前提のもとに、質料形相論と様相存在論の枠のなかでこの臨界の問題の解決をはかる。彼は質料の基体性との対比から必然的に導かれることとして、「魂は力能において生命を持つ自然物体の形相としての実体である」を提示する。魂はロゴスに即した形相としての実体である。これは必然的に導出される魂の記述であり他のいかなる存在者もこの記述を満たさない。しかし、テキスト [b] で論じられるように形相は「知識がそうあるものとして」ロゴス次元の

みならず、「知識を観想することがそうあるものとして」エルゴン次元における統合体の働きつまり実働において生きていることをも抱えるため定義としては十全ではなく、さらなる限定を必要とする。彼は魂のロゴスを求めておりエルゴンを求めていない。魂の定義は質料と形相そして力能と完成のペアに訴えることにより、そしてその帰結である合成体のエルゴンとしての生命をロゴス上組込むことにより遂行される。彼は言う、

[d] かくして、必然的なことは、魂が力能において生命を持つ自然物体の形相としての実体であることである。しかし、その[形相・]実体は完成[統帥的に一かつ在ること (412b8)]である。かくして、魂はこのような物体の完成である。しかし、これ[hautē:完成]は二つの文脈において語られる、かたや[L]「知識」がそうあるものとして、他方[E]「知識を観想すること」がそうあるものとして。かくして魂は知識がそうあるように[完成で]あること明らかである。というのも、魂が内属することにおいて、睡眠そして覚醒が存在し、かたや覚醒は知識を観想することに類比的であり、睡眠は[知識を]所有することかつ実働しないことに類比的であるが、同一のものについて知識は生成上[知識を観想すること]より先だからである。それ故に、(A)魂は力能において生命を持つ自然物体の第一の完成である(412a19-28)。

ロゴス上魂は「形相としての実体」として特定され生命を持ちうる自然物体である質料部分から分離される。その在り方こそ、ここで展開される。「形相としての実体」は形相がそのロゴス性とその実働の二つの文脈で語られること、そして後者は統合体を介しての実働であるため、魂特有の定義を形成するには広すぎる。魂を統合体の実働から分節する必要が生じている。

彼はテキスト [b] において「これ[tūto (中性):形相]は二つの文脈において語られる」と述べたが、「完成(hautē)」が語られる二つの文脈と同じ事例を用いることにより、双方の対応を示している、一方は自然であり、他方はその存在様式であるが。なお、「第一の完成」が語られるのに対し、形相について「第一の形相」が語られないのは、形相は事物に内在する存在者であり、存在様式のようにその在り方が成立する場面をロゴス上とエルゴン上分

節することができないからである。魂はロゴスであると同時にエルゴン上このような物体に行き渡りそして生かしめてもいるであろう。

形相のロゴス性による魂の因果論的理解

— エルゴンに内在するロゴス —

このことの理解のために第二巻二章における魂の因果論的な理解の展開が有益である。彼は第二章以降、魂論の各論において存在論的かつ自然学的な背景理解を補いつつ議論を展開している。第一章では「魂は何であるか」の自体的同一性としての本質（もの自体）の説明言表の提示が力能と完成に即して様相的定義として提示されるが、第二章では「魂」を因果論的な文脈において理解する。

魂は観察される個体ではないが、二重の指示の故に個体の規定性を担うものであり、定義の形成を介して分離されまた指定され、存在様式（「第一の完成」）において他のいかなる存在者からも判別される。一般的に定義は説明言表の部分によって構成されるが、魂の様相的な定義（A）「力能において生命を持つ自然物体の第一の完成」は論証を介した定義のように根拠をではなく「事実を明らかにする」ものとして位置づけられる（II2.413a14）。これはちょうど「正方形化」が「比例中頃の発見」に対する言及なしに「与えられた長方形の面積に等しい正方形を作ること」に比され、また月蝕を「月における光の消失」という「論証の結論」に比される類のものである（413a16, cf.94a8）。（A）において存在様式の提示によるこの顕著な存在者のピックアップが遂行されており、第二巻二章においては因果論的な理解のなかでの様々な生命事象の根拠としての議論が展開され、文脈を異にする。

彼は第二章において「魂はわれらがそれによって第一に生きた知覚し思考するところのものである、従って或るロゴスそして形相であろう」として魂の様々な働き（エルゴン）が、総じて生きることが「それによって」遂行されるところの第一の根拠として提示する（414a12-14）。従ってその根拠はそれ自身としてはエルゴンから判別されるものでなければ、根拠それ自身が一種の生命活動となってしまうことから、魂は定義（A）「力能において生命

を持つ自然物体の第一の完成」の形成を介して開示される「ロゴスに即した実体」であり、「或るロゴスそして形相」(414a13)として提示される。ひとは魂によって種々の働きをするが、その種々の働きからなる生命の働きを説明するものとしての根拠である。

ちょうど斧が「切断のため」というロゴスなしに知られないように、「生命」は魂への言及なしにその「何であるか」は知られない。この魂の因果的規定は第一の究極的なものである。しかし二次的には、「～によって」はさらに「知識」や「健康」が代入され、ひとは「知識によって」「健康によって」その実働「知る」や「健康である」と語られる。これらは魂に比し二次的ではあるにしても、魂によって生命とその活動があるのと同様の関係にあるとされる。「われらがそれによって知るところのものを、われらはかたや知識であり他方魂であると言うが、というのも、これらのそれぞれ[知識か魂]によって知るとわれらは語るからである」(II2.414a34-7)。「知識」には「形成しうる者(*poiētikon*)」と「受容しうる者、知りうる者(*epistēmonikon*)」が関わるが前者教師の実働は後者の学習過程(運動)に「内属する」ように思われている。これにより「知識」の授受が遂行される。「形相は知識がそうあるように」とあるとされるとき、授受者のあいだでやりとりされるロゴスであることを表現している。知識は「それによって」授受が成立する媒介的な「或る形相そしてロゴス(説明言表によって指示されるもの)である」(414a9)。ロゴス(知識)はエルゴン(知る)に因果的に先行する。ロゴスとしての魂なしに、生物は生きることはない。ロゴスと実働はこのように判別される。

形相のロゴス性の議論を第二巻二章において確認しつつ、第一章の議論を理解するとするなら、生物においては魂が内在するとき、睡眠と覚醒即ち生命が存在するにいたる。「睡眠」は魂を「持つことそして実働していないことに」において「知識」と類比的なものである。なぜここで「類比」が語られるかと言えば、魂が内属するとき、そこには、環境など外的な妨げがなければ、直に生命活動があり、そして当然睡眠もその活動の一つであるからであり、エルゴン次元でロゴスを摘出するのは類比に訴えることによってしか把握できないからである。「生成上より先」であるのは「ロゴス(知識)を持つが実

働しない」そのような知識は知識を観想することや覚醒に対比され睡眠に類比される「第一・最初の完成」である。生成上生命をそれにより実現させる形相としての魂は第一の完成である。

第一の完成は生成の終局において「最終質料」と呼ばれるものに支えられているが、エルゴン上何も妨げがなければ現に実働においてある、つまり生きている。彼が「最終質料と形姿は[エルゴン上]同じでありかつ一である、ただし[ロゴス上]一方は力能においてあり他方は実働においてあるが」(*Met.*VIII6.1045b18-20)と語るとき、生成の終局地点における最終質料に支えられて実現している形姿がエルゴン上摘出されている。双方はエルゴン上同じ一つのものであるが、ロゴス上力能と実働において分節されている。エルゴン上は統合体カリアスであり、ソクラテスであり、魂と物体は分離されずに実働している。

彼はこの生きた物体の実体であることを表現すべく「魂は内魂物の実体である」と語る。「魂は生きている物体の根拠かつ始原(*tū zōntos somatos aitia kai archē*)」である。これら[根拠かつ始原]は多くの仕方でも語られるが、同様に魂も規定された三つの仕方に即して根拠である。即ちこの運動が「そこからであるところのもの」[始動因]、そして「そのためのそれ」[目的因]、そして魂は「内魂物の実体」[形相]である。かくしてそれが実体であることが明らかである。というのもあらゆるものにとって在ることの根拠は実体であり、魂はそのものの根拠かつ始原だからである。さらに完成は力能にあるもののロゴスである」(II4.415b8-15)。ここで魂という特殊な存在者は形相としての実体であるが故に、始動因でも目的因でもある。

アリストテレスは形相が目的とロゴス上同じのものであると考える文脈が確かに存在するが、その一つの文脈において言う、「自然学者は双方の根拠を述べねばならないが、何かのため[目的因]のほうが一層根拠である。なぜならそれは質料の根拠であるが、質料はゴールの根拠ではないからである、そして[エルゴン上]ゴールは[ロゴス上]目的であり定義とロゴスからの始原である」(*Phy.*II9.200a32-35)。私は「ゴール(*telos*)」はエルゴン次元における生成の終局を表し、「目的・何かのため」はロゴス次元においては「定義

とロゴスからの始原」であると解する。ロゴス上の根拠が質料を秩序づける。「完成」は力能に対し「一」と「存在」との観点において同様の秩序づけの関係にある。普遍存在論の課題である「一」と「存在」との観点において自然である質料と形相の関係を存在論的に開示すべく「力能」と「完成」が導入されていると言うことができる。この関係概念としてのペアの導入により、これまで解明されなかった存在者の存在様式がロゴスとエルゴンの相補性により解明される。

「限界」の辞書項目において、彼は述べている、「このようなもの[ゴール]は運動と行為が「それに至るところのそれ (*eph' ho*)」であり「そこからのそれ (*aph'hū*)」ではないが、時には (*hote*) 双方のものがあり、それぞれの実体そしてそれぞれであることは何であつたか[本質]は「そこからのそれ」と「それに至るところのそれ」すなわち「そのためのそれ[目的]」である」(1022a7-9)。このように、始動因でも目的因でもありうる存在者がここでは念頭におかれている。ロギコスな概念である本質はそれらの placeholder の役割を担っている。そして魂が、先に、「これは運動がかの魂に内在するというのではなく、時にかのものに至り、時にかのものから[運動が生起する]ということである」と特徴づけられているのを確認した (*De An.*I.4.408b13-16)。生物学上「生きていることは[存在論上]存在していること」(415b13)であるが、その根拠かつ始原は魂であり、この完成が生命を持ちうる自然物体の根拠かつ始原としての説明言表である。「内魂物を無魂物から生きることにより判別する」と語られ、魂は生命原理として統合体を生かしめる根拠として実働する (*De An.*II.2.413a21)。

世界には能動者と受動者のあいだで遣り取りされるものが存在するが、実体の生殖や場所移動、熱や冷のような量そして知識のような性質において、アリストテレスは先に運動と変化の議論において確認したように「動かすものは形相を伝達する」と主張する (*Phy.*II.2.202a7-12)。

そこで始動因は人間のロゴスを完成において所有し、接触を通じて形相を質料である卵子に伝達している。魂は父親に内在しているが接触は統合体が遂行するため、形相は生成の完成として実現されるものであると同時にそれ

によって能動者が受動者に伝達するところのものでもある。鶏から卵への、また卵から鶏への形相の相互的循環性は生物の複製機構に代表されるが、伝達されるものが絶えず変化しているとすれば、「人間が人間を産む」安定した複製は望めない。生物の安定した複製のエルゴンが、ロゴスはそれ自身としては変化も運動も蒙らない非物体的なものであることの一つの保証としてアリストテレスを突き動かしている。そしてそのロゴスはエルゴンにより伝達される。「[ロゴスを持つ] 能動しうるものの実働は受動するものそして状態づけられているもののうちに内属する」(414a11)。ひとは言いうる、「知識によってまた魂によってひとは知識を観想する」と (cf.414a6)。ここで形相が二つの「～によって」の様式により語られている。ひとつはロゴスとして、もうひとつはたいいてい身体を介した魂の実働である。

魂と物体の関係における不可逆性と不可欠性

彼は『魂論』第二巻二章で [X] 「魂と物体の非一性主張」のさらなる限定を質料形相論さらに様相存在論の枠のなかで展開しよう論じている。「実体は三つの仕方で語られるが、……これらのうちかたや質料は力能であり、形相は完成であり、双方に基づくもの [合成体] は内魂物であるので、物体が魂の完成ではなく、魂が物体の完成である」(II2.414a14-19)。譬えて言えば、「ひとはドーパミンの分泌のために生きる」わけではなく、「魂のためにそれが分泌する」。ここに魂と物体の不可逆性が主張され、さらに「このことの故に適切に把握する者たちにとっては、彼らには魂は物体なしになく、また何か物体であるとも考えられていない」という後者が前者に対する必要条件であることが主張される (414a19-21)。これを [X1] 「物体の魂に対し不可逆かつ不可欠性条件」と呼ぶ。魂と物体は一ではないが、形姿は力動的な生成の最終段階で得られるものであり、エルゴンとしては「質料と混合されている形姿」(*De Caelo*.I9.277b30-31)として、またロゴスとしては形相として完成という存在様式においてある。合成体ここでは「内魂物」が [W] 「生物の自律的な生命事象」を遂行することの故に、魂は魂をもたない広汎に存在する物体とは異なる。魂は物体なしにはないが、物体ではない [X1] 「不可逆かつ

不可欠性条件」を満たすことから、物体が魂の完成ではなく、魂が物体の完成であると論じられている。

一般的には、彼は魂と身体はピュタゴラス派の輪廻転生に見られるように任意のものが任意のものを「受け取る (*dechesthai*)」という仕方ではなく、物体と魂の関係は[X1]「不可逆かつ不可欠」なものである。自然物には無魂物もあることから、生成上の最後に実現されるのが、エルゴン上形姿としての魂である(II2.414a14-19)。彼は魂と物体の任意的な関係を否定してその一般的な理由を[X2] 不可逆性に訴えて言う。魂と身体は輪廻転生論者のように「任意のものが任意のものを受け取る (*dechesthai*) という仕方で見られるのではない」(414a23-24)。その双方の関係における現象は秩序正しいものであると彼は言う、「それはロゴスに即して次の仕方では生成する。それぞれのものの完成は力能に内属しておりかつ固有の質料においてあるものに自然本性上実現されている」(414a25-27)。身体と魂、素材と形相の固有な即ち自体的な関係解明のためにこそ彼の関連術語が駆使される。「それぞれのものの完成」とはエルゴン次元において個々のものが「そこに向かう (*epi ho*)」ところのそこである適切なゴールの存在様式を表現している。具体的存在者が主題であるため、個々のものの形相がそこにおいて獲得される適切な力能においてある質料が提示されることによって、その存在様式を「完成」と確定している。魂は物体ではないとしていかなる存在者か。それはロゴスに即して固有の質料において力能にあるものの「或る完成」即ち第一の完成として実現される。ただし、この実現はエルゴン次元における生命により確認される。

4.5 魂の定義 (A) (B) — 心身論の伝統的なアポリアに対する解決案 —

第二巻一章のロゴスの展開においては、魂の形相としての実働は括弧に入れられる。かくして、アリストテレスはロゴス上エルゴンから分離される力能と完成の組により「魂は何であるか」の定義(A)「魂は力能において生命を持つ自然物体の第一の完成である」を提示するに至る。定義が語られたと言うことは本質が開示され事物の一性が確立されたということに他ならない。しかし、この一性は先に確認したように論証的な定義のように、無中項

連関を形成する中項となる因果的な事物・事象の発見を介して事物の必然性を確立するような論証を媒介にした定義とは異なる。魂の存在をそれとは異なる根拠から論証することはできない。

魂のように事物がその本質と同じものである不可視なものに対しては、それに叡知が発動することがあるにしても、ロゴスの形成を介してロゴスそれ自身として把握する存在様式の分節と総合による定義が提示される。「完成」はそこにおいて「一と在ることが統帥的に語られる」その存在様式である。力能において一であることと完成において一であることが統帥的に関係づけられていることを明らかにする要素が完成においてあるもののエルゴン即ち生命であった。今・この生命事象のエルゴンを普遍的説明言表の形成に巻き込むことは許容されないが、エルゴンは「そのとき・そこ」を含むものとして普遍化され、ロゴス化され力能の枠のなかで組み込まれうる。或る意味でこの種のエルゴンが力能と完成を一にするロゴスを形成すると言うことができる。見ることが見る力能あるものと完成のロゴスである視覚を一なるものにする。ただし、それは因果的に一なるものにするのではなく、合成体の存在様式として一であることを表現している。アリストテレスはロゴス上の先行性とエルゴン上の同時性について説明しつつ、エルゴンのロゴス化をこう説明する。

動物の魂（即ち内魂物の実体）は、ロゴスに即した実体そして形相そしてこのような物体であることは何であったか〔本質〕であるので、それぞれの部分〔eg. 視覚〕は、少なくともそれが適切に定義されるなら、エルゴン〔視・見る〕なしには定義されない、そのエルゴンは感覚〔魂〕なしには〔動物に〕属さないであろうものである。その結果、魂の部分は、すべてであれ或るものどもであれ、〔個々の〕統合体動物(*sunolū zū*)よりも先である。……しかし、或るものども、即ちロゴス（理）と実体〔魂〕が第一にそこに内属する限りの統帥的な部分（*hosa kuria*）は、それが心臓であれ脳髄であれ、〔身体全体とエルゴンにおいて〕同時である（*Met.*VII10.1035b13-20, 25-27）。

形相はエルゴンが帰属する統合体を説明するものとしてロゴス上より先で

ある。他方、形相がエルゴン次元において実働する以上、それにより実働する力能あるものへの言及が不可欠となる。そして生きうるものである自然物体の統帥的な部分、それが心臓であれ脳髄であれ、生成上実現されるとき、その物体全体は「同時に」生きる。現代の科学では受精卵は細胞分裂を介して最初に心臓が形成される、そのときであろう（なお生殖力能は栄養摂取魂の機能であるが、これは十代に完成に至る）。アリストテレス自身「自然は最初に心臓からでる二本の血管を設計した」と語る（*Gen.An.*II4.740a28）。それ故に、エルゴン次元においては、魂を失ったものではなく持っているものが、力能にあって、その結果生きている。他方、ロゴス上力能において生命あるものが一なるものであるのはそのロゴスが完成において一であるものに言及することによってである。「完成は力能にあるもののロゴス（説明するもの）である」（II4.415b14）。エルゴン上その完成にあるものの実働が、自らその力能の実働であるところの、その力能のロゴスこそ明らかにされねばならないからである。

(A) の定義を構成する力能と完成の組は一性を説明する役割を担っていることから導出されたが、彼はその受動的なロゴスの部分「力能において生命を持つ自然物体」について「このようなものは道具的なものであろう」という主従関係を新たに提示する。彼は人工物に限らず、生命を持ちうる自然物体つまり器官を持つ身体を「道具的なもの」という理解を示す。この限定により感覚魂や理性魂等あらゆる魂に共通な定義形成句を得ることができ、その第一の完成から「魂」だけを特定することができる。この (A) 定義が生命の根拠としての栄養摂取魂つまり植物の魂にとりわけ妥当することから、他の生命活動としての感覚や思考をも司ることのできる感覚魂や理性魂にも適用される「あらゆる魂について何か共通する説明言表を語らねばならないとするなら」として定義 (B) 「道具的な自然物体の第一の完成」が提示される。かくして、完成と力能は統帥的に一であることと、それをエルゴン上実現すべく道具的、被統帥的に一であることが明らかになる。そこから、魂とその道具としての物体について一性は問われる必要がないという主張がなされる。

[e] それ故に、魂と物体は一であるかどうかを探究する必要はない、それはちょうど蜜蠟とその型が一であるか、また一般的にそれぞれの質料と質料がその質料であるところのものがそうであるかを探究する必要がないように。というのも、一と在ることは〔力能において等〕複数の仕方では語られるので、統帥的な仕方では「一」と「在ること」と語られるものが完成だからである（412b4-9）。

この力能と完成の関係による存在様式における道具的なものと統帥的なものとしての魂と物体の理解が、心身論として常にアポリアとされてきた問題に対しどれだけの解決案となっているのであろうか。アリストテレスは魂の定義の企ては、形相としての実体の存在様式がそこにおいて「統帥的に「一」と「在ること」が語られる」「完成」であることに訴えて遂行される。「完成」が二つの文脈において語られるにしても、ロゴス上双方は分節される。その分節故に「第一の完成」が特定される。生命を語りうる第一の完成は「栄養摂取魂」であろう。「栄養摂取魂は別の生物にも内属するそして、それに即して生きることがあらゆるものに内属するところの、魂の第一の最も共通の力能である」（II4.415a23-25）。そしてこれは例えば人間においてはエルゴン上生殖力能を持つ十代に完成に達するであろう。「完成」が語られる二つの文脈の「第一の完成」は「ロゴスに即した実体」としての魂であり、他方は「実働としての実体」としての内魂物の今・ここの生命活動である。そして十代のあるときに、実働としての実体は生殖力能を持ち始動因としての待機力能においてある。双方はロゴスに即してのみ分離される。

彼は力能と完成の組をより説得的に説明すべく「道具」さらには「統帥的に」という副詞による完成の説明を遂行する。つまり、どの段階で「力能において」と言えるかを、魂全体に適用される仕方では、何かが「道具」的自然物体という位置づけを得たときであると語っている。質料は形相との関連においてその不定性を逃れ規定を得るのであった。（B）においてもやはりロゴス次元のものであり、実際には道具としての器官は機能しているでもあろうが、それは括弧にいれられる。植物の器官である根はその機能において動物の口に対応する。双方とも栄養を摂取する道具である。彼は「道具は働きに

において (*ergois*) 同じか異なるかを語らねばならないのなら、動物の頭がそうあるように、植物の根がある」と言う (II4.416a4-6)。さらに目的論的な枠組のなかで、諸器官は魂の道具としての位置づけを得る。「魂は「そのためのそれ (目的)」としての根拠であることも明らかである。……動物たちにおいては魂は〔根源四元素の〕自然に即してもまたそのようなものである。なぜなら、あらゆる自然的な物体は魂の道具だからである、動物の物体のように、植物のそれもそのように魂のために存在しているからである」 (II4.415b15-19)。これらはあくまで完成が力能にある「道具的な自然物体」の何であるかを目的論的に説明するものとして提示されている。物体と魂の関係の理解として、「道具」が統帥的な仕方で「一と在ること」を語らしめる「完成」との関係概念において捉えることを容易にしている。これは彼が「魂は内魂物の実体である」 (1035b15) と語る際、この実体は内魂物に文字通り内在しているように、道具として記述される自然物体には既に統帥的なものとの関係に置かれており、それを用いる魂は力能においてある道具にロゴス上内属している。

かくして、彼は (A) ならびに (B) 魂の最も共通の説明言表の提示を媒介にして一つの重要な「魂と物体は一であるかどうかを探究する必要はない」という結論を得る。ここでアリストテレスは、魂が内属することにおいてちょうど睡眠のようであれ覚醒のようであれ、完成にあるからこそ物体を統帥するという仕方で「道具的な自然物体」の一かつ在ることを実現しており、それ故に魂と同一であるかを問う必要はないと言っていると思われる。彼は「なぜ」問う必要が無いかを説明して言う、「というのも一と在ことは〔力能等〕複数の仕方では語られるので、統帥的な仕方ですら「一」と「在ること」と語られるものが完成だからである」。蜜蠟はそれに刻まれている印型に対し、質料は質料がそれであるところのものに対し、エルゴン上同じものでありかつロゴス上「力能」と「完成」に分離される。統合体が力能に生命を持つものであって、内在する魂はその第一の完成である。「統帥的に」一であることはその道具として被統帥的に一であることとエルゴン上同じものとして言わば重なり合っているが、二つの仕方ではアクセスされることを許容している。

完成と力能が統帥的と道具的と秩序づけられる限りにおいて、魂と物体が一であるか問う必要がないことを、[Y]「魂と物体の一性問題の解決」と呼ぶ。アリストテレスは[X]「魂と物体の非一性主張」とこの[Y]「魂と物体の一性問題の解決」に矛盾がないと理解している。「一」は「存在」同様多くの仕方
で語られるからである。[X]は帰納的に[W]の観察に基づき導出された主張であったのに対し、[Y]は力能と完成の存在論的枠組のなかでのロゴスに即した主張だからである。換言すれば、統合体はエルゴン上不可分なものとして実働しており、ロゴス上その一性の秩序づけにおいて分離されることの故にとの問いは解決される。

4.6 「完成」は「力能」に対し「統帥的な仕方において」ある

ここで「統帥的に(*kuriōs*)」という副詞句を一般的な仕方
で理解しておきたい。この魂を持ついかなる存在者の魂にも適用される共通の説明言表はロゴス上「道具的自然物体」と「第一の完成」に判別されるにしても、エルゴン上同時であるでもあろう。魂が内在していないとすれば、もはや生きていないからである。魂を持つものはすべて道具を備えており、「道具を備えた自然物体」が物体の適切な普遍的限定となる、そしてそれはロゴス上完成にあるものとの関連においてのみ実働するであろう。

彼は「一」と「在ること」は複数の仕方
で語られることから、この一性と存在について秩序を提示している。力能と完成のペアは自然としての静止と運動の根拠である質料と形相のペアに対応する存在様式として提示されており、見てきたように完成は力能との関係概念においてあり「統帥的に」力能にあるものを秩序づけるロゴスの存在様式であると語られている。この副詞の名詞形は「主人(*kurios*)」を意味し「奴隷・僕」或いは「使用者」と「道具」との関係において明らかになる関係概念である。「いかにカリアスの魂即ち形相は語られねばならないか」に対しては「「これ」と語られねばならない」であり、また「「完成」と語られねばならない」。完成である形相が力能である質料に一と在ることを統帥的な仕方
で与えるからである。それ故に「これ」という指示が成立する。

完成と力能は双方が単数形において統帥と被統帥という一義的な関係にあるものとして用いられている。「統帥的に (in the governing manner)」は『魂論』第一卷五章におけるエンペドクレスによる地水火風の構成要素から一切がなる唯物論的な理解に対する批判において同じ文脈において用いられており、彼は物体と魂の関係を理解させるものとして用いている。アリストテレスは「火や水等は物体 (*sōmata*) であるから、始原が物的なものであることをわれらは……知者たちから受け取っている (pf: *pareilephamen* (pr: *paralambanō*))」と語るが、この種の基体としての物体は事物の生成の始原として予め容認されている (*Met.* I5.987a4-6)。そのうえでこれらが秩序あるものとなることの根拠が求められる。

「ひとはそれら構成要素を一つにするものは一体何であるかアポリアとするであろう。というのも、構成要素は少なくとも質料に似ているからであり、最も統帥的に一つに統括するかのものがまさに何であるかであるところのもののだからである (*kuriōtaton d'ek'ei'no sunechon ho ti pot'estin*)。魂より何か卓越しておりそして支配的なもの (*ti kreitton kai archon*) が存在することは不可能である。だが、叡知よりそうであるものが存在することは一層不可能である」(I5.410b10-14)。素材を統括し一なるものとする存在者の「何であるか」が求められている。魂は事物を一なるものたらしめる形相としての自然的存在者である。その魂が統帥的な仕方素材を一つに統括している。「完成」の概念がその形相に対応するものとして「一」と「存在」がそこにおいて「統帥的な仕方」で語られる存在様式として導入されねばならない。彼は魂を特徴づけるべく「形相」同様に「完成」を必要としていた。

また魂の認知的働きにおいてもこう述べられている。「現に (*ēde*: 今・ここで) 知識を観想している者は、完成にあつてそしてこの知識 A を統帥的な仕方知っている者である」(II5.417a28)。ここで A の知識を実働している者は、「欲するとき、外的に何も妨げるものがないなら、知識を観想しうる者」(417a26)つまり力能にある者との関係において、この知識 A をめぐり統帥的な仕方においてある。

アリストテレスは『形而上学』第八卷六章において、先行哲学者たちが事

物の一性をめぐるアポリアを共有していたことを確認し、彼らの解決案とともに紹介する。

この「一性の」アポリアの故に、或る者たちは「分有」を語り、また分有の根拠が何でありまた「分け持つこと」が何であるか難問とする。他の者たちは魂の「共存」を語る、ちょうどリュコプロンが知識を知ることと魂の「共存」であると語り、他の者たちは生きることは身体と魂の「合成」ないし「結合」であると語るように。そして同じ議論があらゆるものについて妥当する。というのも健康であることは魂と健康の共存ないし結合ないし合成であるからである。その「分有」や「共存」に訴える理由は、彼らは力能と完成を一つのものとするロゴスをそして異なるものとするロゴスを求めているからである（1045b7-12）。

ここで「分有」や「共存」そして「合成」等は事物の力能と完成を一つにするロゴスである。当然彼らは完成の存在様式を少なくとも術語において知らないで、アリストテレス自身による先行者の見解の整理である。その枠組みにおいては、知ることに対し力能においてある魂と完成においてある知識の「共存」により知る働きが成立する。生きることにに対し力能においてある身体と完成においてある魂の「合成」により生きる働きが成立する。それらの差異をもたらず否定的ロゴスは無知や死を説明する。彼らの探求は「力能と完成を一つにするロゴスを求めている」と纏められる。もしそのロゴスが当該存在者の力能と完成を一義的に関係づけるものとして内在するとすれば、もはや「分有」「結合」等第三の結合子に訴える必要がなくなる。アリストテレスはその一義的な関係をロゴスアプローチにおいて求めていたと言える。彼は完成にあるもののエルゴンをロゴス化し、力能に組み込むことにより統帥的に「一」と「存在」が語られる完成との関係に一義的な仕方で行き渡ることができたのである。この箇所では、アイデアや魂のような非感覚的な事物の働きについて、アリストテレスは彼らがロゴスアプローチを取っていたことを確認し、この一性のアポリアに対し、エルゴンアプローチにより解決されると提案する（彼はそれとの相補的なものとしてロゴスアプローチをも展開するのであるが）。アリストテレスは続けて言う、

だが、語られたように、最終の質料 (*hē eschatē hulē*) と形姿 (*hē morphē*) は [エルゴン上] 同そして一である、[ロゴス上] 一方力能において、他方実働においてではあるが。かくして一つのものゝ根拠が何であるかと一つであることの根拠が何であるかを探求することは同様である。というのも、それぞれは或る一つのものであり、そして力能においてまた実働において何らかの一つのものであるからである、かくして [E] 力能から実働に動かすもの [始動因] として何かがあることを除いていかなる別の根拠も存在しない。だが質料を持たない限りのものは、すべて端的にまさに或る一つのものである (1045b16-23)。

始動因と目的因は双方同じロゴスを持つことによって秩序ある生成をもたらすことを先に確認したが、エルゴン上始動因が力能あるものを実働にもたらすことによって、同じゴールを実現する。その最終の質料と形姿は同じ一つのものとして働きにおいてある。

アリストテレスは『形而上学』第七卷十七章以降この章まで「実働としての実体」の解明に従事しているが、それはエルゴンアプローチによるものであった。彼のここでの解決案は [E] 完成においてある始動因という時空を特定できる存在者の力能にある素材への働きの故に事物が実働において一なるものであるというものである。これらの章でのエルゴンアプローチにおいて、「可感覚的事物から分離されたかの実体について」解決できることが期待されている (VII.1041a8, cf. XII.7.1072a31-33)。

他方、『魂論』第二巻一章は定義の形成における一性の把握における [L] 力能と完成の組を問題にしている。そして先行哲学者たちのこれらの営みはアリストテレスによればロゴスアプローチとして位置づけられている。彼らは力能と完成を一つにするロゴスを探索しており、アリストテレスもそれを共有するが定義の形成においては力能と完成の組が統帥と被統帥という仕方では内的な関係におかれる。様相定義において完成においてある実働・エルゴンがロゴス化され力能に組み込まれることにより、力能において一であることと完成において一であることは必然的な関係におかれ、定義においては多と一の関係におかれることはない。

4.7 生きている統合体に対する同名異義原理の適用による分離と不可分離の共存

エルゴンに内在するロゴスをいかに析出するか

ロゴスである形相が実働すること或いはエルゴンのなかにロゴスが内在すること、これがアリストテレスの最も重要な存在論的主張でありまたアポリアを引き起こすものである。形相は「知識がそうあるものとして」また「知識を観想することがそうあるものとして」二つの文脈において語られることを先に確認した。魂が内属することにおいて生命つまり睡眠と覚醒があるがこれら二つと類比的である。「統帥的に一かつ在ること」と語られる「完成」も同様にこれら二つの文脈において語られる。「魂を持つが実働していないことによって」睡眠と類比される「知識」の如き形相はそのロゴス性を示し、覚醒が「知識を観想すること」(412a25)との類比で語られる文脈は「実体そして形相は実働である」(1050a23f)とされていることと関連する。形相である魂は実働するとき、そこに生命活動がある。生命活動は実働している魂に内属する。これが今・この具体的なエルゴン次元を形成しており、ロゴスの正しさを保証している。

力能と完成が秩序づけられてあることを示すべく[L]説明言表の形成は不可欠である。力能にあるものは、それ自身として考察する限り、反対対立の可能性を含むものであり「力能において多である」と言うことができる。彼は力能の特徴を説明して言う。「力能あるものはすべて[Fで]在ることも[Fで]在らぬことも許容されている」(1050b11)。それに対し完成は反対対立を含意しない。その意味でもそれ自身としては生成消滅次元においてない。彼は言う、「ロゴス(説明言表)には反対対立は存在しない」(XIV9.1058b7-11)。ロゴスの存在様式である「統帥的に一かつ在ること」を意味表示する完成には反対対立は含意されない。つまり完成は力能に対し一義的、不可逆的な関係においてのみある存在様式である。

完成が対応する力能に対し統帥的に一であることが語られるとき、つまり定義が成立するとき、力能は完成に秩序づけられ、統帥されている。力能にロゴスを与えられた限り、定義の構成要素として事物の一性形成に貢献して

いる。内魂物の実体は内魂物が何であったかと同じものである。魂はこのような道具的自然物体であることは何であったかである。換言すれば、「このような自然物体は何であるか？」の問いに対する成功した定義形成句「力能において生命を持つ自然物体の第一の完成」により意味表示されるものが魂である。この力能と完成の組により得られる魂の定義（A）（B）にはもはや魂と物体が一であるか問う余地は排除されたと言えることができる。事物の一性が力能と完成の枠で位置づけられる限り、相互の必然的な関係が確立されているからである。そこでは力能において一であることと完成において一であることは同じなる存在者の一性である、二つの視点の判別のもとで。

このように一なる説明言表の形成がエルゴンにおける一なるロゴス（理）の内在を開示する。これが「ロゴスに即した実体」のエルゴン次元においてある統合体からの析出の様式である。しかし、これは或る犠牲のもとに遂行される。ロゴスを説明言表上分離することができるにしても、例えば魂をエルゴン上分離したなら死んでしまうように、同名異義的なものとならざるをえないのである。

同名異義原理 — 人工物斧と自然物の非対称 —

アリストテレスは『魂論』第二巻一章で生きうる自然物体とその完成を一つにするロゴスを求め、（A）（B）を提出している。先行哲学者たちとの相違は「分有」や「共存」等に訴えることなしに本質のロゴスを提示できる理論をつまみロゴスのエルゴンへの内属の理論とエルゴンからのロゴスの析出の理論を構築していたことである。彼は始動因が持つ力能と実働のエルゴン上の秩序の根拠をもとに、ロゴス上の力能と完成の分節を可能にしている。彼は言う、

[f] [412b10] [L]かくして、（A）魂は何であるかが普遍的に語られた。というのも、それはロゴスに即した実体だからである。それは、だが、まさに道具のなかの或るものが、例えば斧が、或る自然物体であった場合にそうであるように（*kathaper*）、このような物体であることは何であったか〔本質〕である。というのも、かたや「斧であること」が「そ

のものの実体」であったであろうからであり、そしてそれが魂であったであろうからである。だが、これ〔実体〕が分離されたならば、それはもはや斧ではなかったであろう、同名異義的にそうだということを除いては。しかし、現にそれは斧である。なぜなら、魂はそのような〔人工〕物体の本質でもロゴス（・説明言表）でもないからであり、そうではなく自らのうちに運動と静止の始原を持つそのような自然物体のそれだからである（412b10-17）。

魂が何であるかが「普遍的に」語られた。普遍的な定義の形成を介して定義のロゴスにより意味表示（指示）されるものが魂であり、魂が「ロゴスに即した実体」であることが判明する。以下の等号がなりたつ。

魂＝内魂物のロゴスに即した実体（形相）＝「道具的な（＝生命を持ちうる）自然物体であることは何であったか〔本質〕」＝第一の完成。

「ロゴスに即した」実体であることの故に定義を形成することができ、そしてこれはアクセスとしては叡知などの認知機能により開示される「実働としての実体」と対比される。当然魂は物体を動かすものとして実働においてもあるが、ここで求められたのはものそれ自体としての一性を担う存在者であることを普遍的に捉えることであった。彼はそれを説明して「それは、だが、まさに道具のなかの或るものが、例えば斧が、或る自然物体であった場合にそうであるように、このような物体であることは何であったか〔本質〕である」と語る。

この人工物の反現実仮想は「まさに～そうであるように」と肯定的な一つの主張をなしている。「ロゴスに即した実体」は実働としての実体からそのロゴスを析出することにおいて、人工の道具が自然物であった場合につまり魂を持っていると仮定した場合と類比的な関係においてある。双方とも「斧であること」「このような道具的物体であること」が「そのものの実体」つまり本質であり、内在している。人工物は実際には外から本質が賦与されているため、分離は容易である。最大の非対称性は斧と斧の本質が異なるのに対し、魂と生きている物体の本質が異なることである。これは先にロゴスな議論の説明において触れたが、魂はそれより先の実体がない第一のものであ

るが故に、自らの本質と同じものであることによる。この非対称性は魂のロゴス性を明らかにするものである。それがロゴスに即した実体である所以である。

アリストテレスは同名異義原理を斧と「自然物」例えば人間に適用しており、魂に対してではない。事物とその本質が異なるとされる統合体人間と魂の場合を考察した場合、同名異義原理の適用は明瞭である。以下のような平行関係を得る。

斧 ≠ (斧であること[本質] = 「このような鉄の刃をそなえた物体であることは何であったか [本質]」 = 製作者の頭脳にあるロゴスとしての目的 = 「切断のため」)。

人間 ≠ (内魂物(人間)の本質 = 人間であること = 魂)

かくして、斧から「切断のため」というその本質を除去した場合に、もはや「斧」と呼ばれないように、人間から「魂」を除去した場合に、もはや「人間」と呼ばれない。人工物の場合同名異義原理の適用は斧には実質的には無効であるのに対し、エルゴン上の魂の分離は物体に死をもたらすため、ロゴス上のみ分離されうることが導かれる(cf.1042a28-32)。生きている斧から「斧であること」を分離すると、ロゴス上、「このような物体」はもはや生きた物体を意味表示せず、同名異義的にのみ「物体」であり「斧」である。同様に、分離された「魂」や「物体」は、異なる意味を持つ。この平行議論により遂行されているのは、人工物においてはその本質のロゴスは製作者や使用者の頭脳にある目的であるため素材に外から与えられただけのことであり、実際には「それは現に斧である」のに対し、本来エルゴン上分節できない魂と物体を同様の仕方でも分節した場合には、もはや生きてはおらず非対称的であることを明らかにしている。あくまでも魂は生きている内魂物の実体である。この原理の適用が自然物と人工物の構成の異なりとともに、ロゴスに即した実体を実働上の実体から定義により「第一の完成」と析出するとき、その意味は同名異義的なものとなることを示している。つまりそれは「実働にある実体」ではなく「ロゴスに即した実体」を意味表示している。自然物の本質は外から付加されないため、人工物との非対称性は明らかである。内

魂物と異なり斧は自らその機能を果たし続ける。そのことがロゴス上においてのみ離存的であることを明らかにしている。

アリストテレスは「実体」と「そのものの[おのおのの、何かの]実体」を判別していた。彼は「おのおののもの[基体実体]の実体」と語ることが許容できたのは、「実体」が「そのもの(おのおの)」に内属することの故に、生きている実体を表現する名前により「二重の指示」が成立していることの故にであった。彼はこの生きた物体の実体であることを表現すべく「魂は内魂物の実体である」と語り、先に引用したように、「魂は生きている物体の根拠かつ始原である。これらは多くの仕方でも語られるが、同様に魂も規定された三つの仕方に即して根拠である」(II4.415b8-10)。ここで形相としての実体は生きている物体の根拠として「このような物体の何であったか[本質]」を開示するものである。魂という特殊な存在者は始動因でも目的因でもある。生物学上、生きていることは存在論上、存在していることであるが、その根拠かつ始原は魂であり、この完成が生命を持ちうる自然物体の根拠かつ始原としての説明言表である。「内魂物を無魂物から生きることにより判別する」と語られ、魂は生命原理として統合体を生かしめる根拠として実働する(*De An.*II2.413a21)。

彼が斧の事例を挙げたのは自然物における「実働としての実体」との対比において「ロゴスに即した実体」を理解するためである。この反現実仮定の提示を介して、アリストテレスは同名異義原理を説明する。「しかし、その実体が分離されたなら、それはもはや、同名異義ということを除いて、斧ではなかったであろう」。「斧であること」としての「木を切断するため」が分離されてしまうと、「斧」は同名異義的なものとなる。それはちょうど生きた「指」と死んだ「指」が同じ音でももはや異なるものを意味表示しているように。道具的な自然物体に内属する「そのものの実体」つまり本質が取り除かれた場合に、それはもはや生きてはいず、ムクロを意味表示したであろう。彼は、この同名異義原理を人工物斧の事例に依拠しつつ、ロゴスに即した実体は本質を開示する形相が質料から分離されるのに対し、自然物は「内魂物の実体」という仕方でもエルゴン上分離されないことを示す。かくして、ロゴス上の実

体は実働としての実体とは同名異義的なものとなるという犠牲のもとに、分離されうる。

人工物との対比は明らかであり、斧の本質は製作者の頭脳にあるロゴスであり、それがこれこれの物質に形を与えただけである。「なぜなら、魂はそのような〔人工〕物体の本質でもロゴス（・説明言表により指示されるもの）でもないからであり、そうではなく自らのうちに運動と静止の始原を持つそのような自然物体のそれだからである」。この人工物と自然物の相違はロゴスに即した実体と実働としての実体の対比においては、普遍的な説明言表に対して、生きているかいないかはロゴスに訴える必要なしに認識される今・この実働の相違として見出される。魂の定義（A）（B）において本質は「第一の完成」として生命を持ちうる道具的な自然物体から分離されていた。それ故に、同じ名前が異なるものを意味表示している。「魂」は「自らのうちに運動と静止の始原を持つそのような自然物体」の説明言表であり、また本質である。

生きている統合的物体の上で部分との「類比項を共に見る（*sun-horan*）」

アリストテレスはそれを説明すべく議論を展開する。

[g] だが、語られたことを諸部分についても理論的に考察しなければならない。というのもし目が動物であったなら、視覚はそのものの魂であったであろうからである。というのもこれ〔視覚〕は目のロゴスに即した実体だからである。しかし、視覚が除去されるならば、目は視覚の質料であり目ではない、まさに石製や書かれた目のように同名異義というのでなければ（412b17-22）。

彼は、最初に、部分との類比において、同名異義原理を確認する。「目」が合成体「動物」であったなら、「視覚」は目の「ロゴスに即した実体」として「そのものの魂」に相当する。このロゴス次元においては合成体目から「視覚」が分離される以上、「目は視覚の質料」という位置づけを得る。これが「目」の同名異義であり、「石製の目」と同じ質料部分を意味表示するものとなり、もはや生きている目を意味表示することはない。彼はこの事態を受けてエル

ゴン次元との関係解明に向かう。部分と全体の関係が類比関係を形成するのは、双方とも実働においてある場合である。彼は「完成」がロゴスとしてまたエルゴン（実働）として対応する力能との関係において二つの文脈に分けて語られることによって、ロゴスとエルゴンの非対称性と相補性を解明する。彼は展開して言う。

[h] [E] 今や、部分的なものを生きている統合的物体の上で把握しなければならない。というのも、部分 [eg. 視覚] が部分 [目] に対してある仕方と同じように、統合的感觉は可感覺的な統合的物体 [個体] に対し、このようなもの [生きている統合的物体] である限りにおいて、類比を持つからである。だが、魂を失ってしまったものではなく、魂を持っているもの [統合体] が [エルゴン上] 力能にあって、その結果 [今・ここで] 生きている (412b22-27)。

彼はここで「生きている統合的物体」の上で実働する部分をエルゴン次元で分析する。それによりロゴス次元における記述との対比を鮮明にし、また相補性を明らかにする。先にロゴス上、視覚が分離されると、「目」は同名異義になることが確認されたが、視覚と目の関係は、ここでは統合的感觉と可感覺的な統合的物体 [個体] の関係に対し、「このようなもの [生きている統合的物体] である限りにおいて」という限定のもとに類比が成立するとされる。部分は統合体が生きている限りにおいて、生命を保持し例えば視覚は魂との類比を保持する。部分は統合的物体からエルゴン上切り離されることはないことが確認される。

かくして、エルゴン上、形相はそれが内属している統合体に、外的に何も妨げるものがなければ、実働している。「魂を失ったものではなく持つものが、[エルゴン上] 力能にあって、その結果生きている」。ここで彼は、統合体はそれ自身としてエルゴン上能動的な待機力能においてあり、いつでも実働しうることを確認する²¹。

アリストテレスは「魂の諸力能 (*ton dunameōn tēs phsuchēs*)」という表現を用いるが、生きている魂が諸器官を介して実働する能動的な待機力能のことを語っている。彼はその種類に言及して言う、「われらは諸力能とは、榮

養摂取力能、感覚力能、欲求力能、場所上の運動力能、思考力能であると語った」(II3.414a29-32)。生きている人間はこれらの力能が器官を介して実働すべく魂に帰属するものとされる。

ひとはここに統合体が現に生きている以上、力能においてではなく少なくとも幾つかは実働においてであるとアポリアを提示するでもあろう。とはいえ、睡眠と覚醒は双方とも生命活動であるが、睡眠は覚醒しうものとして待機力能においてであると語りうる。かくしてアリストテレスは、完成にあるものの待機力能と実働との関係は「類比項を共に見ること」によって、エルゴン上確認すべきであると言う。

ものごとが「力能においてある」とわれらが言う仕方ではなく内属することが実働である。だが、われらは、例えば木のなかにヘルメスがまた線全体に半分が、というのもそれは分離されるでもあろうから、さらに知っている者でありかつ、知識を観想することができる者でありながら、知識を観想していない者が「力能において」と言う。われらが言うとしていることは帰納によってそれぞれについて明らかであり、あらゆるものについて [L] 定義形成句を求めるべきではなく、[E] 類比項を共に見ることによってまた探求すべきである、ちょうど建築している者が建築力能あることに対して、そして覚醒していることが眠っていることに対して……という仕方である (1048a30-b2)。

これは [E] エルゴンアプローチである。これら待機力能の場合は [E] 事例の帰納により類比項を「共に見る」つまり帰納的に観察することによって知られる。生きているか否かは観察によって明らかである (412b25)。身体がその実働の力能である生きうる態勢にあるかもそれにより明らかとなる。先に知識を持つことは睡眠に、そして知識を観想することは覚醒に類比されたが、待機力能の実働との関係はロゴスの形成によってではなく類比項を見るエルゴンによって把握される。魂が内属し完成にある統合体の実働例えば覚醒に対する睡眠の関係のようなものとして、生きていることに対する「魂を持つものが力能にあってその結果生きている」そのような統合体が睡眠の如き力能にあることが類比を見ることにより知られる。

それ故に、「実働としての実体」は類比を見ることにより力能と実働が把握されるのに対し、「ロゴスに即した実体」としての魂はエルゴン上実働しているが、ロゴス上力能と完成双方を分節せざるをえず、そこで存在様式としての「完成」に訴えてその定義が遂行される。従って、定義においては同名異義原理が適用されている。ロゴスによる部分の分節はエルゴンによる不分離においてあるものとは異なる意味表示を持つ。その代償を払いつつも、「魂は何であるか」をロゴスにより捉えることは重要である。魂は一なる存在者であることが認識されるからである。

4.8 ロゴスとエルゴン二つの文脈において見出される完成

彼は以上のことから力能と完成、さらには力能と実働の関係を整理して言う。

[i] しかしながら、種子と種子の器 [果実] は [未完の] 力能においてそのような [受粉 (精) を介して魂を持つ] 物体である。かくして、かたや (C2) [E] 切断そして視がそうであるように、覚醒はこの [生きているという] 仕方で完成である、他方、(C1) [L] 視覚と道具の能がそうであるように、魂は [ロゴスに即して] そう [完成] である。他方、物体は [ロゴス上] 力能にあるものであるが、しかし、ちょうど [ロゴス上] 瞳と視覚が目であるように、かしこでは魂と物体が生物である。[j] かくして、魂が物体から [エルゴン上] 離れているものではないこと、あるいはもし魂が自然本性上可分割的なものであるなら、その或る諸部分は離れているものではないこと、不明瞭ではない (412b26-413a5)。

種子や果実の内部にある種子はエルゴン上未完の力能において統合的物体に成るべく、ロゴスにより統帥的に秩序づけられている。その生成の完成にある統合体は待機力能にあって、その結果生きている。「かくして」とアリストテレスは完成の二つの文脈を確定する。「かたや (C2) [E] 切断そして視がそうであるように、覚醒はこの [生きているという] 仕方で完成である、[413a1] 他方、(C1) [L] 視覚と道具の能がそうであるように、魂は [ロゴスに即して] そう [完成] である」。部分目の実働と全体である物体即ち身体

実働としての覚醒が同列に提示されるのは、それは可感覺的統一的物体が生きている限りにおいてである。道具の切断機能も本質が分離されずに完成にあって実働している、ただしこれは人工物が自然物であるかのごとくに理解する限りにおいてであるが。これは完成が語られる一つの確かな文脈である。

ここで彼はなぜ「今や、部分的なものを生きている統一的物体の上で把握しなければならない」とし、類比的な議論をそれ以降展開したかを確認しよう。それはエルゴン上実働と待機能力が観察を通じて類比的に判別されるが、エルゴン上統合体に内属する待機能力とロゴス上質料に内属する力能との関係を理解するためである。彼は部分と全体の関係とエルゴン上とロゴス上の関係を二重の仕方で類比的な関係において理解している。

「部分」を p , 「身体全体」を w , そして双方の関係は全体が部分を統帥する仕方においてあり、その統帥的な関係を $<R<$ であらわし, 「エルゴン上の部分」を E_p , 「エルゴン上の身体全体」を E_w , そして「ロゴスに即した実体の部分」を L_p , 「ロゴスに即した実体の全体」を L_w , そして双方の同様の統帥的な関係を $<R<$ で表す。さらに「部分」同士と「全体」同士のあいだに類比関係 $\uparrow r$ により示す。完成は待機能力を保証する。そのとき二重の仕方で類比が確認される。

$$\begin{array}{ccc}
 \text{「視」} & E_p < R < E_w & \text{「覚醒」=完成にある実働} \\
 \uparrow r & & \uparrow r \\
 \text{閉じている目（視の待機能力）} & & \text{寝ている身体（覚醒の待機能力）} \\
 \text{「視覚」} & L_p < R < L_w & \text{「魂」=ロゴスに即した実体} \\
 & & \text{=第一の完成}
 \end{array}$$

先に「魂の諸力能」のなかに感覺力能を挙げたが, 「視覚」はここでは「魂」と類比的な関係においてあり, 魂が寝ている身体をして覚醒せしめるように, 視覚が閉じている目をして見さしめている。目は視覚の故に常に見ることが許容されている。この実働と待機能力の関係が全体と部分ともに類比的なものであり, $\uparrow r$ により表現されている。これが一つの類比関係であり, 観察により確認される。全体と部分の関係は統帥関係においてあり視覚は魂に支配されるものであることが $L_p < R < L_w$ により, 同様に覚醒が視を統帥してお

り $E_p < R < E_w$ により表現され、双方の実働は類比的に理解されることを示している。これが「部分的なものを生きている統合的物体の上で把握」するその仕方であり、帰納的に類比関係を見ることにより把握される。

視覚や斧の切断の能がそうであるように、魂はロゴスに即した実体である。これらはエルゴン上内属し分離されないが、ロゴスに即してのみ「第一の完成」である。ロゴスに即した形相は実働としての実体、形相の存在様式から判別される。このロゴスを持つ統合体が待機能力にあってその結果実働している。かくして、このロゴスに即した完成が確立されなければ、力能と実働の二種類が判別されずに、従来のように運動に即した力能とそのエルゴンとしての分析のみが提供されるだけであつたであろう。彼は、エルゴン上類比を見ることによって確立した待機能力との対比として、ロゴスに即して分離された力能と完成について事例を挙げて説明する。「物体は[ロゴス上] 力能にあるものであるが、しかし、ちょうど[ロゴス上] 瞳と視覚が目であるように、かしこでは魂と物体が生物である」。これは無時間的、普遍的なロゴス次元における記述である。他方、それとの対比において、個体としての統合体は生成消滅すること明らかであり、生きている限りにおいて双方は分離されず、類比項を観察することにより力能と実働の関係が確認される。

彼は結論づける。

[j] かくして、魂が物体から[エルゴン上] 離れているものではないこと、あるいはもし魂が自然本性上可分割的なものであるなら、その或る諸部分は離れているものではないこと、不明瞭ではない(413a3-5)。

最後に、彼は魂の或る部位が物体の完成ではないそのような部位のありうることに触れ、「何かの完成」ではない部位があるとすれば、離れてあることに問題はないとする。アリストテレスは第一章を結論づけて言う。

[k] というのも、或るものどもの部分それら自身の完成があるからである。しかしながら、或るものどもに関しては少なくとも、いかなる物体の完成でもあらぬことの故に[離れてあることを]何も妨げない。しかしなお、魂は船の舵取り船員のような仕方です[寄航後上陸するように]物体の完成であるかは不明瞭である。かくして、これにより要約的に魂

について規定されたものとせよそして見取り図が描かれたものとせよ(413a5-10)。

結論

アリストテレスのロゴスとエルゴンの相補的展開はあらゆる適切な学的探究において最も基礎的な方法として機能している。進化生物学は不可視な魂を認めないことから、勢いエルゴンの数学的、統計的处理という生物学の固有性である生命というところから離れたところで理論化を図った。それはアリストテレスからすれば生物学の現場から離れたものでしかなかった。自然主義的態度が不可視なものの実在性を認めない限り、エルゴン次元への偏りがどこまでも指摘されることになる。不可視なものがエルゴンにおいて顕在化させられることこそアリストテレスの学的営為の存在理由であった。ロゴスがエルゴンに内在することにより実働し、エルゴンが普遍化されロゴスに組み込まれることにより様相的定義は一性を獲得した。アリストテレスの様相存在論がその後のあらゆる理論化の営みの規準としてよい理論とそうでないものを識別してきたように、今後もこの規準のもとに識別されることになるであろう。そこにのみ大統一理論が構想され期待されうるからである。

註

- ¹ Stalbaum は「諸エルゴンにおいて考察するひと」の解説として、「視覚や聴覚さらに感覚の作用の結果に基づき認識することを学ぶひと」のことだとしている。G. Stallbaum, *Platonis Opera Omnia*, Vol.I. SecII, ad. loc. (Gothae (Garland Pub.), 1850 (1980))
- ² M. Heidegger, *Aristoteles, Metaphysik Theta 1-3*, Gesamtausgabe Band33., S.9.彼は冒頭で次のようにこの巻の研究対象を *energeia* と *dunamis* だとしている。"Die für sich selbständige und in zehn Kapitel aufgeteilte Abhandlung hat zum Gegenstand ihrer Untersuchung *dunamis* und *energeia*, nach der lateinischen Übersetzung *potentia* und *actus*, nach der deutschen 'Vermögen und Verwirklichung' bzw. 'Möglichkeit und Wirklichkeit' (S.3).

他方、彼は『アリストテレス哲学の根本概念』では '*entelecheia*' を「終局としての存

在者の現存，現的存在（Gegenwart, Gegenwärtigsein）」とやはり「現実態」との関連において特徴づけている（GA18, S296）。彼はそこで Theta3.1047a30sq と Theata8.1050a22sq を引用し両者を或る仕方 で判別している。M. Heidegger, *Grundbegriffe der Aristotelischen Philosophie*, S.295-6 GA18, 1924. *Entelecheia*: »Gegenwart, Gegenwärtigsein eines Seienden als Ende« in Sinne des letzten Punktes, das fertig ist, das sich in sich selbst in seinem »Ende« hat—telos as Charakter des Daseins, das Fertigsein ausmachend; *entelecheia*: das, was sich in seinem Fertigsein halt, was im eigentlichen Sinne da ist. *Energeia* dagegen *sunteinēi pros tēn entelecheian*, »spannt sich aus zum Ende« -- auch ein Charakter des Daseins, aber so, dass er das Seiende in seinem Dasein in der Weise bestimmt, dass es *nicht in seinem Fertigsein da ist*; *energeia*: der Seinscharakter des *im Fertigwerden Begriffenseins*. Im Herstellen Hergestelltwordensein ist eine bestimmte Weise des Daseins — nur wenn man das sieht, ist es möglich zu sehen, was Bewegung ist: das Dasein eines Seienden, das ist in seinem Fertig *werden*, aber noch nicht fertig *ist*. *Energeia* ist die *kinēsis*, aber nicht *entelecheia*. *Kinēsis* ist eine Weise des Daseins, ausgelegt auf *energeia*. 彼はここでは双方とも「存在性格」としてエルゴンの次元で理解しており，それぞれ終局において掴んでいる Fertigsein と終局へと自らを引っ張る Fertigwerden の差異において捉えている。

- ³ 近年のアリストテレス研究の註4の混乱は中世例えば Thomas Aquinas においてこれらの様相概念が actus-potentia の対比において理解されたことが遠因になっていると考えられる。例えば、『形而上学註解』第九卷一章のトマスが用いた翻訳は entelecheia/energeia 共に actus と翻訳されている。Quoniam vero dicitur ens „aliud secundum potentiam et actum (*entelecheian*) et secundum opus;.. In plus enim est potential et actus (*energeia*) eorum.. S. Thomae Aquinatis In Duodecim Libros *Metaphysicorum Aristotelis Expositio*, L.IX, I.i, p.423 (Marietti1971). この流れを受けて L. Kosman は「私は‘energeia’をこの論文全体を通じて‘actuality’として翻訳した……テキストは莫大な数の文脈において‘energeia’が‘activity’として理解されうる」と述べて，続ける。「もしそれほど扱いにくくなければ，‘actuality- activity’を……或いは単純にトミスト的な‘act’を用いたい。この論文のポイントはアリストテレス存在論の中心部において actuality は activity であるそしてそれ故に存在は act であるという主張をトマスが見抜いていることにおいて正しいということを論じることである」（L. Kosman ‘Substance, Being and Energeia, *Oxford Studies of Ancient Philosophy*, p.121. n.2, VolII, 1984）。Kosman の近年の *The Activity of Being: An Essay on Aristotle’s Ontology* に至るまでのその後の解釈変更の歴史が示すように，二つの概念の混同されたままである。なお十二世紀におけるアリストテレス全集のラテン翻訳の経緯については次の論文を参照。R. Oasna, *The Latin Aristotle, The Oxford Handbook of Aristotle* pp.665-

689 (OUP 2012).

- ⁴ 「完成 (*entelecheia*)」は新造語であるが、*Entelecheia* は四つ (*'en'*, *'telos'*, *'echein'*, *'-eia'*) ないし三つ (*'entelōs'*: 副詞 (*entelēs*: 形容詞)), *'echein'*, *'-eia'*) の語句、語尾から構成されている。この語は疑いもなく *'telos'* (ゴール) から派生しておりそして前置詞は容易に名詞と結合し副詞 *'entelōs echein'* を形成する。Donaldson はこの語の構成を四つの語「ゴールにおいてあること (*en-telos-echein-eia*)」から造られたとしている。J. H. Donaldson は 'From all this it clearly appears that Aristotle derived *entelecheia* from *en*, *telos* and *echein*, on the analogy of *nouneches*' (New Cratylus p.525 (London 1850) と語っている (cf. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics*, II, p.246 (Oxford 1924)). 他方、形容詞表現 *entelēs* (complete) も *telos* を含んでおり、さして相違はないと言えるが、より近い表現を探すとすると先の副詞的用法の抽象化が適切であると言える。というのも動詞 *'echein* (have)' は形容詞よりも *'hūtōs echein'* のような「しばしば様式の副詞と共に」一つの状態や一つの様式「この仕方であること」を意味表示するからである。一つの副詞 *'entelōs'* を伴って、*'entelōs - echein'* は「完成においてあること」を即ち完成という一つの在り方を意味表示していると思われる。末尾辞 *'-eia'* は女性形における抽象名詞を構成している。Smith はその事例として「真理 *aletheia* (truth)」を挙げ、これは形容詞 *'alēthes* (true)' から派生する「*-eia* における抽象名詞」であるとする (Smyth, *Greek Grammar*, p.51, 231 (Harvard)). この語尾は新造語が複数形名詞表現や動詞表現を持たない抽象概念であることを示している。

私はこの語の構成をテミスティオスと同様に *'entelōs echein* (完成にあること (to be completely))' に接尾辞 *eia* を付けて抽象名詞化 [完成] したものと理解している。Themistius は適切に述べている。..*All' ūn legetai tēnikauta teleion einai kai entelōs echein, hēnika an apollabē tēn oikeian morphēn, eph'hēn espoudakei. Tautēn ūn tēn morphēn kai to eidos ei tis entelecheian onomazoi, ū dikaiōs an sukopantoito hōs panu tōi xenō onomati kechrēmēnos. Ei gar ta proeirēmēna alēthē, kai hē teleiōsis hekastō para tū eidūs kai to entelōs echein para tēs morphēs, sēmainoi ūden allo hē entelecheia ē tēn hexin tēs teleiōtētos* (Themistius, *In Aristotelia libros de anima paraphrasis* Vol.5.3, p.39. lines15-20). 翻訳すると、「かくしてそれへと熱心に求めた固有の形姿を受け取るそのときに、完全であることそして完成にあること (*teleion einai kai entelōs echein*) が語られる。そのとき、もし誰かがこの形姿と形相を「完成 (*entelecheian*)」と名づけた場合に、彼は全く新奇な語を考え出した者であると批判したとしてもそれは正しくないであろう。もし先に言われたことがらが真であり、また形相からそれぞれにとつての完全性がそして形姿から完成にあることがあるなら、*entelecheia* は完全性の態勢 (*tēn hexin tēs teleiōtētos*) とは別の何ものをも意味表示しない」。テミスティウスはここで「完成」を「完全性の態勢」として理解している。ここでは述べられないが、もし彼が「完成」は生成の終局で持つ形姿の完全性の態勢であるだけでなく、始

動因が持つ形相の完全性の態勢でもあるとも理解しているとするなら、私は十分に同意できる。この点は後に明らかになるであろう。

なお Alexander Aphrodisias は魂の定義の註解で、魂のような「テロス（ゴール）に
おいてあることによって、いかなるその根拠も存在しない事物」について「完全かつ完
成 (*teleiōtēta kai entelecheian*) と語ること」がアリストテレスの「習慣 (*ethos*)」で
あると指摘して言う。「魂は「第一の完成」である。というのも「完全 (*teleiōtēs*)」は二
義的であったからである。かたや、それは態勢そして力能 (*hexis kai dunamis*) であ
る。他方、それは力能からの実働 (*apo tēs dunameōs energeia*) だからである。それ
らのうちの力能が第一のものであったところの、そして形相が力能に即して完全であ
ったところのものがそう「第一の完成：魂」である」(De Anima, p.16, 7-10)。ここでア
レクサンドロスは新造語を伝統的な「完全」という語により説明していると言える。そ
の枠のなかで「完成」の一義として「力能」が挙げられるが、これが第一現実態と第二
可能態の同定という伝統に繋がったのだと思われる。それに対し、私は、アリストテ
レスがロゴスである魂は身体がそれのためにあるところのそれであり、また身体を動かす
ものであることに基づき、質料因を制御す目的因でありまたそれに内属することによ
って能動者を始動因たらしめるものでもあるロゴスの存在様式を表現すべく「完成」を導
入したことを、さらに「完成」と「(待機) 力能」の概念を判別していたことを本文で明
らかにするであろう。「待機力能」と完成においてある対応する実働との「類比を共に見
ること」により把握されるが、完成にあることが待機力能を保証するという意味におい
て、完成においてある統合体にのみそれは内属する。

アリストテレスは副詞 *entelōs* を力能との関連においてこう語っている。「類似の音節
に基づく名前は類似である。……例えば、「数において欠いているが (*plētei men en-
deōs*)、力能において完成においてある (*dunamei de entelōs*)」」(Rhet.ad Alex.28.
1436a12)。彼はここで完成においてある統合体は実働することもしないことも自らの裁
量においてある待機力能を表現していると思われる。ロゴスそれ自身が力能にあるとさ
れているわけではない。(ただし編者 L. Spengel はこの書についてと真作であることを
否定している (*Anaximenes Ars rhetorica quae vulgo fertur Aristotelis ad Alexan-
dram*, p.93 (Olms 1981)))。‘entelecheia’ は約 140 回アリストテレス全集に見られる (cf.
Thesaurus Linguae Graeca (TLG))。

D. Laetius はアリストテレスの *dunamis* の二義性について言うとき、待機力能の概
念を実働に即した力能と共に提示している。「力能においてあること (*to dunamei*) は
二義的である、かたや態勢に即して (*kath'hexin*) 或いは実働に即して (*kat' energeian*)
ある。ちょうど覚醒している者は魂を持つと語られ、他方、眠っている者は態勢に即し
てそう語られるように」(Lives of Eminent Philosophers, V.34 (Loeb 1972))。私には
ディオゲネスは待機力能の概念を正しく把握していたと解する。ただし覚醒と睡眠を力
能の二義に対応させているが、これは後に、「完成」が二つの文脈で語られるさいにロゴ

スの存在様式の事例として「知識」がエルゴン次元の事例として「知識を観想すること」が挙げられていることと両立しない解釈であることを明らかにする。「知識を持つが実働しない」状況を統合体の睡眠との類比で理解されるが、「完成」は「知識」の存在様式であって、統合体がそれを持つこととは判別されている。さらに彼が未完の力能と完成においてあるものの力能を判別していたかはディオゲネスの一文からは不明である。

D. Ross は *entelecheia/energeia* について「たいていの場合アリストテレスはこれらをまさに同義語 (exact synonym) として用いている」と言う。その影響は大きく、最近でも J. Beere は 'Aristotle sometimes switches back and forth between the two, as if they were synonyms' と言い、A. Anagnostopoulos は 'although Aristotle uses *entelecheia* interchangeably with *energeia* in this context [definition of *kinesis*], there is no independent reason to think that *entelecheia* can mean 'activity'' と言う。彼らはそれらが用いられる文脈を適切に理解してはいない。これを 'synonymous reading' と呼ぶ。D. Ross, *Aristotle Metaphysics II.*, p.245 (Oxford 1924). J. Beere, *Doing and Being An Interpretation of Aristotle's Metaphysics Theta*, p.218, 21, (Oxford 2009). A. Anagnostopoulos, Change in Aristotle's *Physics* 3, p.36, *Oxford Studies in Ancient Philosophy* Vol.XXXIX 2010

なお「力能」についても『形而上学』IX 巻の解釈として、Ross は 'two senses of *dunamis*': を 'power' (ch.1-5) と 'potentiality' (ch.6-10) に分節している。彼は一方で power について 'primarily a power in A to produce a change in B, or in A, considered in one respect, to produce change in itself in another respect' と「運動に即した力能」の意味で解し、potentiality について 'a potentiality in A of passing into some new state or engaging in some new activity' (ibid, p.240) と述べ、やはり「運動に即した力能」の文脈で解し、待機力能 (ch.6-10) を捉え損ねている。S. Makin, は最近の註解でこう述べている。'The norm is that the noun *dunamis* will be translated 'capacity' in 9.1-5 and 'potentiality' (nominative), 'potentially' (dative) in 9.6-10'. *Aristotle Metaphysics Book Theta*, xxiii, (Oxford 2006).

M. Frede が次のように言うとき、現代研究者による様相概念理解の深刻さそのまま伝えている。'Aristotle's discussion seems to be unclear, disorganized, and confusing. In fact, some important commentators, like Bonitz and Ross, have accused Aristotle of being himself confused. They have accused him of almost immediately confusing again the very notions he sets out to distinguish, namely the notion of potentiality and the notion of some kind of active power, i.e., the ability something might have to produce a change in something else'. (p.176). 'So Aristotle would be claiming that *dunamis* in the relevant sense extends beyond *dunamis* in the basic sense [of an active power]. The claim, hence, is not that besides *dunamis* in its basic sense there is another kind of *dunamis*, namely, potentiality. The claim is

rather that *dunamis* in the sense of ‘potentiality’ covers *dunamis* in the basic sense, but extends to other kinds of *dunamis*. Aristotle’s Notion of Potentiality in *Metaphysics Theta*, p.184 *Unity, Identity, and Explanation in Aristotle’s Metaphysics*, ed. T.Scaltsas et alter. (Oxford 1994).

S. Waterlow は「運動」と「変化」のアクセスの異なりを把握せず、そして actuality-potentiality の枠組みでその問題の研究史を纏めている。彼女は言う、‘*kinēsis* (change) is the actuality of that which is potentially’.... Some render this as ‘actualization’ and ‘realization’: misleading terms, in that they can mean the process of becoming or making real or actual. Aristotle cannot be read as defining process by ‘actualization’ in any such sense, since that would be blatantly circular. (S.Waterlow, *Nature, Change, and Agency in Aristotle’s Physics* p.112 (Oxford1982)). C. Witt, は言う、‘Aristotle uses both words [*energeia*, *entelekheia*] in different texts that describe the same distinction between potential and actual being... the fact that Aristotle explicitly tells us that *energeia* has come to refer to actualities (*entelekheia*) strongly suggests that either translation [‘activity’, ‘actuality’] can be appropriate depending contexts. (p.13)’, *Ways of Being, Potentiality and Actuality in Aristotle’s Metaphysics*, (Cornell U.P. 2003). D.Charles, *Aristotle’s Philosophy of Action*, p.16: *entelekheia* = ‘actualization’ (London 1984). E. Hussey, *Aristotle’s Physics Book III and IV*, p.1: *entelekheia* = ‘actuality’ (Oxford 1983).

- ⁵ M. Burnyeate, Aristotle on Understanding Knowledge, *Aristotle on Science: The Posterior Analytics*, p.97, ed.E.Berti (Padua 1981). K. Chiba, Aristotle on Heuristic Inquiry and Demonstration of What It Is, *Oxford Handbook of Aristotle*, p.198, ed. C.Shields (Oxford 2012).
- ⁶ 「ロゴス・理に即して (*kata ton logon*)」は通常「感覚に即し」(eg.986b32, 1018b34, 188b32, 189a4) や「質料に即して」(986b20, 729a31, 317a24, 1098a21) また「数において」(eg.1039a28) と対比され、直接的な知覚とは異なる仕方で行われる。この対比の延長線上で「ロゴスに即した実体 (*ūsia kata ton logon*)」と語られることがある (e.g. 1025b18, 1035b13, 1042a31, 412b20)。
- ⁷ プラトンは『テアイテトス』において、運動を能動と受動の二つの力能に基づく二種類の運動があり、それが万物を構成しているとする「より洗練された (*polu komphsoteroi*)」見解を紹介している。「万有は運動であったそしてそれ以外の他の何ものでもなかったが、運動には二種類あり、かたや数においてそれぞれ無限であるが、一方は能動する力能をもち、他方は受動する力能をもっている」(156a)。プラトンはこの現実世界はヘラクレイトスの万物流転説を支持して、何一つ自己同一性を保つものではなく流動しているという見解を取っていたので、これらの見解に同意していると思われる。その場合、彼はアリストテレス的には運動と「運動に即した力能」とによりこの世界が構成されてい

ることに同意している (cf. *Politic.* 305c, *Tim.* 46e, 48d, *Soph.* 218c, 235a, 263a)。

- ⁸ H. Smyth, *Greek Grammar*, p.389, 1709b (Harvard 1956).
- ⁹ S. Makin, *Aristotle Metaphysics Theta*, p.xxviii (Oxford 2006).
- ¹⁰ D. Ross, *Aristotle's Physics*, p.7 (Oxford 1936).
- ¹¹ C. Darwin, *The Origin of Species*, (Popular Impression) (London 1906).
- ¹² Masters, R. D. Gradualism and Discontinuous Change, *The Dynamics of Evolution*, ed. Somit, A. and Peterson, S.p.288 (Cornell University Press 1989).
- ¹³ M. Delbrück, 'Aristotle-totle-totle', ed. J. Monod and E. Borek, *Of Microbes and Life*, pp.50-55, New York 1971.
- ¹⁴ E. Mayr, *The Growth of Biological Thought*, p.12 (Cambridge Mass 1982).
- ¹⁵ W. Heisenberg, *Physics and Philosophy*, p.148 (Penguin 1989(1958)).
- ¹⁶ 大塚淳「生物学における目的と機能」p.61-4 松本編『進化論はなぜ哲学の問題になるのか』(勁草書房二〇一〇)。
- ¹⁷ Eliot Sober, 『進化論の射程——生物学の哲学入門——』p.167 松本, 網谷, 森元訳(春秋社 二〇〇九)。
- ¹⁸ 西脇与作「生命を自然的に捉える」p.158 横山編『ダーウィンと進化論の哲学』(勁草書房二〇一一)。
- ¹⁹ R. Dawkins, 『ブラインド・ウォッチメーカー——自然淘汰は偶然的か——上』p.82 中嶋, 遠藤, 遠藤, 疋田訳(早川書房 一九九三)。
- ²⁰ 森元良太「進化論の還元不可能性」p.176 横山編前掲書。
- ²¹ 「力能において生命を持つ自然物体」とは, 統合体の質料としてみなされる部分の集合として待機力能においてある。その時実際には, 何も外的な妨げがなければ, その自然物体は実働においてある統合体として指示されうるそのような同時性を満たしている。「それ故に, 魂と物体が一つであるかどうかと探求するには及ばない」(412b6)。質料が力能においてあり形相が実働においてあり, 両者が一なるものである時, それが生きていることなのである。しかし, 力能は一般的には「すべての力能は同時に相互に矛盾する命題についてある」(1050b8)と言われるものである限り, 完成においてある統合体の待機力能は集積の全体としての骨や肉のことであり, それは目や手等異質部分の集積の全体でもあるが, 魂の適切な受動能力を失うことがありうるということである。魂の定義の質料部分である「力能において生命を持つ自然物体」とは, 可能的には生命を持たない物体, 死体でもある。従って, 身体と統合体の間の同一性述定は, エルゴン次元のこととしては必然的ではなく, 同時性の故に認められる事実的な一性の述定である。このことは生と死を持つ個体が語られる次元であるから当然である。

他方, 説明言表としては, 最終質料は常に統合体を実現する十分条件を特徴づけるものとして形相と必然的な関係においてある一性が表現されている。これは魂についての定義の形成により必然的な知識が得られる, 普遍的な思考が成立する生物学としての次

元である。そして、そこにおいて学知が成立するのは、説明言表が指示するものが常に完成においてある存在を特定することができたからである。なおアリストテレスは、質料と形相が相関関係にあるとすれば、生者が死者の力能、質料であり、死体は人間から生成するのではないかとの主張を拒否している。それは「付带的」に成立する表現であって、死者の力能は、その生者の力能でもあるその質料、例えば骨や肉である(1044b36ff)。換言すれば、魂から身体が切断された時、それはもはや統合体の力能においてはなく、同名異義的にしか身体ではないのである。各部分に関しても同様である。

以上の議論から、心身論のパズルを提示した人々は、アリストテレスの質料形相論そして力能と完成ならびに力能と実働の相補的關係を適切に把握していなかったと結論することができる。Ackrill が、一方、同名異義原理により身体は生きた身体としてしか語り得ないとされ、他方でそれにもかかわらず身体が potentiality であるとされていることに当惑し、「魂の定義は解釈を拒絶する」と述べる時、彼は能動と受動の同時性の場を、さらにはロゴスとエルゴンの相補的展開を捉え損ねたのであった。J. Ackrill “Aristotle’s Definitions of psuche”, p.126 *Proceedings of the Aristotelian Society*, 73 1972-73.

B. Williams が Body-body アポリアに陥ったのも同様の理由からであり、彼は生きた身体としてしか語り得ない body ということで、実は生きている統合体のことを意味していたのであった。そしてアリストテレスの「力能において生命を持つ自然物体」とは、待機力能において生きている人間の質料としての即ち集積の全体としての Body の記述なのであった。一方、この Body と統合体の間には、必然的ではないが事実的な同一性記述が、何も妨げがなければ、その同時性の故になされる。他方、生物学的知識としては、力能において生命を持つ自然物体が待機力能となるのは、どの特権的な器官が成立するどの時点であるかを特定することにより、魂についての普遍的で必然的な知識を提供する。この同時性の故に Body と body の二つの身体を要請する必要はなかったのである。B. Williams “Hylomorphism” p.192 *Oxford Studies in Ancient Philosophy* Vol IV 1986.

M. Gill も同様な問題意識から、統合体を構成しまたそれが死ねばそれへと分解されていく「構成的な質料」と、肝臓や肺がその機能を果たし全体の生命を維持するそのような「機能的質料」を区別する。M. Gill, *Aristotle on Substance* p.132 (Princeton 1989). ここに実はパズルは存在しないのである。彼らが困惑したのは、力能においてある質料の形而上学的かつ個別科学的特徴を理解しそこねたからである。アリストテレスは彼の質料形相論を、形而上学的思索と個別科学の実践のフィードバックのうちにロゴスとエルゴンの相補性として構築したのであった。